

鎌倉市二階堂

国指定史跡

よう ふく じ あと
永福寺跡

国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査報告書

— 遺構編 —

平成13年3月

鎌倉市教育委員会

国指定史跡 永福寺跡 遺構編

平成十三年三月 鎌倉市教育委員会

序 文

鎌倉市教育委員会
教育長 熊谷 徳彦

昭和56年度に試掘調査を始めた永福寺跡は、平成8年度までの17年間の発掘調査を終え、それまで幻であった永福寺の姿を明らかにしてきました。二階堂・阿弥陀堂・薬師堂が複廊で繋がり、翼廊・中門・釣殿といった寝殿造り風の建物と一体の建物群を構成していること、建物の前面には大きな池があり橋が架けられていたこと、現在の光学器械で測ったのと同じように正確に角度を測っていること、背景となっている山の上にも人の手が加わり、堀割や経塚などがつくられているなど多くのことが解りました。これらの建築群や庭園は釈迦・阿弥陀・薬師如来の浄土として、奥州攻めで亡くなった源義経、藤原泰衡ほかの諸霊を慰めるにふさわしい場であると思います。

発掘調査の報告は、年度ごとに行ってきましたが、今回はそれらの調査報告を一つにまとめました。発掘調査は毎年面積を決めて行っていますから、遺構がとぎれとぎれになっていたり、遺構の解釈によって図面の書き方が違っているものがあります。今回はこれらを再度考慮し直し、まとめ直しました。

本書は国指定史跡永福寺跡の本報告書の内、平成11年度に国庫・県費補助を受けて実施した、「遺構」にかかるものです。長期にわたる調査の実施に際し、整備委員会の先生方には大変お世話になりました。また周辺住民の方々をはじめ、関係者の方々に心からお礼を申し上げます。この間、大岡実・大森順雄・赤星直忠・李家正基・吉川雷先生がお亡くなりになっています。お亡くなりになった先生方のご冥福をお祈りすると共に、一部ではございますが本報告が成ったことを御霊前に報告いたしたいと思います。

例 言

1. 本書は国庫及び県費補助を受けて実施した神奈川県鎌倉市二階堂所在「国指定史跡永福寺跡」の環境整備事業に係る発掘調査報告書の本報告のうち遺構編である。
2. 昭和56年度の試掘調査は史跡永福寺跡試掘調査団（団長大三輪龍彦）が鎌倉市教育委員会と史跡永福寺跡整備計画準備委員会・文化庁記念物課・神奈川県文化財保護課の指導・助言を受け、昭和57年度の試掘調査は史跡永福寺跡試掘調査団（団長大三輪龍彦）が鎌倉市教育委員会と史跡永福寺跡整備計画準備委員会（昭和57年6月24日、史跡永福寺跡整備委員会に改編）昭和58年度の発掘調査は史跡永福寺跡発掘調査団（団長大三輪龍彦）が鎌倉市教育委員会と史跡永福寺跡整備委員会・文化庁記念物課・神奈川県文化財保護課の指導・助言を受け、昭和59年度～平成8年度までの発掘調査は鎌倉市教育委員会が、史跡永福寺跡整備委員会・文化庁記念物課・神奈川県教育委員会文化財保護課の指導・助言を受け実施したものである。
3. 本報告「遺構編」作成の体制

原稿執筆、図及び図版作成の分担は以下の通りである。

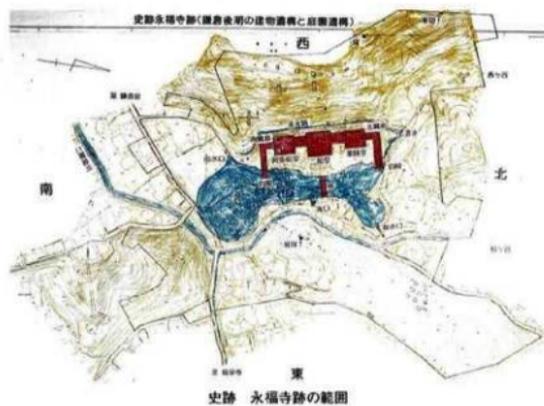
原稿執筆	第1章第1節・第2節	菊川 泉			
	第1章第3節～第5節・第2章・第3章・第4章・第5章		福田 誠		
図版等作成	福田 誠	原 廣志	菊川 泉	神山 晶子	須佐 直子
	木村 晴美	須佐 仁和	早坂 伸市	久保田裕美	長友 純子

編 集 福田 誠

4. 本書に使用した遺構写真の内、昭和56年度～昭和62年度までの全景・遺物写真は主に木村美代治が、昭和63年度～平成8年度（北釣殿・二階堂・橋・遣水等）までの全景写真は、主に木村美代治がリモコン式高所撮影装置を用い、遺構個別写真は福田 誠・菊川 泉が撮影した。



永福寺跡全景（南から）



史跡 永福寺跡の範囲



二階堂正面（東から）



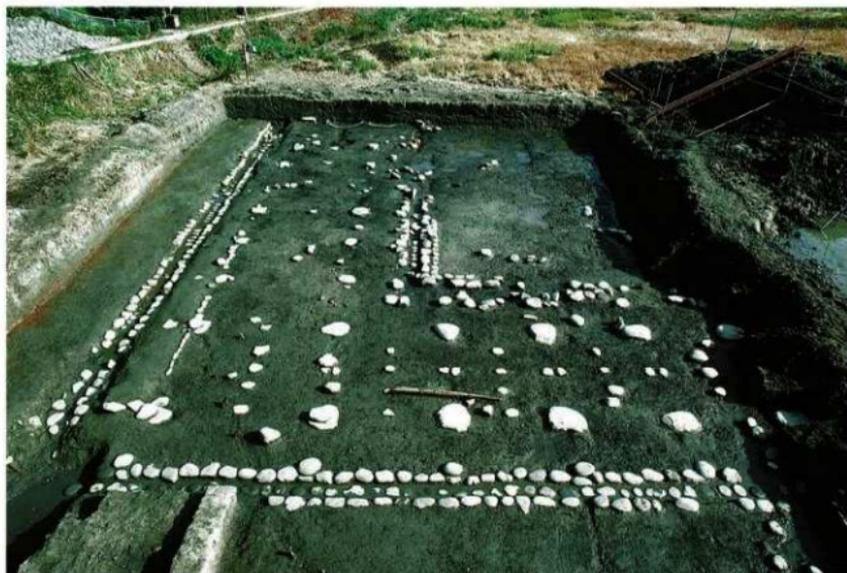
本堂正面（東から）



二階堂正面東岸 Ⅱ期の橋の取付き（西から）



経塚内 経筒出土状況



北翼廊（西から）



北中門と釣殿（東から）

—本文目次—

第1章 歴史的環境	1
第1節 永福寺の位置	1
第2節 歴史の概略	1
第3節 調査に至る経過	5
(1) 昭和56年以前の考古学的調査	5
a. 昭和20年以前の考古学的調査	5
b. 昭和20年以降の考古学的調査	7
(2) 県遺跡指定・国指定史跡の指定	7
第4節 調査の経過	7
(1) 調査の体制	7
a. 史跡永福寺跡整備委員会名簿	9
(2) 確認調査	9
(3) 本調査	9
第5節 調査の方法	9
(1) 調査基準点の設置	9
(2) 調査地の設定	11
(3) 調査の概要	11
a. 昭和56年度の調査 (確認調査)	11
b. 昭和57年度の調査 (確認調査)	12
c. 昭和58年度の調査 (二階堂の調査)	13
d. 昭和59年度の調査 (阿弥陀堂と南複廊の調査)	13
e. 昭和60年度の調査 (阿弥陀堂と南翼廊の調査)	13
f. 昭和61年度の調査 (薬師堂の調査)	13
g. 昭和62年度の調査 (薬師堂の北辺に取り付く北翼廊の調査)	13
h. 昭和63年度の調査 (北翼廊と釣殿・庭園の調査)	14
i. 平成元年度の調査 (二階堂と北複廊の調査)	14
j. 平成2年度の調査 (二階堂前庭の調査)	14
k. 平成3年度の調査 (中ノ島と池南岸の調査)	14
l. 平成4年度の調査 (阿弥陀堂前池と阿弥陀堂正面に架かる橋の調査)	14
m. 平成5年度の調査 (二階堂正面に架かる橋と東岸の調査)	15
n. 平成6年度の調査 (遺水・阿弥陀堂背後の排水路・池東岸の調査)	15
o. 平成7年度の調査 (取水口と池北東部の調査)	15
p. 平成8年度の調査 (池北岸と遺水の調査・山の遺構確認調査)	15
第2章 建物の調査	16
第1節 層序と概要	16
第2節 二階堂	16

(1) 木製基壇	16
(2) 木製基壇東柱掘方	16
(3) 木製基壇東柱	17
(4) 礎石・礎石掘方	18
(5) 縁東	18
(6) 階	18
a. 二階堂正面の階	18
b. 二階堂側面の階	19
(7) 雨落ち溝	19
(8) 二階堂及び木製基壇の規模	19
a. 二階堂の規模	19
b. 木製基壇の規模	19
第3節 阿弥陀堂	19
(1) 木製基壇	19
(2) 木製基壇東柱掘方	20
(3) 木製基壇東柱	21
(4) 礎石・礎石掘方	21
(5) 縁東	21
(6) 階	21
(7) 雨落ち溝	21
(8) 阿弥陀堂及び木製基壇の規模	21
第4節 薬師堂	23
(1) 木製基壇	23
(2) 木製基壇東柱掘方	23
(3) 木製基壇東柱	23
(4) 礎石・礎石掘方	23
(5) 縁東	24
(6) 階	24
(7) 雨落ち溝	24
(8) 薬師堂及び木製基壇の規模	25
第5節 北複廊	25
(1) 礎石・礎石掘方	25
(2) 縁東	25
(3) 雨落ち溝	25
(4) 北複廊の規模	26
第6節 南複廊	26
(1) 礎石・礎石掘方	26
(2) 縁東	27
(3) 雨落ち溝	27

(4) 南複廊の規模	27
第7節 北翼廊(翼廊・中門・釣殿)	28
(1) 礎石・礎石掘方	28
(2) 縁束	30
(3) 雨落ち溝	30
(4) 北中門	30
(5) 北釣殿	33
a. 礎石	33
b. 変遷	33
c. 面取り柱	33
d. 布掘り	33
(6) 北翼廊の規模	34
第8節 南翼廊(翼廊・中門・釣殿)	34
(1) 礎石・礎石掘方	34
(2) 南縁束	34
(3) 南中門	34
(4) 南翼廊の規模	36
第9節 その他の建物	36
(1) 堂前(複廊と翼廊部分)で検出された掘立柱建物	36
a. 北複廊根石下で検出された掘立柱建物跡	36
b. 北翼廊先端部で検出した掘立柱建物	36
c. 葉師堂前面(釣殿脇)で検出した掘立柱建物	36
(2) 東岸で検出した鎌倉石製の溝と石列	38
第3章 庭園の調査	38
第1節 層序と概要	38
第2節 苑池の調査	39
(1) 汀の調査	39
a. 西岸	39
b. 南岸	40
c. 東岸	40
d. 北岸	40
(2) 橋の調査(二階堂前・阿弥陀堂前)	41
a. 二階堂前	41
b. 阿弥陀堂前	47
(3) 島(石組み)の調査	47
(4) 遺水の調査	49
a. I期の遺水・II期の遺水	49
b. III期の遺水	49

c. IV期の遺水	49
(5) 滝口	49
(6) 取水口(Ⅲ・Ⅳ期)の調査	51
第3節 堂前の調査	53
(1) 検出された柱穴等の調査	53
a. 二階堂前・阿弥陀堂前・薬師堂前の柱穴・布掘り	53
b. 二階堂背後の十字形柱穴	53
第4節 堂背後の調査	54
(1) 排水路の調査	54
a. 3溝	54
b. 2溝	55
c. その他の溝	56
(2) 通路・目隠し塀の調査	57
第4章 山の調査	57
第1節 西の山の調査	57
(1) 伽藍背後(西)の山の調査	57
a. H8-トレンチ14~i, H8-トレンチ22	57
(2) 西ヶ谷尾根線上の調査	58
j. H8-トレンチ23~n, H8-トレンチ27	58
第2節 東の山の調査	59
(1) 谷中の平場の調査	65
a. H8-トレンチ1~k, H8-トレンチ11	65
(2) 山の尾根の調査	66
a. H8-トレンチ12	66
b. H8-トレンチ13	65
・経塚の検出	74
第3節 西ヶ谷の調査	84
第5章 まとめ	86

—挿図目次—

図1 位置図	1
図2 史跡指定範囲図	6
図3 試掘調査地点位置図	8
図4 調査地点位置及びグリッド設定・基準点位置図	10
図5 標準土層図	16
図6 整地層の遺物	16

図7	二階堂平面図・エレベーション図	17
図8	阿弥陀堂平面図・エレベーション図	20
図9	薬師堂平面図・エレベーション図	22
図10	基壇外装推定模式図	24
図11	北複廊平面図・エレベーション図	26
図12	南複廊平面図・エレベーション図	27
図13	南複廊かわらけ溜りの遺物	28
図14	北翼廊平面図・礎石掘方見通し断面図・景石立面図	29
図15	北中門平面図・セクション図	30
図16	翼廊柱変遷模式図	31
図17	北翼廊かわらけ溜りの遺物	31
図18	釣殿掘立柱・横木組合せ模式図	32
図19	中門柱変遷模式図	32
図20	南翼廊平面図・エレベーション図	35
図21	南中門東側棟柱柱根	36
図22	掘立柱建物	37
図23	Ⅲ期苑池東岸建物遺構	38
図24	苑池標準土層図	39
図25	池最下層の遺物	40
図26	橋平面図・エレベーション図	42
図27	橋基礎材平面図・断面図・出土部材	43
図28	阿弥陀堂前橋平面図・断面図	45
図29	島平面図・立面図・見通し断面図	48
図30	遣水平面図・断面図	50
図31	滝口平面図・見通し断面図	51
図32	取水口平面図・セクション図	52
図33	2溝・3溝土層断面模式図	54
図34	3溝の遺物	55
図35	2溝の遺物	55
図36	沈殿遺構・堰平面図・エレベーション図	56
図37	伽藍背後(トレンチ14・15)	60
図38	伽藍背後(トレンチ16・17・18・19)	61
図39	伽藍背後(トレンチ20)	62
図40	伽藍背後(トレンチ21・22・23)	63
図41	西ヶ谷尾根線(トレンチ24・25・26・27)	64
図42	谷中の平場トレンチ位置図	67
図43	谷中の平場(トレンチ1・2)	68
図44	谷中の平場(トレンチ3・4)	69
図45	谷中の平場(トレンチ5・6)	70

図46	谷中の平場 (トレンチ7・8)	71
図47	谷中の平場 (トレンチ9・10・11)	72
図48	東の山の尾根 (トレンチ12)	73
図49	経塚 (トレンチ13)	78
図50	経塚平面図・断面図・外容器・経筒・副納品出土状況図 (トレンチ13)	79
図51	経塚外容器 (トレンチ13)	80
図52	経塚出土腰刀・経筒 (トレンチ13)	81
図53	経塚出土副納品 (白磁壺・櫛・念珠)	82
図54	経塚出土副納品 (皆影骨の属)	83
図55	西ヶ谷 (トレンチ28・29・30)	85
図56	遺構変遷図 (I期～IV期)	87

- 附図1 史跡永福寺跡全測図
 附図2 史跡永福寺跡地形測量図
 附図3 柱間図

—写真図版—

図版1	昭和28年当時の永福寺	91	図版22	苑池南岸・島2	112
図版2	昭和56年度・57年度試掘調査	92	図版23	苑池東岸1	113
図版3	二階堂1	93	図版24	苑池東岸2	114
図版4	二階堂2	94	図版25	苑池北岸1	115
図版5	阿弥陀堂1	95	図版26	苑池北岸2	116
図版6	阿弥陀堂2	96	図版27	橋1 (二階堂正面)	117
図版7	薬師堂1	97	図版28	橋2 (二階堂正面)	118
図版8	薬師堂2	98	図版29	橋3 (二階堂正面)	119
図版9	薬師堂3	99	図版30	橋4 (阿弥陀堂正面)	120
図版10	北複廊・南複廊	100	図版31	橋5 (阿弥陀堂正面)	121
図版11	北翼廊1	101	図版32	遣水1	122
図版12	北翼廊2	102	図版33	遣水2	123
図版13	北中門	103	図版34	滝口	124
図版14	北釣殿1	104	図版35	取水口	125
図版15	北釣殿2	105	図版36	2溝・3溝	126
図版16	南翼廊1	106	図版37	溝と塀	127
図版17	南翼廊2	107	図版38	西山の試掘	128
図版18	苑池西岸1	108	図版39	東山・西ヶ谷の試掘	129
図版19	苑池西岸2	109	図版40	経塚1	130
図版20	苑池西岸3	110	図版41	経塚2	131
図版21	苑池南岸・島1	111			

第1章 歴史的環境

第1節 永福寺の位置

当遺跡は鎌倉旧市街の北東に位置し、現在のJ R鎌倉駅の北東約1.8kmにある。鎌倉の外郭をなす山稜に囲まれた谷の一角であり、遺跡地を中心に西ヶ谷・杉ヶ谷・亀ヶ谷・獅子舞など谷がのびる。

このあたりは現在「二階堂」という町名が残り、遺跡地は「三堂」という小字名であり、遺跡地の南には「四ツ石」という小字名もある。これらの地名は廃寺永福寺の存在を示す重要な要素となっている。すなわち、「二階堂」は永福寺の本堂に当たるもので、「吾妻鏡」等の文献ではしばしば永福寺そのものをさす語としても現れる。「三堂」は二階堂に薬師堂・阿弥陀堂の両脇堂を加えたものであろうと考えられる。「四ツ石」という旧小字名は、四つの大きな石があったという言い伝えによるもので、かつては礎石が露出していたことを伺わせる。またこの辺りからは古瓦片が採集されることが多く、古くから永福寺の跡地と考えられていたのである。

第2節 歴史の概略

永福寺の歴史については、古くは貫達人氏が『鎌倉廃寺事典』（昭和55年 有隣堂）の中で文献史料をもとに詳しい考証を行っている。

ここではその成果を参考に永福寺の歴史の概略を述べることとする。

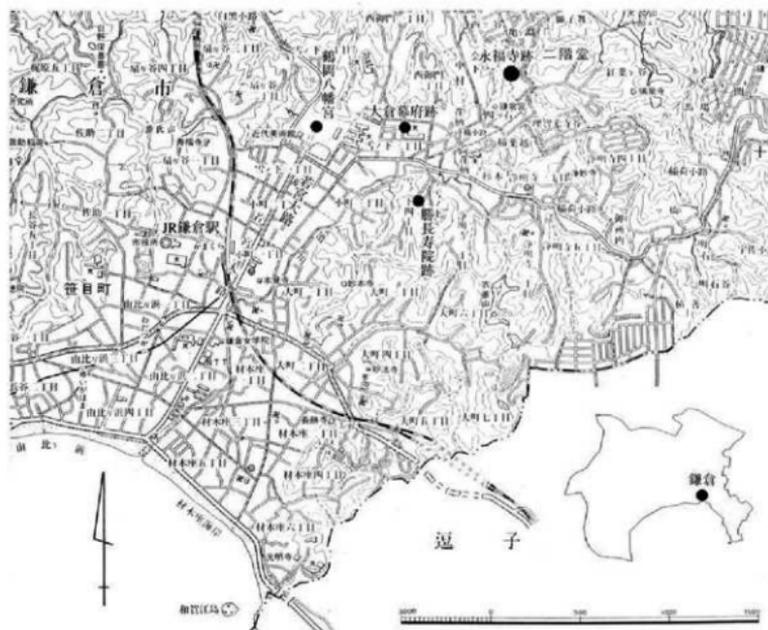


図1 永福寺跡位置図

(1) 創建

永福寺の創建のいきさつを書いているのは、まず『吾妻鏡』である。永福寺初見は文治5（1189）年12月9日条である。

今日永福寺の事始なり。奥州において、泰衡管領の精舎を覽しめ、當寺花構の悲愴を企てらる。かつは數萬の怨靈を有め、かつは三有の苦果を救はんがためなり。そもそもかの梵園等、字を並ぶるの中に、二階大堂 大長寿院と號す。あり。専らこれを模せらるるによつて、別して二階堂と號するか。

この時期は鎌倉幕府のいわば草創期にあたる。文治元（1185）年に平氏が滅亡した後、文治5年閏4月には義経が討伐され、その後、頼朝をはじめとする軍勢が平泉を攻め、9月には奥州藤原氏を亡ぼしている。『吾妻鏡』の言う「數萬の怨靈を有め、三有の苦果を救はんがためなり」とは、こうした事件を背景として、多くの戦死者の供養が、まず永福寺の建立構想の目的であったことを伝えている。また、そのモデルは頼朝が実際に見てきた平泉の大長寿院の二階大堂であったことも伝えている。

次に永福寺に関する記事が表れるのは、建久2（1191）年2月15日条である。

幕下大倉山の邊を歴覽したまふ。精舎を建立せんがために、その靈地を得たまはんが故なり。これ去々々奥州を征したまふの時、合戦無爲の後、鎌倉中に伽藍を草創すべきの由、御立願あり。しかるにかの年は暮れをはんぬ。去年は奥州騷動し、國土飢饉ならびに御上洛等計會す。これによって營作なし。今においては郡國ことごとく靜謐にして、民庶皆豊稔の間、やうやくその沙汰あり。

文治5年12月の段階では、建立を決定するのみで終わってしまった。諸々の事情で準備が遅れ、場所が決まったのは構想から1年以上後のことであった。頼朝はこの日、「大倉山の邊」を訪れ、永福寺を建立する場所を定めたのであった。

具体的に造営が始まった記事は見られないが、翌建久3（1192）年正月21日条では永福寺は「新造の御堂の地」として登場する。この頃すでに土木工事が行われていたらしい。同年6月13日には梁棟、8月24日条には池を掘り始めた記載がある。いずれの場合も頼朝は直に足を運び、工事に立ち会った。また27日には阿波阿闍梨静空の弟子静玄を呼んで、堂前の池の立石のことが話し合われる。この時準備された石は「巖石數十果、所々よりこれを召し寄せられ、積みて高岡を成すと云々。」と表現される。9月11日には池に石を立てる作業が行われている。石の配置をめぐるのは頼朝はなかなか気に入らなかったようで、11月13日にも静玄を呼び、石の位置をなおさせた記述が見られる。

10月25日には惣門が建てられた。29日には扉・後背の書画が完成。この書画は修理少進季長の書いたもので、圓隆寺を模したとある。（繪原）

永福寺がとりあえずの完成を見たのはこの年の11月20日、25日には供養を行っている。前後の記載から判断して、この時完成していたのは二階堂と池であったと考えられる。

建久5（1194）年までには二つの脇堂が建立される。二階堂と並んで「阿弥陀堂」・「薬師堂」として挙げられる堂舎であるが、『吾妻鏡』はどのようなわけか阿弥陀堂完成の記事を欠いており、かわりに薬師堂完成の記事が建久4年11月と、建久5年12月にある。どちらかは恐らく阿弥陀堂を誤ったものであろうと考えられるが、建久4年・建久5年のどちらであるかは不明である。これまで、この『吾妻鏡』の混乱については建久5年12月26日条に「永福寺内新造の薬師堂の供養」とあることから、こちらを薬師堂と考え、建久4年11月27日条「永福寺薬師堂供養なり。」は、阿弥陀堂供養の誤りとする説が一般的であった。（註1）

しかし、建久4年11月8日条では「これ永福寺の傍に梵字を建て、薬師如来の像を安置せらるるの間…」という記事もあり、二階堂の次に建てられたのは薬師堂であったという見方もあながち否定できない。

『吾妻鏡』の記述から阿弥陀堂・薬師堂の建てられた順序を読みとるには限界があると言わねばなるまい。調査では便宜上、創建の時期を「I期」とする。

註1 それより以前、「神奈川県史料名勝天然記念物調査報告書」第六号（昭和13年3月）の中で赤星直忠氏は、阿弥陀堂完成に関わる記事は欠落と考へ、建久5年の「新造の薬師堂」は薬師堂とは別に作られた堂宇、いわば「新薬師堂」であると考えた。しかし、これ以降の『吾妻鏡』の記述に、薬師堂とは別に新造の薬師堂があることを伺わせる記述はなく、また一寺院に薬師堂が二ヶ所置かれたとも考えにくい。このような理由から、「新造の薬師堂」は阿弥陀堂に対して新しく建った脇堂を指すという考えがこれまで主にとられてきたわけである。

（2）源家将軍の時代

建久10（1199）年9月23日には永福寺に渡御していた頼家が雨のために蹴鞠をとり止めたという記事が見られる。この年の1月に頼朝が没し、源家は頼家が継いでいた。この時期から永福寺は別業としての性格を帯びてくるといえる。

『吾妻鏡』には勿論仏事に関する記事も見られるが、たとえば正治2年（1200）年閏2月29日、「羽林、永福寺已下近邊の勝地を歴覽したまふ。晚鐘の程に還御、永福寺において鄒曲あり。僧・兒童等釣殿に参り、しきりに盃酒を申し行ふ。御供に候ずるの輩、すこぶるもって酩酊す。」とあり、頼家が僧らを交えて酒宴を持ったことが知れる。また、建仁3（1203）年3月15日条には「永福寺の一切経會。將軍家、舞を覽んがために御出。烟霞の眺望、櫻花の艶色、興あり感あり。」という記事が見られる。

この年、頼家は伊豆修善寺に幽閉され、將軍職には弟実朝がつくこととなる。元久元（1204）年頼家は暗殺された。建暦元（1211）年4月29日条には、郭公の初音を聞くために実朝が永福寺を訪れた記事が見られる。そのほか、建保2（1214）年3月9日条には「將軍家にはかに永福寺に御出。櫻の花を御覽せんがためなり。」とあり、また建保5（1217）年3月10日条には「將軍家櫻花を覽んがために永福寺に御出。御臺所御同車。まづ御禮佛。次に花林の下に逍遙したまう。」とある。風流を好み歌人としても活躍した実朝が、永福寺に憧憬を抱いていた姿がうかがえる。

その間、建暦元（1211）年11月3日には惣門が焼け、翌建暦2（1212）年7月23日に再建した記録が見える。

（3）北条氏の時代

実朝は承久元（1219）年1月に没する。この頃の永福寺は姿は紀行文『海道記』に描かれている。作者が訪れたのは貞応2（1223）年4月のことで、その印象を「余堂に踰蹕して、感嘆に及び難し。」と述べ、壮大さを伝えている。

その後鎌倉に迎えられた藤原（九条）頼経が嘉禄2年（1226）年1月、將軍の座に着く。『吾妻鏡』によれば、この頼経も永福寺で花見、蹴鞠、和歌の会などを行っている。

鎌倉では再三にわたって大火が起り、永福寺もその火の粉を受けて失火したことがうかがい知れる。火災の記録はそれ以前にもいくつか見られるが、寛喜3（1231）年10月25日、「相州（北条時房）の公文所」を焼いた火が南風にあおられて広がり、永福寺の惣門も炎上した。その様子は、

晩に及びて大風吹く。戊の四鼓、相州の公文所焼亡す。南風しきりに扇ぎ、東は勝長寿院の橋の邊に及び、西は永福寺惣門の内門に迄るまで烟塵 飛ぶがごとし。右大將軍ならびに右京兆の花法堂、同御本尊等灰燼となる。およ

そ人畜の焼死その員を知らず。これ盗人放火の由その聞えありと云々。

と書かれている。

文暦2 (1235) 年7月5日条には焼失したこの總門の上棟が行われた記述が見られる。

寛元2 (1244) 年2月、頼経は將軍職を退き、子の頼嗣が將軍になる。この年の7月5日条には永福寺ならびに兩方の監堂修理の儀あり。今日事始めなり。肥前前司久良・中民部大夫元業等行事たり。件の寺は右大將軍の御時、文治五年殊なる素願によつて建立せらるるの後、數十廻の星霜を積むの間、すでに破壊に及ぶと云々。

という記事がみられる。この頃、老朽化していた二階堂（この場合の「永福寺」は二階堂を指す）と監堂の修理が行われた。（この時期を調査では「Ⅱ期」とする。）

またこの時期、出家して法名を行賢としていた頼経に関連して、永福寺と関わる次のような記録が見られる。

寛元3年 (1245) 年10月12日条

久遠壽院において、如法華經十種供養あり。導師は本覺院僧正。すなはち今日永福寺奥山に奉納せらる。これ大納言家の御願として日來勸行書寫せらるるところなり。

「永福寺奥山」が直接永福寺と関連を持つかどうかは疑問であるが、後述する経塚の造営を考える上で興味深い記事である。頼経は、翌年執権北条時頼によって京都に追放された。

寶治元 (1247) 年、執権北条時頼は縁戚関係にあった安達景盛一族と組み、勢力をのぼしていた三浦氏を攻めた。「宝治合戦」といわれるこの合戦は、鎌倉市中を舞台に壮絶な戦いとなった。屋敷を焼かれた三浦泰村は頼朝の法華堂にのがれ、一方弟の三浦光村は永福寺の惣門内に80余騎で陣を張った。6月5日条では、光村が兄泰村に使者を使わし、「當寺は殊勝の城郭なり。この一所において相共に討手を待たるべし」として、永福寺で北条安達軍を迎えようとした様子を描いている。結局泰村はこれに応じず、「同じくは故將軍の御影の御前において、終りを取らんと欲す。早くこの處に來會すべし」と主張して光村軍を法花堂に呼び寄せ、一族はそこで終焉を迎えた。

寛元年間の修理の後、寶治2 (1248) 年には寛元年間の修理を補うような記述が見られる。

寶治2年2月5日条

永福寺の堂修理の事、去ぬる寛元二年四月、その沙汰に及ぶといへども、日來すこぶる懈緩なり。しかるに左衛門、明年廿七歳の御儀のみなり。當寺を興行せらるべきの由、靈夢の告げあるによつて、殊に思しめし立つと云々。當寺は右大將軍、文治五年伊豫守義隆を討ち取り、また奥州に入りて藤原泰衡を征伐し、鎌倉に歸らしめたまふの後、陸奥・出羽兩國を知行せしむべきの由、勲勳を蒙らる。これ泰衡管領の跡たるによつてなり。しかるに今、関東長久の遠慮を廻らしたまふの餘りに、怨望を宥めんと欲す。義隆といひ泰衡といひ、させる朝敵にあらず。ただ私の宿意をもつて誅し亡はすが放なり。よつてその年の内に營作を始めらる。随つて壇場の莊嚴、ひとへに清衡・基衡・秀衡 以上泰衡が父祖 等が建立する平泉の精舎に摸せられをはんぬ。その後六十年の雨露月殿を侵すと云々。明年は義隆ならびに泰衡が一族滅亡の年の支干なり。

『吾妻鏡』の永福寺に関する記事は、弘長元 (1261) 年2月20日条鶴岡八幡宮の仁王會の記載に現れるのが最後である。その後の永福寺の様子を伝える資料はいくつかあるが、いずれも断片的なものである。なかでも火災に関する記事は、発掘調査の観点からは貴重と言える。

『北条九代記』には弘安3 (1280) 年10月28日条に

丑朔右大將義時時房等朝臣。法花堂在納社 并尼寺。二階堂相州館已下焼失。火本中下馬橋中條判官宿所。

という記事を載せ、また弘安10 (1287) 年8月24日に「二階堂修理供養」の記事を載せている。（この

時期を調査では「Ⅲ期」とする。)

また、延慶3(1310)年11月6日条には次のような記事が見られる。

自安養院失火。燒失所。勝長壽院。法花堂。神宮寺。淨光明寺。多寶寺。理智光院。稻本。田代。二階堂。大門。在柄社。其外堂社。不知其數。將軍御所最勝園寺禪閣館。而國司以下大名小名館宿等大覺棧失訖。前代未聞之由有其沙汰。

同様にこの日の火災を伝える記事は『見聞私記』にも次のように見られる。

未時歟。自濱邊火出來。始自御所殿中大名小名人屋。大御堂。法花堂。在柄社。淨光明寺。多寶寺。二階堂大門。鐘樓。經藏悉燒失了。先代未聞人殊事也。

この火災以後の時期を調査では「Ⅳ期」とする。

(4) 鎌倉幕府滅亡後

『梅松論』には元弘3(1333)年

義詮の御所四歳の御時大將として。御こしに召れて。義貞と同道にて。関東御退治以後は。二階堂の別当坊に御座有しに。諸將悉く四歳の若君に属し奉りしこそめでたけれ。

という記事がある。また建武2(1335)年中先代の乱の後、やはり足利尊氏・直義が二階堂の別当坊に入った記事、文和元(1352)年新田義興等が鎌倉を出たあとに尊氏が鎌倉に入り、二階堂別当坊に滞在した記事等が見える。

『鎌倉大日記』は、応永12(1405)年12月17日、巳の刻からの火事で永福寺が炎上した記事載せている。

享徳3(1454)年の奥書をもつ『殿中以下年中行事』(『成氏年中行事』『鎌倉年中行事』の別称をもつ)正月11日の項に、永福寺が吉書始に書かれなくなったという記事がある。足利氏はそれ以前は永福寺を鎌倉五山の上に位置付け、毎年吉書始には勝長壽院と永福寺を交代で載せていた。その後の永福寺について伝える資料は絶える。

このことからおおかた15世紀半ば以後に廃絶したものと考えられてきたが、存続をうかがわせるいくつかの資料はある。江戸期に刊行された絵図のうち、明暦～元治年間頃に発行された「相州鎌倉之絵図」には「かめがふち谷」の北西に「えうふくじ」と書かれ、山裾に二棟の堂が描かれている。また延享2(1745)年12月の年記をもつ「禪宗済家鎌倉五山寿福寺・淨智寺・淨妙寺派下敗壞改派寺院歴」(寿福寺所蔵)には淨妙寺の末寺として書かれている。(註2)江戸時代まで存続していたとする見方もあり、廃絶の時期については不明点が多い。

註2 寿福寺近世史料(一) 三浦勝男 鎌倉第20巻 昭和46年9月

『鎌倉の史跡』 三浦勝男 鎌倉春秋社 昭和58年

第3節 調査に至る経過

(1) 昭和56年以前の考古学的調査

a. 昭和20年以前の調査

赤星直忠氏が大正14年以降古瓦の採集を行う。

昭和6年12月、浴場建設のため地面を掘り下げたところ、瓦、杭が出土する。昭和6年12月2日より赤星氏が中心となり調査を行う。この調査に森蘊氏が参加する。昭和8年4月に調査を終了する。工事に伴う地面の掘り下げから、多くの庭石等の庭園遺構を確認する。またこの調査から永福寺の寺域、規

そ人畜の焼死その員を知らず。これ盗人放火の由その聞えありと云々。

と書かれている。

文暦2(1235)年7月5日条には焼失したこの總門の上棟が行われた記述が見られる。

寛元2(1244)年2月、頼経は將軍職を退き、子の頼嗣が將軍になる。この年の7月5日条には永福寺ならびに兩方の脇堂修理の儀あり。今日事始めなり。肥前前司久良・中民部大夫元業等行事たり。件の寺は右大將軍の御時、文治五年殊なる素願によつて建立せらるるの後、數十廻の星霜を積むの間、すでに破壊に及ぶと云々。

という記事がみられる。この頃、老朽化していた二階堂(この場合の「永福寺」は二階堂を指す)と脇堂の修理が行われた。(この時期を調査では「Ⅱ期」とする。)

またこの時期、出家して法名を行賢としていた頼経に関連して、永福寺と関わる次のような記録が見られる。

寛元3年(1245)年10月12日条

久遠壽量院において、如法華經十種供養あり。導師は本院僧正。すなほ今日永福寺奥山に奉納せらる。これ大納言家の御願として日來勸行書寫せらるるところなり。

「永福寺奥山」が直接永福寺と関連を持つかどうかは疑問であるが、後述する経塚の造営を考える上で興味深い記事である。頼経は、翌年執権北条時頼によって京都に追放された。

寶治元(1247)年、執権北条時頼は縁戚関係にあった安達景盛一族と組み、勢力をのぼしていた三浦氏を攻めた。「宝治合戦」といわれるこの合戦は、鎌倉市中を舞台に壮絶な戦いとなった。屋敷を焼かれた三浦泰村は頼朝の法華堂にのがれ、一方弟の三浦光村は永福寺の惣門内に80余騎で陣を張った。6月5日条では、光村が兄泰村に使者をかわし、「當寺は殊勝の城郭なり。この一所において相共に討手を待たるべし」として、永福寺で北条安達軍を迎えようとした様子を描いている。結局泰村はこれに応じず、「同じくは故將軍の御影の御前において、終りを取らんと欲す。早くこの處に來會すべし」と主張して光村軍を法華堂に呼び寄せ、一族はそこで終焉を迎えた。

寛元年間の修理の後、寶治2(1248)年には寛元年間の修理を補うような記述が見られる。

寶治2年2月5日条

永福寺の堂修理の事、去ぬる寛元二年四月、その沙汰に及ぶといへども、日來すこぶる懈緩なり。しかるに左親衛、明年廿七歳の御嶺みなり。當寺を興行せらるべきの由、靈夢の告げあるによつて、殊に思しめし立つと云々。當寺は右大將軍、文治五年伊豫守義國を討ち取り、また奥州に入りて藤原泰衡を征伐し、鎌倉に歸らしめたまふの後、陸奥・出羽兩國を知行せしむべきの由、勅裁を蒙らる。これ泰衡管領の跡たるによつてなり。しかるに今、関東長久の遠慮を慮らしたまふの餘りに、怨靈を宥めんと欲す。義照といひ泰衡といひ、させる朝敵にあらず。ただ私の宿意をもつて誅し亡はすが故なり。よつてその年の内に營作を始めらる。随つて埋場の莊嚴、ひとへに清衡・基衡・秀衡以上泰衡が父祖等が建立する平泉の精舎に撰せられをはんぬ。その後六十年の雨露月殿を侵すと云々。明年は義顯ならびに泰衡が一族滅亡の年の支干なり。

『吾妻鏡』の永福寺に関する記事は、弘長元(1261)年2月20日条鶴岡八幡宮の仁王會の記載に現れるのが最後である。その後の永福寺の様子を伝える資料はいくつかあるが、いずれも断片的なものである。なかでも火災に関する記事は、発掘調査の観点からは貴重と言える。

『北条九代記』には弘安3(1280)年10月28日条に

丑刻右大將義時時房等朝臣。法花堂在栴社 井尼寺。二階堂相州館已下焼失。火本中下馬橋中條判官宿所。

という記事を載せ、また弘安10(1287)年8月24日に「二階堂修理供養」の記事を載せている。(この

時期を調査では「Ⅲ期」とする。)

また、延慶3(1310)年11月6日条には次のような記事が見られる。

自安養院失火。燒失所。勝長壽院。法花堂。神宮寺。淨光明寺。多寶寺。理智光院。祖本。田代。二階堂。大門。在柄社。其外堂社。不知其數。將軍御所最勝園寺禪園館。而國司以下大名小名館宿等大畧燒失記。前代未聞之由有其沙汰。

同様にこの日の火災を伝える記事は『見聞私記』にも次のように見られる。

未時歟。自濱邊火出來。始自御所殿中大名小名人屋。大御堂。法花堂。在柄社。淨光明寺。多寶寺。二階堂大門。鐘樓。經藏悉燒失了。先代未聞人殊事也。

この火災以後の時期を調査では「Ⅳ期」とする。

(4) 鎌倉幕府滅亡後

『梅松論』には元弘3(1333)年

義隆の御所四歳の御時大將として。御こしに召れて。義貞と同道にて。関東御退治以後は。二階堂の別当坊に御座有しに。諸將悉く四歳の若君に属し奉りしこそめでたけれ。

という記事がある。また建武2(1335)年中先代の乱の後、やはり足利尊氏・直義が二階堂の別当坊に入った記事、文和元(1352)年新田義興等が鎌倉を出たあとに尊氏が鎌倉に入り、二階堂別当坊に滞在した記事等が見える。

『鎌倉大日記』は、応永12(1405)年12月17日、巳の刻からの火事で永福寺が炎上した記事載せている。

享徳3(1454)年の奥書をもつ『殿中以下年中行事』(『成氏年中行事』『鎌倉年中行事』の別称をもつ)。正月11日の項に、永福寺が吉書始に書かれなくなったという記事がある。足利氏はそれ以前は永福寺を鎌倉五山の上に位置付け、毎年吉書始には勝長寿院と永福寺を交代で載せていた。その後の永福寺について伝える資料は絶える。

このことからおおかた15世紀半ば以後に廃絶したものと考えられてきたが、存続をうかがわせるいくつかの資料はある。江戸期に刊行された絵図のうち、明暦～元治年間頃に発行された「相州鎌倉之絵図」には「かめがふち谷」の北西に「えうふくじ」と書かれ、山裾に二棟の堂が描かれている。また延享2(1745)年12月の年記をもつ「禪宗濟家鎌倉五山寿福寺・淨智寺・淨妙寺派下敗壞改派寺院牒」(寿福寺所藏)には淨妙寺の末寺として書かれている。(註2)江戸時代まで存続していたとする見方もあり、廃絶の時期については不明な点が多い。

註2 寿福寺近世史料(一) 三浦勝男 鎌倉第20巻 昭和46年9月

『鎌倉の史跡』 三浦勝男 鎌倉春秋社 昭和58年

第3節 調査に至る経過

(1) 昭和56年以前の考古学的調査

a. 昭和20年以前の調査

赤星直忠氏が大正14年以降古瓦の採集を行う。

昭和6年12月、浴場建設のため地面を掘り下げたところ、瓦、杭が出土する。昭和6年12月2日より赤星氏が中心となり調査を行う。この調査に森蘊氏が参加する。昭和8年4月に調査を終了する。工事に伴う地面の掘り下げから、多くの庭石等の庭園遺構を確認する。またこの調査から永福寺の寺域、規

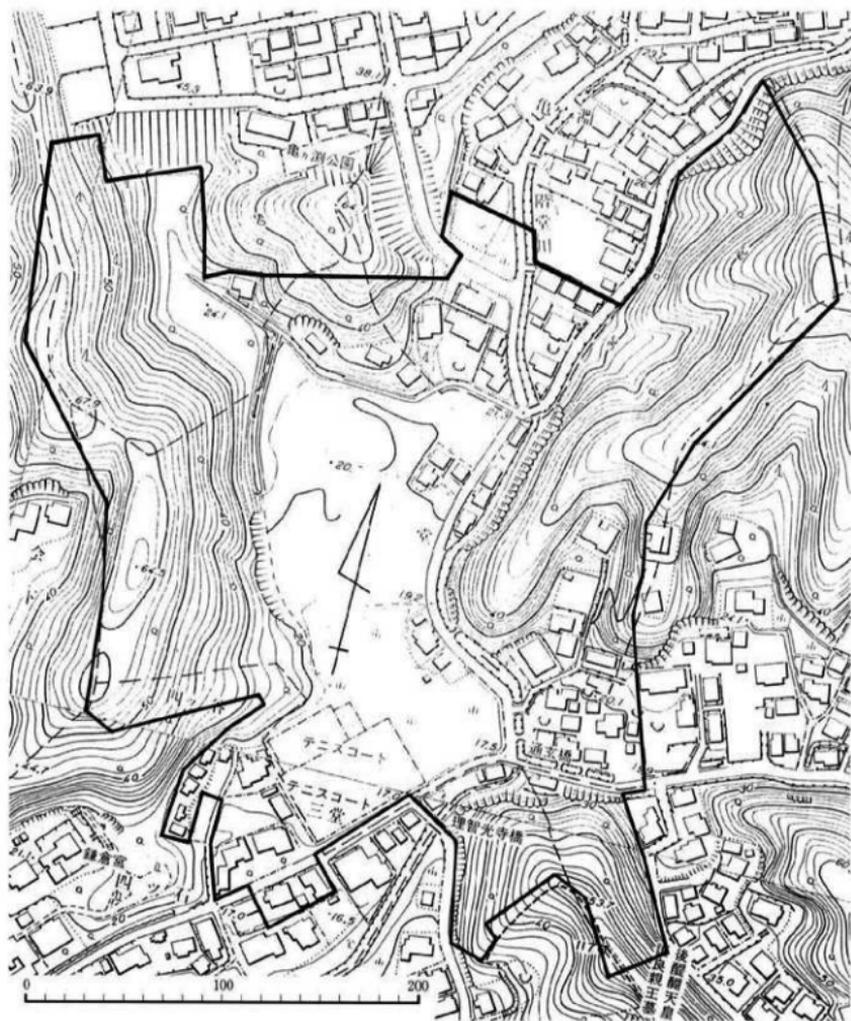


図2 史跡指定範囲図

模等を考察する。(註3)

b. 昭和20年以降の調査(図版1)

昭和28年3月18日から3月30日にかけて、県史跡・埋蔵文化財担当委員として赤星氏が担当し県教育委員会が小字三堂200番・201番に幅1.5m、長さ22mのトレンチを設定し調査を実施する。結果、出土した礎石や礎石の根がための位置から堂の規模などを推定する。(註4)

この遺跡の重要性から昭和28年12月、神奈川県は主要伽藍があったと見られる平坦地を史跡に指定した。その後、遺跡の北東、赤星氏が僧坊跡と推定していた西ヶ谷で、昭和40年頃宅地造成が行われることになり、昭和41・43年、奥田直榮、大三輪龍彦、学習院大学輔仁会史学部等が中心となり、埋め立て造成が行われる西ヶ谷の最奥部の調査を行った。西ヶ谷入口より400m入った位置で上下二段の平場の調査を行ったところ、遺構と共に多くの中世遺物が出土した。(註5・6・7)

こうした状況を背景に昭和41年6月、周囲の景観を含めた一帯が国史跡の指定を受けた。史跡を整備し公開する目的で、鎌倉市は翌42年から土地の買収を行った。

(2) 県遺跡指定・国指定史跡(図2)

昭和28年12月22日 神奈川県の史跡名勝として指定を受ける。

昭和41年6月14日 国指定史跡永福寺跡として小字三堂を中心に86,008㎡が指定を受ける。以後、指定に伴う土地の公有化が国庫補助(国80%、県10%)を受け、昭和42年度から継続して実施され、平成13年3月現在58,462.13㎡が買収済みである。

註3 『神奈川県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第六輯 昭和13年3月所収(後に『中世考古学の研究』昭和55年 有隣堂 所収)

4 『横須賀考古学会年報』13・14 昭和43・44年所収(後に『中世考古学の研究』同上 所収)

5 『鎌倉市二階堂西ヶ谷中世遺跡調査概報』昭和41年 奥田直榮・大三輪龍彦

6 『鎌倉市二階堂西ヶ谷中世遺跡発掘調査報告』昭和41年 学習院大学輔仁会史学部

7 『鎌倉市二階堂西ヶ谷中世遺跡調査概報』昭和43年 奥田直榮

第4節 調査の経過

(1) 調査の体制

昭和51年度 第1次史跡永福寺跡保存管理策定事業(航空測量)が始まる。

昭和52年9月1日 史跡永福寺跡保存管理計画策定準備会を設立し保存管理策定書の策定を行う。

昭和56年9月30日 史跡永福寺跡整備計画準備委員会が設立される。

整備計画の指針となる具体的資料を得るため、史跡永福寺跡試掘調査団(団長大三輪龍彦)が確認調査を実施する。

昭和57年5月21日 前年度の確認調査の成果を補完するため、追加して確認調査を実施する。

同年6月24日 史跡永福寺跡整備委員会を設立する。整備基本計画を策定し、鎌倉市基本計画の中で、永福寺整備計画を位置づける。

昭和58年7月18日 整備基本計画を基に、史跡永福寺跡発掘調査団(団長大三輪龍彦)により本調査が開始される。

昭和59年8月27日 鎌倉市教育委員会が主体となり、国・県・史跡永福寺跡整備委員会の指導・助言を受けながら調査を実施する。



圖3 試驗調查地點位置圖

a. 史跡永福寺跡整備委員会名簿

平成13年3月現在

会 長	貫 達人 (昭和57年度～)	委 員	関口 欣也 (昭和63年度～)
副 会 長	赤星 直忠 (平成3年度まで在職)	＊	龍居竹之介 (平成8年度～)
副 会 長	吉田章一郎 (平成4年度～) (委員は昭和57年度～)	＊	田畑 貞寿 (平成5年度～)
		＊	田村 晃一 (平成4年度～)
委 員	大岡 実 (昭和62年度まで在職)	＊	李家 正基 (平成4年度まで在職)
＊	大三輪龍彦 (昭和57年度～)	＊	養茂寿太郎 (昭和63年度～平成3年度)
＊	大森 順雄 (昭和62年度まで在職)	指導・助言	田中 哲雄
＊	鈴木 亘 (昭和57年度～)	＊	牛川 喜幸
＊	吉川 雷 (平成7年度まで在職)		

(2) 確認調査

a. 昭和56年度の確認調査

環境整備事業に係る最初の調査で、永福寺整備計画準備委員会の指示により史跡内に6ヶ所トレンチを設け、遺構の所在とその埋没深度の掌握を主な目的とした。本調査に備え、史跡内に大きな測量方眼を設定して調査を進める指針とした。

b. 昭和57年度の確認調査

永福寺整備計画準備委員会からの指示により昭和56年度の成果を基に行われた調査で、主に苑池の東側に広がる汀線の確認調査を行った。

(3) 本調査

確認調査の結果、遺構面までの深度、遺存状況を大まかに知ることが出来た。これを基に主要伽藍の規模・配置と苑池の規模・構造の解明を課題に、昭和58年度から平成8年度まで本調査を実施した。

第5節 調査の方法

(1) 調査基準点の設置 (図3・4)

昭和56年度の確認調査前に、約16,000㎡に及ぶ調査対象地域を20mの方眼 (南北軸アラビア数字・東西軸アルファベット) で区切り調査の際の基準線とした。

また測量精度を上げるため、昭和63年度に調査対象地を囲むように永福寺跡測量基準点を設置した。これは史跡地内を見渡せる6地点に基準点を示す金属標を埋設したものである。各基準点の国土座標値は以下の通りである。

永福寺測量基準点

基準点名	X座標値	Y座標値	海 拔 高
基準点No 1	-74,818.356	-23,775.192	20.847m
基準点No 2	-74,891.062	-23,790.173	19.680m
基準点No 3	-74,960.669	-23,737.663	18.227m
基準点No 4	-74,960.367	-23,826.334	18.805m
基準点No 5	-74,875.810	-23,882.056	21.532m
基準点No 6	-74,812.178	-23,894.588	22.882m



図4 調査地点位置及びグリッド設定・基準点位置図

調査に使用した基準杭一覧

調 査 年 度	使用したグリッド杭	X 座 標 値	Y 座 標 値
昭和 58 年度 調査 基準杭	F-4 グリッド杭	-74,878.694	-23,850.865
昭和 59 年度 調査 基準杭	G-4 グリッド杭	-74,898.610	-23,849.032
昭和 60 年度 調査 基準杭	H-4 グリッド杭	-74,918.526	-23,847.199
昭和 61 年度 調査 基準杭	D-3 グリッド杭	-74,840.696	-23,874.448
昭和 62 年度 調査 基準杭	C-3 グリッド杭	-74,820.780	-23,876.281
昭和 63 年度 調査 基準杭	C-5 グリッド杭	-74,817.114	-23,836.449
平成 元 年度 調査 基準杭	F-4 グリッド杭	-74,878.694	-23,850.865
平成 2 年度 調査 基準杭	F-5 グリッド杭	-74,876.861	-23,830.949
平成 3 年度 調査 基準杭	J-6 グリッド杭	-74,954.692	-23,803.700
平成 4 年度 調査 基準杭	H-6 グリッド杭	-74,914.860	-23,807.367
平成 5 年度 調査 基準杭	E-6 グリッド杭	-74,855.113	-23,812.867
平成 6 年度第 1 調査区基準杭	B-3 グリッド杭	-74,800.864	-23,878.114
平成 6 年度第 2 調査区基準杭	H-3 グリッド杭	-74,920.359	-23,867.115
平成 6 年度第 3 調査区基準杭	E-6 グリッド杭	-74,855.113	-23,812.867
平成 7 年度 調査 基準杭	C-8 グリッド杭	-74,811.614	-23,776.702
平成 8 年度 調査 基準杭	C-6 グリッド杭	-74,815.281	-23,816.533

永福寺跡は、北緯35度19分29秒、東経139度34分15秒に位置し、設定した方眼の南北軸線の軸方位は真北に対して西に5度15分33秒振れ、調査で明らかになった堂舎の南北軸線の方位は、同じく西に14度43分35秒振れている。

(2) 調査地の設定

永福寺整備委員会の指導助言のもと、各年度毎に調査地点を決定した。

調査は建物の調査に主眼をおいた昭和58年度から平成元年度までの調査と、庭園の調査に主眼をおいた平成2年から平成8年までの調査に大別される。

建物の配置を確認するまでの3年間（昭和58年度～昭和60年度まで）は、設定した20m方眼の軸線をもとに調査地を設定したが、堂舎の配置、軸線が明らかになってからの調査（昭和61年度以降）は、堂舎の軸線に合わせて調査地を設定した。

(3) 調査の概要

a. 昭和56年度の調査（確認調査）

第1～第6までの確認トレンチを史跡内に設定する。各トレンチの調査は以下のようである。

調査期間は昭和56年12月5日～昭和57年1月15日。

第1トレンチ

塔跡と推定されている台状地形上で、遺構を確認するためにトレンチを設定。トレンチは2×22mと2×9mのトレンチをT字形に配置する。調査地点は西ヶ谷入口左側に位置する高さ5m程の高台で、掘り込みの土丹と茶褐色粘土との版築が土層断面から確認。遺構面上からは明確な遺構は検出されない。

第2トレンチ

菟池北側の汀線を確認するために、北側の山裾に2×5mの大きさのトレンチを設定。上面には近世

以降の水田耕作土に覆われ、宝永年間の富士山火山灰（F-HO-1）を確認する。この水田耕作土の下で、面に広がる多くの玉砂利を確認する。

第3トレンチ

苑池東側の汀線を確認するために、1.2×6mのトレンチを敷地の東側を南北に走る市道の脇に設定。後世の攪乱が激しいが、西側に落ち込んで行く遺構面と汀線と考えられる緩やかな段差、庭石と考えられる長さ1m程の安山岩を検出する。

第4トレンチ

中ノ島とその周囲の池底を確認するために、島状の高まりを横断する1×10mのトレンチと1×4mのトレンチを設定。島以外のところでは殆ど表土がなく砂利を敷き詰めた池底が顔を出す。昭和6年の温泉旅館建設に伴って、池の土取りがなされたためと考えられる。島の上面近くでは、富士山の宝永年間の火山灰（F-HO-1）を確認する。池底の砂利敷き下の地表面から立ち上がる巨大な岩があり、宝永年間（18世紀）以前から島状の高まりがあったことは確実である。現況は島状の高まりで、温泉旅館の建設に伴い、周囲に切石を積み上げるなど大きく手が入れたもの。

第5トレンチ

南側釣殿推定地に、3×10mのトレンチを東西方向に設定。東側の旧水田面より一段高くなっている場所で以前は畑作が行われていた。東側への落ち際に大きな安山岩を2個確認する。岩の上面はやや変色し剥離が見られた。また周囲の遺構面から鎌倉後期と考えられる瓦片が出土する。遺構面は黒色粘土と土丹粒から構成され玉砂利を含む。2個並んだ安山岩は礎石の可能性があり、釣殿の可能性を感じさせる遺構である。

第6トレンチ

薬師堂推定地から西側汀線がかかるように、3×20mと2×5mのトレンチを東西方向に設定。トレンチの西側では、地表から約70cm下で富士山宝永年間の火山灰（F-HO-1）を確認する。地表から130cm掘り下げ、黒色粘質土の地山を検出する。この地山面の上に約10～30cmの青灰色砂層と砂利を確認し、更に礎石1個と根石状の集石を検出するが西側の汀線は確認されなかった。

b. 昭和57年度の調査（確認調査）

昭和56年度の確認調査を補完するため、苑池の東側汀線の調査を行う。

昨年度の第3トレンチ北方、市道に沿って3ヶ所のトレンチを設定。調査面積は110㎡。

調査期間は昭和57年5月21日～同年6月12日。

82Aトレンチ

56年度第3トレンチの北約6m地点に設定。南北幅2m、東西長さ5mのトレンチ。現地表下約80cmで富士山宝永年間の火山灰（F-HO-1）がブロック状に確認される。西に向かって落ち込むA面・B面を検出する。A面は新しい時期の積み増し面、B面は永福寺I期の瓦類と手捏ねかわらけが含まれ、13世紀中頃以前の造成で、寛元宝治年間の改修後の汀線と推測する。

82Bトレンチ

Aトレンチの北側約5m地点に設定。東西幅4m、南北長さ20mのトレンチ。Aトレンチ同様にA面・B面を検出。更にB面下で無遺物のヘドロ層の下から、岩盤を掘り込んだC面を検出する。C面は13世紀前半以前の可能性を指摘される。

また、B面を切り込んだ水落遺構を検出する。

82Cトレンチ

Bトレンチの北側約5m地点に設定。南北幅2m、東西長さ5mのトレンチ。富士山宝永年間の火山灰(F-HO-1)下でA面・B面を検出する。A・Bトレンチと異なりほぼ平坦な面である。西に向かい落ち込み様子は認められない。A面上で南北方向に延びる鎌倉石の切石列を検出する。

c. 昭和58年度の調査(二階堂の調査)

三堂推定地の西の山裾中央に約450㎡の調査地を設定。

調査期間は昭和58年7月18日～同年10月31日。

調査の結果、礎石、根石等を検出し五間四方の堂跡を確認する。三堂推定地の中央で検出したことから二階堂と推測する。検出した礎石は原位置を留めるものはないが、堂跡を囲み柱間を二間割りにした位置で、柱根を伴った角柱の掘立柱列を検出する。礎石掘方の中から多量の焼けた瓦片が出土する。

d. 昭和59年度の調査(阿弥陀堂と南複廊の調査)

昭和58年度に確認した五間四方の堂が、二階堂か否かの確認と他の堂の確認のため、昭和58年度の調査地の南隣に約530㎡の調査地を設定。

調査期間は昭和59年8月27日～同年11月26日。

調査地の南西部、昨年度確認した堂跡より南に約17m離れた地点で、基壇状の高まりを検出する。周囲に角柱の掘立柱を伴った堂跡の北側半分と考えられた。二階堂の南で検出した事から極楽浄土(西)を表わす阿弥陀堂と推定する。角柱は昨年確認した堂跡で検出した角柱と同様に柱間を二間割りにした位置で検出する。角柱は基壇部分を木組みにした木製基壇の東柱と推測する。

また昨年確認した堂跡との間で、礎石2個が遺存する梁行二間、桁行五間の建物跡を検出する。堂の間を結ぶ南複廊と推測する。

汀線確認のための調査で、堂跡前面から東に約16mの地点で東に緩やかに傾斜する砂利層を確認する。また史跡地内の排水路の浚渫を行い池底と東側汀線の一部を確認する。

e. 昭和60年度の調査(阿弥陀堂と南翼廊の調査)

前年度の調査で検出した堂跡の南側半分を調査するため、南に接して約1,230㎡の調査地を設定。

調査期間は昭和60年6月3日～翌昭和61年1月13日。

設定した調査地の北西で、基壇状の高まりの南半分を検出する。周囲に木製基壇東柱を伴い、堂跡の規模が桁行五間、梁行四間であることが確認された。

堂跡の南辺に幅一間の廊下が取り付く。廊下は堂の南辺から南に五間延び、矩折に東に曲がり、池まで十一間以上の建物となる。八間目が中門となることから南翼廊と推測する。

この調査で、昭和58年度に確認された五間四方の堂が二階堂、南側の桁行五間、梁行四間の堂が阿弥陀堂と確認された。

f. 昭和61年度の調査(薬師堂の調査)

昭和58年度から昭和60年までの調査の成果から、薬師堂と両側面に取り付く北複廊、翼廊の存在が想定された。これを確認するために、二階堂を中心に阿弥陀堂の位置を北に折り返した地点に約560㎡の調査地を設定。

調査期間は昭和61年8月20日～同年11月18日。

設定した調査地の中央で、規模が桁行五間、梁行四間の堂跡と、堂跡の周囲を巡る木製基壇東柱の柱穴を確認。堂跡の規模が阿弥陀堂と同じことから脇廊の一つ薬師堂と確認。二階堂を中心に両脇廊(阿弥陀堂、薬師堂)が確認された。この堂跡の南辺に北複廊、北辺に北翼廊が取り付くことも確認。

g. 昭和62年度の調査(薬師堂の北辺に取り付く北翼廊の調査)

薬師堂の北辺に取り付く北翼廊を確認するため昭和61年度調査地の北側に約603㎡の調査地を設定。
調査期間は昭和62年10月30日～翌昭和63年2月1日。

薬師堂北辺より一間幅の廊下が北に五間、金折に東へ八間分延び更に東に延びることを確認。八間目は中門。また西の山際の調査で、北から南に流れる水路を確認。

h. 昭和63年度の調査（翼廊と釣殿・庭園の調査）

昭和62年度に薬師堂取り付きから中門まで確認した北翼廊の続きと、薬師堂前面に広がる苑池を広範囲に確認するため、約1,000㎡の調査地を設定。

調査期間は昭和63年8月29日～翌平成元年2月7日。

調査地の北で昨年度確認した北翼廊の続きを確認する。北翼廊は池に突き出す形で中門から東に六間延び、先端は釣殿的建物となる。遺水が西ヶ谷方向から翼廊脇と下を通り池に注ぐことを確認。釣殿周囲には多くの庭石が配置され、洲浜状の汀線が南に延びる。

i. 平成元年度の調査（二階堂と北複廊の調査）

二階堂の西半分と北複廊、二階堂と薬師堂の前面と背面を含めた範囲で約1,378㎡の調査地を設定。

調査期間は平成元年7月28日～翌平成2年1月12日。

二階堂は昭和58年度の調査と合わせ、堂の規模が桁行五間、梁行五間と確認。周囲には阿弥陀堂や薬師堂と同じく木製基壇束柱が巡り、正面及び両側面に階が付く。

二階堂と薬師堂を結ぶ北複廊の調査で、規模が桁行四間、梁行二間と確認。また昭和56年度に行った確認調査の第6トレンチで確認した礎石と根石が北複廊のものと確認。二階堂と薬師堂背後の調査で、西の山際を北から南に流れる水路と南に延びる目隠し塀を確認。

j. 平成2年度の調査（二階堂前庭の調査）

二階堂正面から阿弥陀堂正面にかけて汀線確認のため、平成元年度調査地の東に約1,250㎡の調査地を設定。

調査期間は平成2年8月3日～同年12月26日。

二階堂正面から汀まで約24m（約8丈）、全面砂利敷きと推定。池に向かい砂利が敷き詰められた洲浜で多くの庭石を検出。庭で検出された多くの規則正しい柱穴・布掘りは、儀式等で庭を飾った幡を立てるために掘り込まれたものと推定。また二階堂正面の汀で確認された池中に向かい延びる柱穴及び布掘りは、橋ないし舞台等の構造物を想定。池中からは平面八角形をした湧水遺構を検出。

k. 平成3年度の調査（中ノ島と池南岸の調査）

中島と池尻の確認のため、調査対象地域の南に約3,190㎡の調査地を設定。

調査期間は平成3年7月1日～同年11月30日。

今年度の調査地は、昭和6年当時の温泉旅館建設に伴い建物と付属の庭園が造られた範囲。この庭園工事の際に、発掘調査を初めて行ったのが赤星直忠氏である。

調査した全域が池であると考えられる。谷戸の自然地形は、南に向かい開口し徐々に落ち込む。落ち込んでゆく地形に合わせ地乗が行われ、池底には厚く土丹が敷き詰められる。現況では削平されている堤の基底部を確認。中島の調査を行い本来の島の姿を確認。

l. 平成4年度の調査（阿弥陀堂前池と阿弥陀堂正面に架かる橋の調査）

南翼廊の外（南）側の様子と阿弥陀堂正面苑池の様子を明らかにするために、昭和60年度調査地の南側（1区）と平成3年度調査地の北（2区）に併せて約1,092㎡の調査地を設定。

調査期間は平成4年7月1日～同年12月31日。

1区では苑池西側の汀線と山際水路（2溝）を検出。昭和60年度に確認した南翼廊の中門から池の中に延びる部分は攪乱が激しく、南翼廊先端の形態は不明。

2区では、14世紀前半以降の時期と考えられる阿弥陀堂正面から対岸に延びる橋脚の基礎を検出。併せて東側汀線と旧二階堂川の流路と思われる落ち込みを検出。

m. 平成5年度の調査（二階堂正面に架かる橋と東岸の調査）

苑池の東側汀線の様子を明らかにするために、平成4年度調査地の北、平成2年度調査地の東、二階堂の正面部分に901.3㎡の調査地を設定。

調査期間は平成5年7月1日～同年12月31日。

創建から鎌倉後期までの苑池の変遷が明らかになった。併せて平成2年度に二階堂正面西側で確認した橋遺構を確認。橋の中軸線は正確に二階堂の中軸線の延長であることを確認。橋は幅二間（4.8m）、長さも創建当初およそ35mあったと推定。苑池が徐々に埋め立てられ鎌倉後期には22mになる。

n. 平成6年度の調査（遺水・阿弥陀堂背後の水路・池東岸の調査）

第1調査区は昭和63年度に確認されている遺水の流路を明らかにするため、昭和62年度調査地の北側に478.9㎡、第2調査区は阿弥陀堂背後の様子を明らかにするため、昭和60年度調査地の西、山際に沿って184.1㎡、第3調査区は東側汀線の様子を明らかにするため、平成5年度の調査地の北側の377.8㎡の調査地を設定。調査地面積の合計は1,040.8㎡。

調査期間は平成6年8月1日～翌平成7年2月6日。

遺水は西ヶ谷から北側の山際に沿うように流路が造られ、流路の勾配は100分の3で造られる。西ヶ谷出口で西側の山際を流れる水路と遺水に分ける。

阿弥陀堂背後で検出した水路が西側の山際の沿っていることを確認。また北の薬師堂から続く目隠し堀も確認され、水路と目隠し堀の間が西ヶ谷に向かう通路（小砂利敷き）であることを確認。

東側汀線調査で2時期の汀線と汀線に沿って置かれた庭石を確認。また、建物の基礎と考えられる鎌倉石を敷いた地覆状の遺構と溝を確認。

o. 平成7年度の調査（取水口と池北東部の調査）

苑池北東部の調査と取水口の確認のため、1,310㎡の調査地を設定。

調査期間は平成7年9月1日～翌平成8年1月31日。

この地点は永福寺整備地域の北東隅に当たる。調査によって、I期からIV期まで区分していた苑池の変遷の内、IV期の区分が、IV期-1面（15世紀以降）、IV期-2面（14世紀後半）、IV期-3面（14世紀前半）の3つに細分され、IV期-2・3面と一部III期に伴う取水遺構が確認された。取水遺構は、鎌倉石の切石を用いた幅約26cm、深さ30cm、長さ2mの導水路に水を導き、更に幅約160cm、深さ約60cm、長さ9mの水路を築き、苑池に二階堂川の水を引き入れていた。I期・II期の苑池の範囲は、現在の整備地域を超え大きく北東に広がっていることを確認。

北側の尾根先端の地山を岬状に削り残し、周囲には大小50個の庭石が据えられていた。

p. 平成8年度の調査（池北岸と遺水の調査・山の遺構確認調査）

苑池北岸の調査のため、平成7年度調査地と昭和63年度調査地の間に803.1㎡の調査地を設定。また山の遺構確認調査を行うため、永福寺を取り囲む周囲の山にトレンチを30ヶ所、合計490㎡の調査地を設定。苑池と山の調査面積の合計は1,293.1㎡。

調査期間は平成8年7月1日～翌平成9年1月31日。

苑池北岸の調査で、岬周囲に据えられた大小24個の庭石を検出した。前年度の調査ではIV期の苑池の

変遷を3つに細分したが、この調査では上層（14世紀後半）と下層（14世紀前半）に分けるにとどまった。北翼廊脇を埋め立て延ばされたIV期遺水の流路を検出した。

山の遺構確認調査で、西の山の尾根線上では堀切・塚を検出し、東の山中腹の平坦地では岩盤を切り込んだ溝・柱穴、尾根線上では堀切・永福寺創建期に築かれた経塚を確認した。

第2章 建物の調査

第1節 層序と概要（図5・6）

- | | |
|-----------|-------------------|
| 1. 表土 | 4. 青灰色粘土・砂層 |
| 2. 田耕作土 | 11. 黒色粘質土層（中世地山） |
| 3. 灰色粘質土層 | F-HO-1 富士山宝永年間火山灰 |

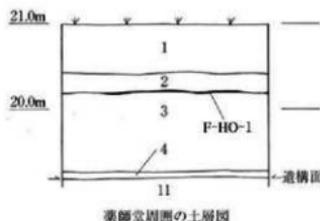
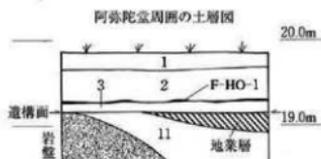


図5 標準土層図

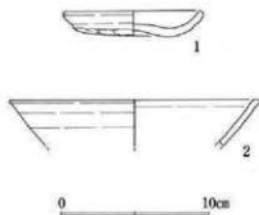


図6 整地層の遺物

二階堂を始め阿弥陀堂、薬師堂などの堂舎が建ち並んでいた苑池西側一帯陸地部分は、南北約150m、東西約60mの平坦地になっている。中央に位置する二階堂を境に、北側は黒色粘質土の地山を削り込んでいる。南側は緩やかに下る地山上に土丹を積み重ね、全体に平坦面を造りだしている。

現地表は、薬師堂周辺では海拔21.0m、阿弥陀堂周辺では海拔19.9mと北から南に向かい緩やかに下っている。遺構面の海拔は陸地全体が19.0m前後なので、薬師堂周辺では約2mもの土砂が遺構面を覆っていることになる。

薬師堂周辺で遺構面を覆う青灰色粘土・砂の互層状の堆積状況は、永福寺廃絶後、相当期間放置されていたことをうかがわせる。

第2節 二階堂（図7、図版3・4）

(1) 木製基壇

基壇を構成する版築は基壇内側の遺構面（19.20～19.35m）上の一部分に約15cm程の厚さで遺存しているだけである。地面を掘り込んで築く掘り込み基壇ではない。版築に使われている土は、地山の黒色土と細かい泥岩混じりの土を交互に積み上げたものである。

(2) 木製基壇東柱掘方（二東1～二東48）

二階堂を取り囲む様に配置された木製基壇東柱の掘方を検出した。掘方は桁行五間、梁行五間の堂の半間毎に配置され、掘方の総数は48穴である。形状は短径60cm、長径120cmの楕円ないし長方形で、遺構面をおよそ50cm程掘り込んでいた。底面には柱の沈下を防ぐ目的で礎板、礎石が敷き込まれていた。掘方内の覆土は、泥岩混じりの黒色土で基壇の版築土層の土と類似してる。

(3) 木製基壇東柱

48穴確認した東柱掘方の内21穴で柱根が、18穴で柱根の立ち腐れた痕跡から柱位置が確認された。

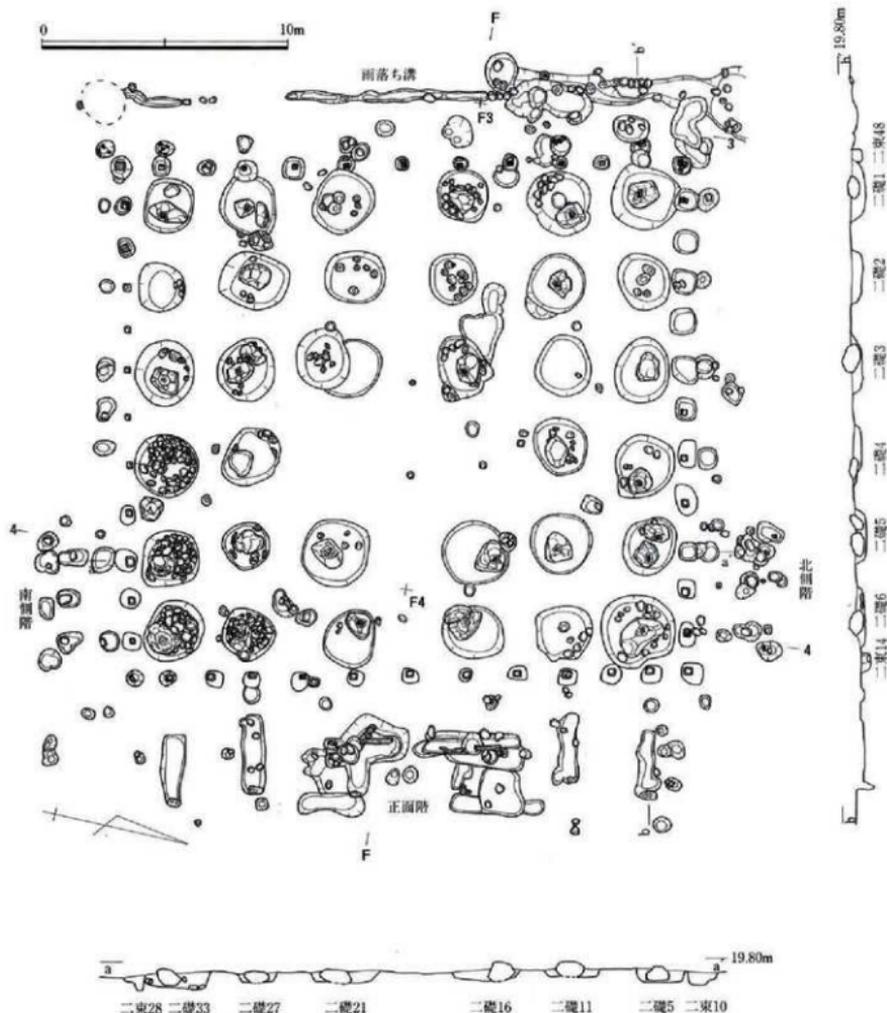


図7 二階堂平面図・エレベーション図

掘方内に遺存する束柱柱根は、長辺22~24cm、短辺が18~20cmの長方形で、長辺が建物と並行になるように据えられていた。

四隅の束柱は北東隅の一ヶ所（二東1）のみ遺存していた。この束柱は復元すると一辺が24cmの正方形になる。正方形なのは堂周囲の束柱の柱見付けを統一したためと考えられる。

掘方内で確認した束柱柱根の周囲には、短冊状に薄く剥いだ樹皮が張り付けられていた。また、束柱が立ち腐れていた掘方内でも、柱根の形に張り付けられた樹皮が遺存していた。掘立柱柱根に樹皮を張り付ける工法は、二階堂・阿弥陀堂・薬師堂・翼廊・中門で確認されている。

柱根が遺存しているものはこれの保護のため、遺存していない掘方では柱位置の保護のため、掘方内の調査は最小限にとどめ、すべて掘り上げていない。

（4）礎石・礎石掘方（二礎1~二礎34）

木製基壇束柱の内側で直径2~2.5m、深さ25~100cmの礎石掘方を34穴検出した。掘方の底面は鍋底状に丸みを帯び、根石として底面に張り付くように直径30cm大の川原石が遺存している掘方もある。掘方内の覆土は大きく2層に分けられ、上層は遺構面を覆っている軟弱な灰色粘土・灰色砂・焼けた瓦片が混じったもの、下層は地山の黒色粘土を張り付けたもので、川原石はこの黒色粘土で固定され、礎石を支える根石として掘方底面に敷き詰められていたものである。

34穴検出した礎石掘方の内25穴で礎石に使用された安山岩を検出した。いずれの安山岩も横転した状態で、礎石の原位置は留めていない。礎石に使用されていた安山岩は、長径140cm、短径100cm前後の自然石を用い、大きいものは長径が2m近いものもあり、柱の乗る柱座面だけ整って平に加工されていた。柱座面は約70cm程もあり、柱の太さは約2尺程度のものが考えられる。柱座以外の他の部分は赤く変色し剥離が見受けられることから、熱に弱い安山岩が火災時に熱を受け表面が剥離変色したものと考えられる。

検出した礎石は、すべて横転もしくは引き抜かれ、原位置を留めていなかった。原因として寺の廃絶後、手頃な大きさの根石を他の建物の礎石に転用するために抜き取ったり、耕作時にじゃまなため礎石の脇に穴を掘り落とし込んでしまったためと推測される。

（5）縁東

堂を取り囲む木製基壇の外側、堂の柱位置の延長線上（遺構面19.30m）に原位置を留める直径60cmの礎石3個（柱座面19.50m）と、径約60cm、深さ5~15cmの礎石掘方を15穴確認した。これらの礎石と礎石掘方は、堂の柱位置の延長線上で基壇周囲（遺構面19.20~19.30m）を巡ることから縁東と考えられる。堂の外側の柱列から縁東まで8尺である。

（6）階

a. 二階堂正面の階（二正階1~二正階4）

二階堂の正面中央、木製基壇束柱から東に10尺（3,060mm）の位置で、二階堂の桁行に平行する掘立柱の掘方2穴（二正階1・二正階2）と地中の根固めと思われる横材を検出した。横材は少なくとも2時期以上に渡り据え直された痕跡を持ち、これに伴う掘立柱も同じように据え直しが行われていたと考えられる。この柱穴からハの字状に開いた形、木製基壇から東に11尺（3,395mm）の位置でも2穴（二正階3・二正階4）の掘立柱が遺存する。木製基壇束柱のように樹皮を用いた根巻きの痕跡が認められるなど、3時期以上に渡る据え直しの痕跡が認められた。

これら4つの掘立柱は、二階堂の正面に位置し外側の柱穴がハの字状に開くところから、二階堂正面に取り付く階、登高欄の親柱（二正階1・二正階2）と袖高欄（二正階3・二正階4）の遺構と考えられる。

b. 二階堂側面の階（二南階1～5・二北階1～5）

二階堂の梁行五間の内、南側面の東1間目（二礎34・二礎33）と北側面の東1間目（二礎6・二礎5）で検出した遺構である。木製基壇から8尺（2,420mm）の位置で梁行に平行し、共に堂の柱間1間（11尺）を2間割にした長径120cm、短径50cmの掘方内に直径40cm大の礎石を据えた柱穴（二南階2・二南階3・二南階4と二北階2・二北階3・二北階4）を検出した。これら検出した礎石は階の扉桁を支えたものである。この柱穴からハの字状に開いた形、木製基壇から11尺（3,300mm）離れた位置で、各2穴（二南階1・二南階5、二北階1・二北階5）の掘立柱が遺存する。これらの柱穴は正面の階と同様、登高欄の親柱と袖高欄になるものである。柱穴の堀直しの痕跡から、2～3時期の修理の痕跡が認められる。

（7）雨落ち溝

二階堂背後、木製基壇西辺から西に9尺（2,760～2,780mm）の位置で、堂の桁行に平行する一条の溝を検出した。溝は30cm大の川原石の石列とこれの抜き跡と思われた。二階堂の正面及び側面では廃絶後の削平のため、溝は検出されていない。二階堂外陣から木製基壇までの距離が5尺なので合わせると軒出は14尺になる。

（8）二階堂及び木製基壇の規模

a. 二階堂の規模

基壇及び遺構面は埋没した後、耕作等で削平を受けたと考えられる。堂周囲の遺構面の標高は19.1～19.2m、木製基壇内側の標高は19.2～19.35mである。

原位置を留めている礎石は遺存していなかったが、検出した礎石掘方から二階堂は桁行五間、梁行五間の柱間を持っていたことが明らかになった。しかし、堂の精密な寸法は、原位置を留めている礎石がないため、求めることは出来ない。調査によって検出した木製基壇東柱の位置は、堂の柱間の広いところでは木製基壇東柱も対応して柱間が広く堂の柱位置と密接な関係があることが明らかになった。即ち木製基壇東柱2間を持って堂本体の1間を構成していたのである。

木製基壇桁行と梁行から求めた数値と各東柱間の数値を基に二階堂の各柱間を求めると附図3のようになる。桁行五間64尺の内、中央が15尺、左右それぞれに13.5尺・11尺。梁行五間58尺の内東から11尺・12.5尺・12.5尺・11尺・11尺となった。

b. 木製基壇の規模

木製基壇東辺中央の東柱（二東19）と西辺中央の東柱（二東43）を基準に木製基壇の桁行方向との関係を計測したところ、中央2つの東柱間の軸線距離は20,630mm、木製基壇東辺と木製基壇西辺と求めた軸線の交わる角度は正確に90度であった。このことは木製基壇の東辺と西辺が正確に平行関係にあることを示している。木製基壇の全長は東辺で22,460mm、西辺で22,528mmと西辺が68mm長い。木製基壇の東辺を基準にして両端に位置する二東25と二東37、二東13と二東1の角度を計測すると、それぞれ90度6分50秒と90度17分40秒となり、西辺に向かい僅かに開く形になる。この開きのため、木製基壇北辺の距離は20,650mm、南辺は20,663mmとなり中心の軸線距離より約一寸程の延びとなった。木製基壇の規模は、桁行方向が74尺、梁行方向が68尺であった。基準線とした木製基壇桁行の方位は、 $N-14^{\circ}43'35''-W$ である。

検出した二階堂の遺構面の海拔は19.10～19.35mである。

第3節 阿弥陀堂（図8、図版5・6）

（1）木製基壇

基壇は基壇内側の遺構面（19.10～19.50m）上に約40cm程の厚さで版築が遺存していた。版築は地山の黒色土と細かい泥岩混じりの暗褐色土を交互に地表面に積み上げたもので、地面を掘り込んで積み上げる掘り込み基壇ではない。

(2) 木製基壇東柱掘方（阿東1～阿東44）

阿弥陀堂を取り囲むように配置された木製基壇東柱の掘方を検出した。掘方は桁行五間、梁行四間の堂の柱間を半間毎に配置され、掘方の総数は44穴である。形状は短径60cm、長径100cm程の楕円ないし隅丸の長方形で、堂正面と左右両側の東列・北列・南列の掘方は地表面を、堂背後の西列は岩盤面を穿ち掘り込まれていた。掘方内の覆土は細かい泥岩が含まれる地山土に似た褐色土であった。

44穴確認した掘方の内21穴の底面には柱の沈下を防ぐ径20～30cm大の礎石が遺存する。

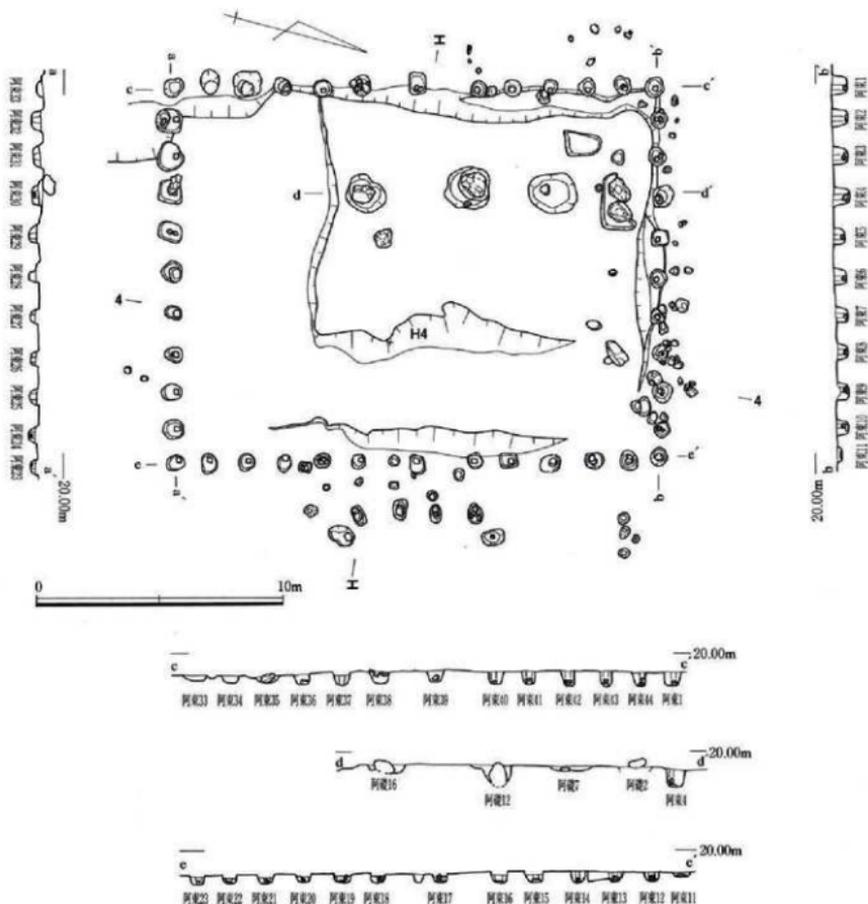


図8 阿弥陀堂平面図・エレベーション図

(3) 木製基壇東柱

44穴確認した東柱掘方の内25穴で柱根を確認した。また柱根が遺存していない掘方内でも、柱の立ち腐れた痕跡から柱位置が明らかになった。掘方内に遺存する東柱柱根は、およそ長辺20~22cm、短辺16~18cmで、長辺が建物と平行になるように据えられていた。四隅の東柱の内遺存する南東隅の阿東23は24×25cm、北西隅の阿東1は22cm四方とはほぼ正方形であった。これは隅の柱だけ柱見付を統一したためと考えられる。

(4) 礎石・礎石掘方(阿礎1~阿礎28)

木製基壇の内側で安山岩製の礎石を合計6個を検出したが、横転しているもの、穴の中に落とし込まれたもの、割られているもの等、原位置を留めているものはない。

礎石を詳しく観察すると、表面の剥離が著しく柱座面と思しき位置は失われている。これは地表に露出していた表面が、柱座面を中心に火災の熱で剥離したものと考えられる。また4ヶ所で確認した礎石掘方内の2ヶ所で根石が遺存していた。

(5) 縁東

基壇周囲で縁東の痕跡は認められない。おそらく基壇同様に地表面の削平を受けた時に、縁東の礎石は抜き取られ、痕跡も削り取られたものと考えられる。

(6) 階(阿階1~阿階6)

阿弥陀堂の正面中央、木製基壇阿東16・17・18の2,140mm東側で、阿弥陀堂の桁行と平行する柱穴(阿階2・阿階3・阿階4・阿階5)を検出した。柱穴の掘方はいずれも東西約80cm、南北約50cmの細長い楕円形を呈し、掘方内には30~45cm大の安山岩製の礎石が遺存する。柱穴(阿階4・阿階5)内には創建期の女瓦・男瓦片が根石として敷き込まれていた。

検出した4つの柱穴内に遺存する礎石は、阿弥陀堂の階を支える廊桁を受けるために据えられたものと思われる。

この他に検出した柱穴(阿階2)の南東約1m、柱穴(阿階5)の北東約1mの位置で、東西方向65~70cm、南北方向約100cmの平面形を呈する一対の柱穴(阿階1・阿階6)を検出した。この柱穴は、阿弥陀堂の正面に位置すること、柱穴が階の柱穴に対しハの字状に開くことから、柱穴(阿階2・阿階5)は阿弥陀堂正面階の登高欄の親柱、外側一対の柱穴(阿階1・阿階6)が袖高欄の遺構と考えられる。

(7) 雨落ち溝

阿弥陀堂の背後で4個の川原石を検出した。木製基壇東柱の列から約2.2mほど離れ規則正しく並んでいるわけでもないが、位置的に無視できない。雨落ち溝の名残である可能性がある。

(8) 阿弥陀堂及び木製基壇の規模

基壇の範囲で6個の礎石と礎石掘方3ヶ所が確認された。しかし6個の礎石は原位置を留めているものではなく、3ヶ所の礎石掘方も建物本体の芯心を求めることは出来ない。

阿弥陀堂の規模復元に、遺存する木製基壇東柱の芯心から柱間寸法を求めることとした。阿弥陀堂を取り囲む木製基壇東柱の位置がすべて検出され、木製基壇東柱の柱間2間を持って阿弥陀堂本体の1間を構成していることが明らかになった。木製基壇は四隅1間を除くと、桁行方向10間、梁行方向8間となる。従って阿弥陀堂の規模は、桁行5間、梁行4間となる。

木製基壇芯心距離から柱間を割り出すと、桁行5間の寸法16,700mm(54.75尺)の内中央1間が4,540mm(14.9尺)、残りの4間が各3,020~3,050mm(9.9~10尺)となる。梁行4間の寸法12,710mmの内中央

よりの2間が各3,330mm (10.9尺)、両側の各1間は3,020~3,050mm (9.9尺)となる。
 検出した阿弥陀堂の遺構面の海拔は19.10~19.50mである。

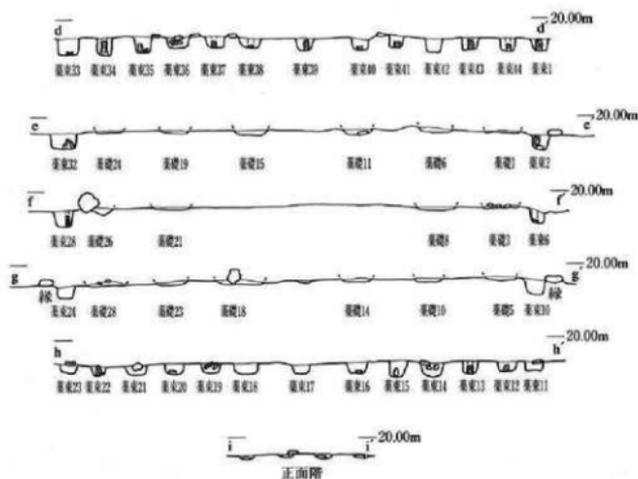
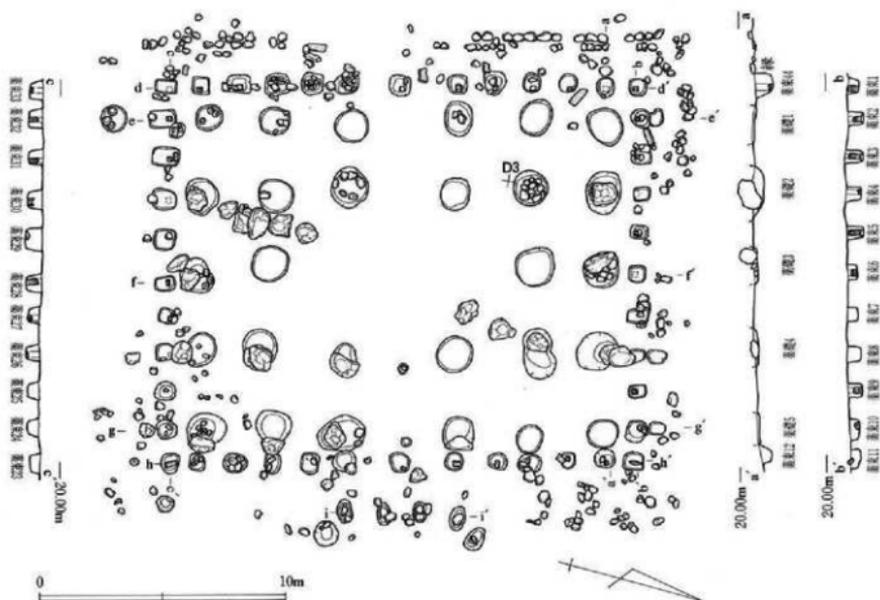


図9 薬師堂平面図・エレベーション図

第4節 薬師堂 (図9、図版7・8・9)

(1) 木製基壇

基壇を構成する様な版築は、後世の稲作などの耕作や削平のため遺存していない。基盤層である黒色土(地山)面の高まりが僅かに基壇の痕跡を留めていた。

(2) 木製基壇東柱掘方

堂跡を取り囲む木製基壇東柱掘方を検出した。検出した掘方は44穴で、長径70~110cm、短径50~85cm程の楕円ないし長方形の平面形で、遺構面を30~60cm程掘り込んでいた。

覆土は細かい土丹粒を含む黒色土であった。この黒色土が覆土の柱穴にはすべて長方形ないし正方形の断面形を持つ東柱が遺存していた。東柱が抜き取られている柱穴の覆土は、遺構面上を覆っている灰色粘土である。

(3) 木製基壇東柱(薬東1~薬東44)

44穴検出した東柱掘方の内15穴(薬東1・2・3・5・9・11・27・28・31・32・34・37・39・41・43)で、木製基壇外装の東柱柱根を確認した。確認した東柱柱根は、長辺21~21.9cm、短辺17~20cmの角柱で、長辺が建物と平行となるように据えられていた。

確認したすべての東柱の表面に、薄く短冊状に剥いだ樹皮が張り付けられていた。おそらく柱根の防腐措置と思われる。また柱根が遺存していない掘方でも、抜き取られた柱根の形に張り付けられた樹皮が残り、柱位置が確認できる掘方もあった。

掘方内に遺存する15本の東柱の内遺存状態が良好な3本をサンプルとして取り上げた。

薬東1は、木製基壇四隅の東柱掘方(薬東1・薬東11・薬東23・薬東33)の内ただ1点柱根が遺存していたものである。寸法は21.9cm×21.9cmの正方形の断面形を持つ。断面正方形なのは、四隅の柱は柱見付を統一したためと考えられる。

薬東2は、薬東1の東隣に位置する。寸法は長辺21.6cm、短辺18.4cmの断面長方形で、掘方底の30cm大の礎石の上に据えられていた。

薬東3は、薬東2の東隣に位置する。寸法は21.9cm×20cmで、正方形に近い断面形を持つ。

東柱の長辺は概ね7寸に統一され、この長辺が建物に平行するように据えられている。樹皮による防腐措置や、柱の表面が四面とも丁寧な仕上げられていることが特徴である。これは二階堂、阿弥陀堂で確認されている木製基壇東柱柱根に共通していることである。

また、木製基壇東柱掘方(薬東35・薬東36・薬東37・薬東38)の各中間に直径30cm大の安山岩が3個据えられている。木製基壇東柱の柱通りに正確に乗っていることから、木製基壇地覆材の下に入る延石と考えられる。

(4) 礎石・礎石掘方(薬礎1~薬礎28)

堂を取り囲む木製基壇東柱掘方の内側で、径120~190cm、深さ2~25cmの礎石掘方を28穴検出した。この掘方内に礎石が13個(薬礎2・3・4・9・14・17・18・22・23・25・26・27・28)、また掘方内に根石(薬礎2・3・7・11・16・20・25・28)が遺存する。

薬礎2に遺存する礎石以外は、すべて原位置は留めていない。この他に遺構面上に5個集められた状態で検出されている。

礎石に使われた安山岩は概ね径が1m前後の自然石で、柱座面は鑿で平らに加工した程度であった。すべての礎石は高熱を受け、表面が赤黒く変色したり剥離している。

検出した礎石掘方から薬師堂は阿弥陀堂と同じ桁行五間、薬行4間の堂であったことが明らかになっ

たが、礎石掘方から柱間寸法等、正確な堂の規模は把握できない。

(5) 縁束

木製基壇東柱の外側（葉東1・2・8・10・24・44）に据えられている直径30~50cm程の大きさの礎石（縁1~6）を検出した。堂の外側の柱列から礎石まで2,050mmであった。

この検出した礎石は、木製基壇内側の大きな礎石が大きな掘方と根石を伴っているのに対し、明瞭な掘方と根石を持っていない。これは礎石に加わる重さが比較的小さいことを示し、基壇の外側を巡ることと堂の柱位置の延長上に位置することから、縁を支えた縁束の礎石と考えられる

(6) 階

薬師堂正面中央、木製基壇東柱（葉東16・17・18）の東側2,400mmのところ、堂の桁行と平行する柱穴（葉階2・葉階3・葉階4・葉階5）を検出した。東西1m、南北約50~60cmの楕円の平面形で、柱穴の中には東西方向に長い安山岩製の礎石が遺存する。

この柱穴は、阿彌陀堂正面でも検出されているもので、堂正面に取り付く階の彫桁を受けるためのものである。

この他に検出した柱穴（阿階2）の南東約1m、柱穴（葉階5）の北東約1mの位置で、東西方向65~70cm、南北方向約100cmの平面形を呈する一対の掘立柱掘方（葉階1・葉階6）を検出した。この柱穴は、薬師堂の正面に位置すること、柱穴が階の柱穴に対しハの字状に開くことから、彫桁を受ける両端の柱穴（葉階2・葉階5）は薬師堂階の登高欄の親柱、外側一対（葉階1・葉階6）の柱穴は袖高欄の遺構と考えられる。

(7) 雨落ち溝

薬師堂の背面（西側）で、堂に平行する2列（部分的に3列）の30cm大の安山岩製の川原石が並ぶ石列を検出した。この石列の南北の軸線が堂と平行していることから、堂の外周を廻る雨落ち溝と考えられ

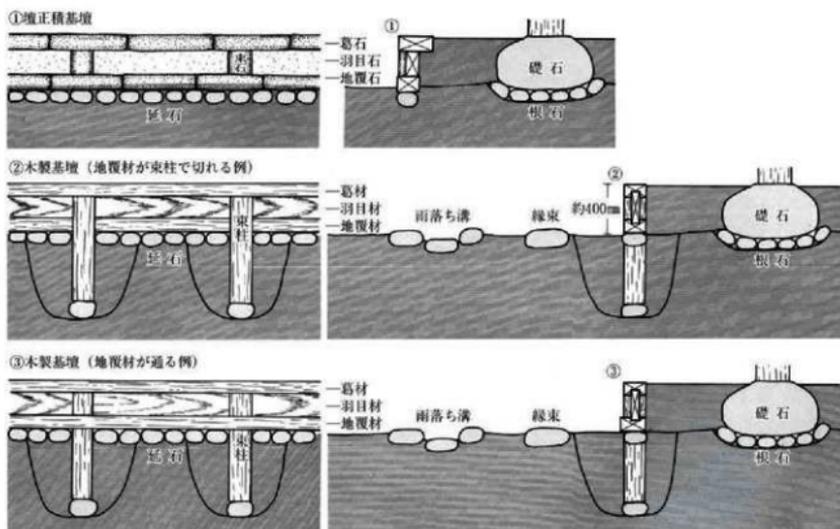


図10 基壇外装推定模式図

た。堂外側の柱列から石列の軸線まで約3,050mmである。溝は3列の石列からなり、中央の石列を両脇の石列より一段低く据え溝としている。堂の正面、両脇の雨落ち溝は石材が散乱している状況であった。

(8) 薬師堂及び木製基壇の規模

堂本体を支えていた礎石を掘っていた礎石掘方から、薬師堂の規模が桁行五間、梁行四間で、阿弥陀堂と同じ規模であることが明らかになった。しかし、木製基壇の礎石掘方内に遺存する礎石は、一つを除きのすべてのものが原位置を留めず移動もしくは横転していた。中には掘方の外側に集められていたものもあり、礎石が据えられていた正確な位置は不明である。

二階堂・阿弥陀堂と同様に、薬師堂もまた木製基壇を持つことが、堂を取り囲む掘立柱掘方や柱根から明らかになった。確認された木製基壇東柱の位置は堂本体の柱位置と密接な関係であることが明らかになっている。木製基壇東柱の位置を利用して、堂の平面形を復元することは有効な手段であると考えられる。

木製基壇東柱二間で薬師堂本体の柱一間を基本的に構成しているので、東柱掘方内の遺存する角柱の位置から基壇と薬師堂の平面形を復元すると附図3のようになる。

木製基壇の桁行方向の全長は、角柱が向かい合って遺存していた薬束2・薬束32から19,155mmであることがわかる。梁行方向の全長は、同じく角柱が向かい合って遺存する薬束13・薬束43から15,240mmであることがわかる。いずれの数値も向かい合って遺存する角柱根の芯心を結び現地で計測したものである。

基壇高は、唯一原位置を留めていた堂礎石掘方7内に遺存する礎石の柱座面の高さ(標高20.00m)と、基壇西列に遺存していた木製基壇の地覆材が載る延石上面(19.42m)の標高差から、およそ48cm程度になると考えられる。

基壇桁行方向と梁行方向の数値から、薬師堂の桁行五間と梁行四間の各柱間を求めると、桁行五間の内、正面中央の一間が4,550mm、中央の両脇二間が各3,019mmで桁行は16,625mmである。また梁行四間の内、中央二間が各3,370mm、両端一間が各3,010mmで梁行は12,760mmである。

検出した薬師堂の遺構面の海拔は19.40～19.70mである。

第5節 北複廊 (図11、図版10)

(1) 礎石・礎石掘方(北複1～北複18)

二階堂と薬師堂を結ぶ桁行五間、梁行二間の建物で、二階堂北側面の西から一・二間目、薬師堂南側面の西から一・二間目に取り付く。18穴確認した直径60～90cm、深さ5～10cmの礎石掘方の中で、1ヶ所(北複9)で礎石が遺存していたが原位置は留めていない。礎石掘方の内6ヶ所(北複3・北複10・北複12・北複13・北複15・北複16・北複18)で根石が遺存していた。他の礎石掘方内は根石の圧痕のみが確認された。また、北複15の掘方内の根石圧痕の下に更に別の根石が存在していることが明らかになった。この2時期の根石の存在から、少なくとも北複廊は二回の建て替えがあったことになる。

(2) 縁東

北複廊の桁行(東辺と西辺)の柱列から1,800mm(6尺)離れた位置で、桁行と平行する直径約60cm、深さ約10cmの礎石掘方を9穴確認した。北複廊に平行すること、雨落ち溝の内側に位置することから縁東礎石の掘方と考えられる。

(3) 雨落ち溝

北複廊桁行の西辺から2,400mm(8尺)離れて、平行に列べられた直径30cm大の川原石列と石の抜き跡と思われる溝を南北約10m検出した。北複廊桁行と平行することから雨落ち溝と考えられる。対応す

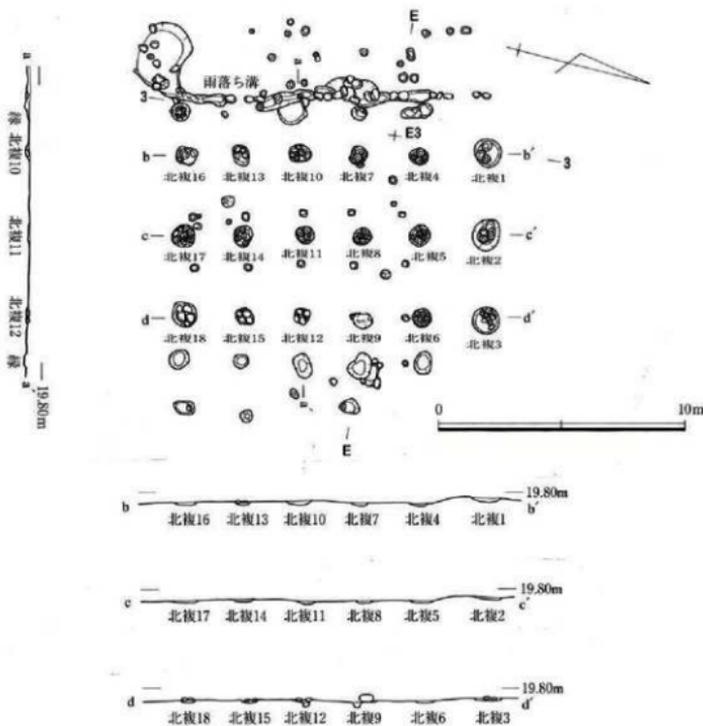


図11 北複廊平面図・エレベーション図

る東辺の雨落ち溝は削平のため検出されていない。

(4) 北複廊の規模

遺存する礎石と礎石掘方から桁行五間、梁行二間の柱間を持つことが明らかになった。この規模は二階堂と阿弥陀堂を結ぶ南複廊と同じである。北複廊桁行の全長は12,265mm、桁行五間の柱間は各2,453mm、梁行の全長は6,600mm、梁行二間の柱間は各3,300mmである。北複廊南辺まで二階堂木製基壇東柱から3,040mm (10尺)、二階堂縁東から2,130mm (7尺) である。北複廊北辺まで薬師堂木製基壇東柱から2,435mm (8尺)、薬師堂縁東から1,615mm (5.3尺) である。二階堂木製基壇北辺東柱と薬師堂木製基壇南辺東柱間の距離は17,740mm (58尺) である。基壇に関する痕跡が確認されないことから、北複廊は基壇を持たないものと考えられる。

検出した北複廊の遺構面の海拔は19.30~19.37mである。

第6節 南複廊 (図12・13、図版10)

(1) 礎石・礎石掘方 (南複1~南複18)

二階堂と阿弥陀堂を結ぶ桁行五間、梁行二間の建物で、二階堂南側面の西から一・二間目、阿弥陀堂北側面の西から一・二間目に取り付く。18穴確認した直径60~90cm、深さ5~10cmの礎石掘方の中で、

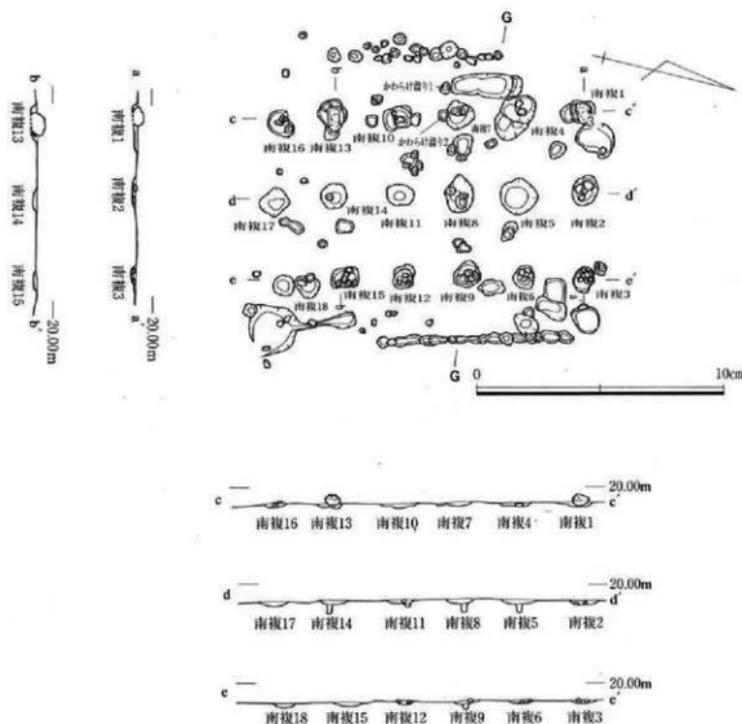


図12 南複廊平面図・エレベーション図

2ヶ所（南複1・南複13）で礎石が遺存していた。礎石の上面は鑿で平らに削り出された直径30cmの柱座が確認された。礎石掘方の内9ヶ所（南複2・3・4・6・9・10・11・12・16）で根石が遺存し、他の礎石掘方は根石の圧痕のみが確認された。また、礎石掘方の内4ヶ所（南複5・8・14・9）で下に掘立柱柱穴が存在していることが明らかになった。礎石掘方の内3ヶ所（南複2・11・3）で根石の中に創建期の瓦片を含む。この瓦片や掘立柱の存在から、少なくとも北複廊は三回の建て替えがあったと考えられる。

（2）緑束

南複廊桁行（東辺）の南複6から約1,800mm離れた位置で、直径約60cm、深さ約10cmの礎石掘方を確認した。南複廊に平行する雨落ちと考えられる溝の内側に位置することから緑束礎石の掘方と考えられる。

（3）雨落ち溝

南複廊桁行の東辺から2,520mm離れて30cm大の川原石と石の抜き跡と思われる溝を南北約8m検出した。同じく南複廊桁行の西辺から約2,400mm離れて30cm大の川原石と石の抜き跡を南北約7mにわたって検出した。この東辺と西辺の溝は、南複廊桁行と平行することから雨落ち溝の痕跡と考えられる。基壇に関する痕跡が確認されないことから、南複廊は北複廊と共に基壇は持たないものと考えられる。

（4）南複廊の規模

遺存する礎石と礎石掘方から桁行五間、梁行二間の柱間を持つことが明らかになった。この規模は二

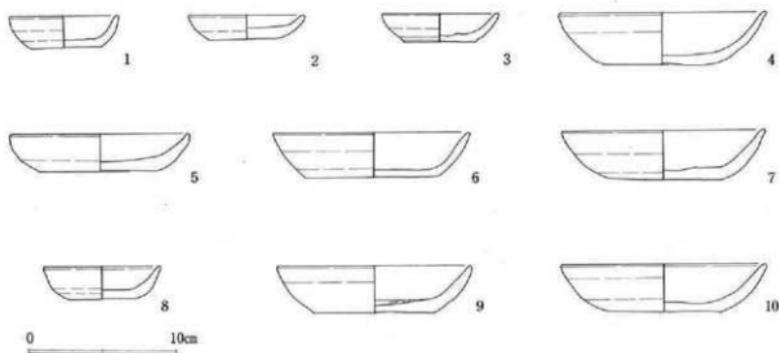


図13 南複廊のかわらけ溜りの遺物

階堂と薬師堂を結ぶ北複廊と同じである。南複廊桁行の全長は12,750mm (42.5尺)、桁行五間の柱間は各2,550mm (8.5尺)、梁行の全長は6,600mm (22尺)、梁行二間の柱間は各3,300mm (11尺)である。南複廊北辺と二階堂木製基壇東柱の間は2,550mm (8.5尺)で、南複廊南辺と阿弥陀堂木製基壇東柱の間は3,300mm (11尺)、二階堂木製基壇南辺東柱と阿弥陀堂木製基壇北辺東柱間の距離は17,400mm (57.4尺)である。

検出した南複廊の遺構面の海拔は19.24～19.33mである。

第7節 北翼廊・北中門・北釣殿 (図14・15・16・17・18・19、図版11～15)

(1) 礎石・礎石掘方 (北翼1～北翼40)

薬師堂の北側で検出した北翼廊は、検出した礎石・掘立柱柱根等から、梁行一間、桁行は南北方向五間、金折に東へ曲がり、東西方向十四間の細長い建物で、基壇の痕跡は認められない。多くの礎石が原位置を留め、礎石表面に残る柱の痕跡、礎石の下に遺存していた掘立柱柱根から北翼廊の柱間寸法を復元した。

南北列 (北翼1～北翼12) の礎石は径70～100cmの大きさで、据え直しの痕跡が見られないことからI期の礎石を使い続けてたと考えられる。また、半間毎に入る大引きの東石の存在から床が張られていたと考えられる。礎石の下は根固めの根石で固められ、火災の熱で変色した表面は白っぽく丸い柱 (直径約27cm) の形が観察され (北翼8)、柱の大きさ位置を復元することが出来る。

東西列 (北翼13～北翼22) の礎石は径40～60cmの大きさで、据え直されたものであった。南北方向と東西方向の金折部の礎石は、据え直しの見られない大きな礎石の上に、小さな礎石が乗せられていた。(北翼9・11・12) また他の東西方向の礎石の下には掘立柱柱根が遺存し、更に掘立柱の周囲では南北列のI期の礎石の下で確認されている根石が検出された。これは礎石の上に建てられた建物が後に掘立柱、そして最後にまた礎石を使った建物へと建て替えられたことをうかがわせる。掘立柱柱根の先端は炭化 (北翼18下) しており火災にあったことがわかる。

南北五間と東西方向十四間分の内、金折部から六間目までが廊下、一間おいて八間目が中門、更に一間おいた残り十間～十四間目が釣殿と考えられる。

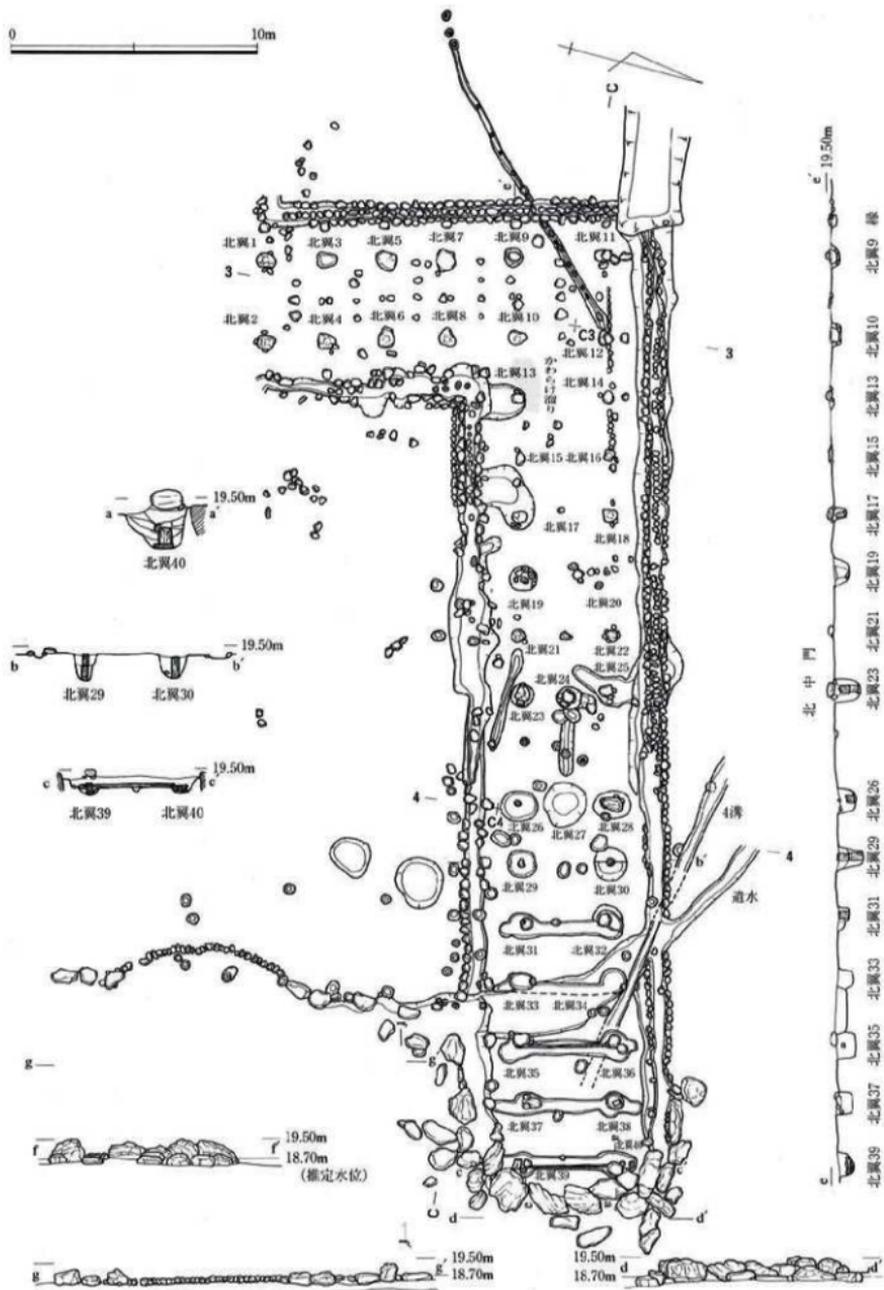


図14 北翼廊平面図・礎石掘方見通し断面・疊石立面図

(2) 縁束

北翼廊の礎石列の外側で径40cm大の礎石が並ぶことが確認されている。北翼廊の柱通りの外側に平行することから縁束の礎石と考えられた。

(3) 雨落ち溝

縁束の礎石と考えられる礎石列の更に外側で、径30~50cm大の安山岩を敷き並べた雨落ち溝を検出した。北翼廊に平行に三列に敷き並べた石列の中央列を一段低く据え溝としていた。

(4) 北中門（北翼23~北翼28）

北翼廊東西列の西から八間目の柱間は4,480mmあり、他の柱間の約2倍あり中門と考えられる。一間幅(3,700mm)の梁行も、中間に礎石(掘立柱)を置き二間割としていた。北翼23~北翼28がこれに当たり、中央棟柱の位置にある北翼24と27の間には地覆材の抜き跡と考えられる細長い溝が確認された。

北翼23・26下では、他の北翼廊東西列のように掘立柱柱根、北翼25・28下では掘立柱の抜き跡を、北

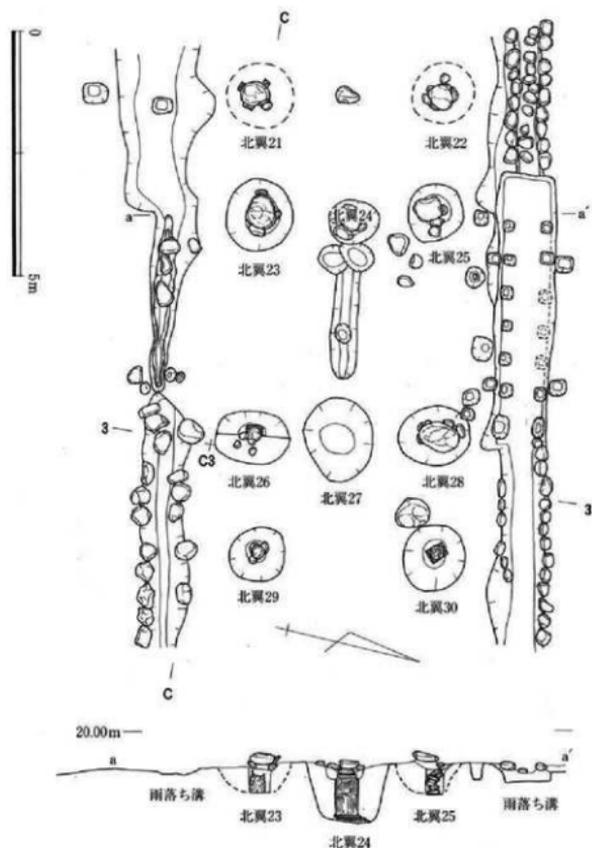


図15 北中門平面図・セクション図

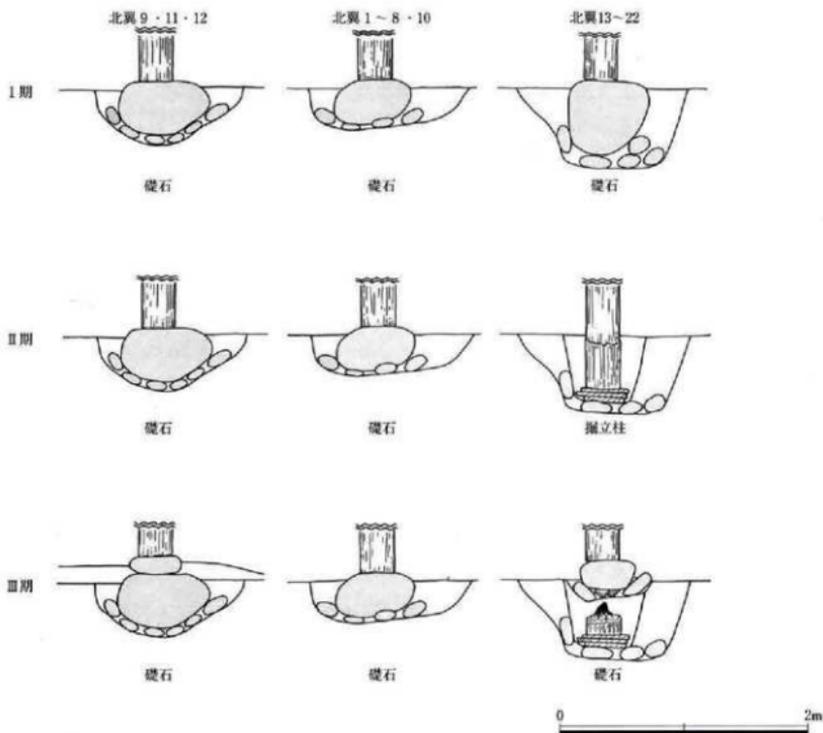


図16 翼廊柱変遷模式図

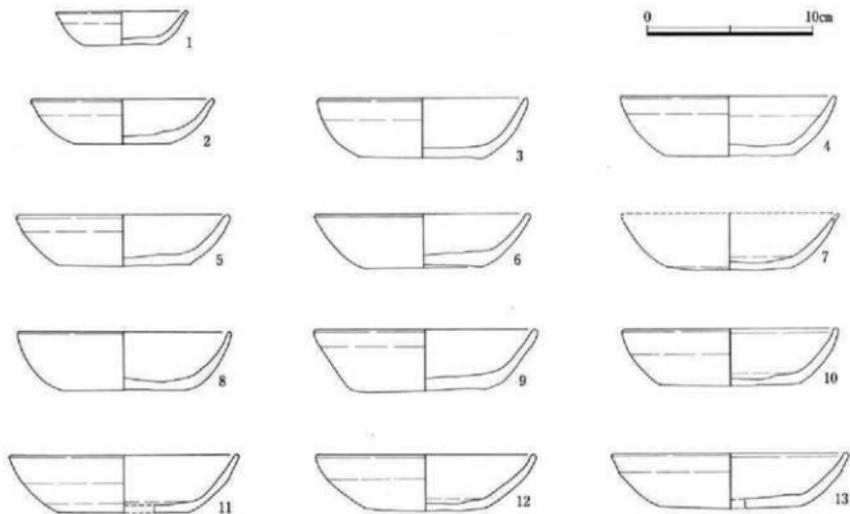


図17 北翼廊かわらけ溜りの遺物

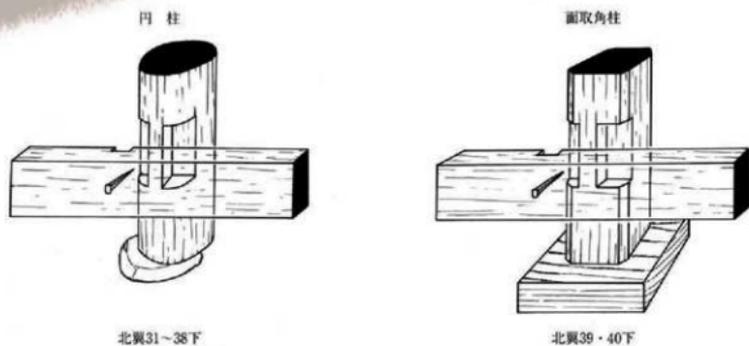


図18 釣野掘立柱・横木組合せ模式図

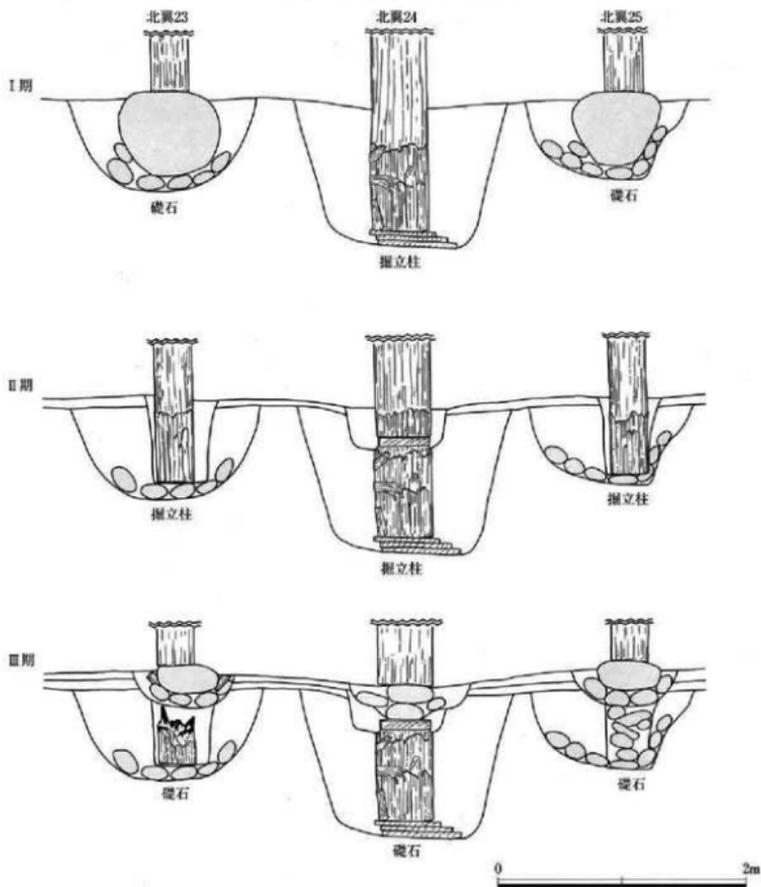


図19 中門柱変遷模式図

翼23・25・26・28下では根石を確認した。

中央の北翼24の礎石の下で方形で一辺の長さ約40cm、厚さ6cmの礎板と更にこの下から直径約45cm、残存する高さ70cmの掘立柱柱根を検出した。このことから礎石1時期と掘立柱2時期の計3時期に渡る中門の変遷が明らかになった。

この検出した柱根の周囲には幅約5cmの檜皮と思われる樹皮を縦方向に張り、これを同じ樹皮で帯状に巻き留めていた。同じ中央の北翼27では、抜き取られたのか、掘立柱柱根は遺存していなかったが掘方底には樹皮残片が散乱していた。

掘立柱柱根の根本に樹皮を巻く例は、同じ北翼廊の北翼20下で確認した掘立柱柱根に見られる。また、二階堂・阿弥陀堂・薬師堂の木製基壇東柱（I期）の柱根にも共通して見られる工法である。

北中門の正面、北辺雨落ち溝にかかる場所で雨落ち溝が、幅約120cm、長さ550cm、深さ約30cmに箱状に深くなり、溝の底面から約70cm間隔で左右対に計14穴の柱穴を検出した。溝が箱状に深くなることから、溝の土留め板を押さえる柱と考えられる。この箱状の溝を挟むように四穴の掘立柱柱穴を検出した。長さ1,500mm、幅2,500mmの間隔を持ち、北中門の正面で雨落ち溝を挟んでいることから溝に架かる橋の橋脚になるものと考えられる。この橋脚遺構は、雨落ち溝の玉石の下から検出されたことから、玉石を使った雨落ち溝部分は橋脚遺構と時期差が認められる。南辺雨落ち溝にかかる場所では橋脚遺構は検出されていない。

(5) 北釣殿（北翼29～北翼40、図版14・15）

a. 礎石

北中門の東に延びる翼廊の先端、十間目～十四間目までの梁行一間、桁行五間の建物である。建物本体を支えていた礎石5個を遺構面上で検出した。礎石の大きさは径60cm程で、表面原位置を留めているものは北翼36・40である。いずれの礎石も火災時の熱で表面が剥離している。

十・十一間目の北翼29～34に遺存する礎石と根石の検出状況は、北中門の西、翼廊東西列のⅢ期の礎石と根石の検出状況と同じであった。先端の十二～十四間目の北翼35～40の礎石及び根石の掘え方は、Ⅲ期の遺構と考える5溝の縁を補修している瓦群の上面を張り増した地業層を切り込んで掘えられている。このことから北翼35～40に遺存する礎石及び掘方は、Ⅳ期の遺構と考えられる。

b. 変遷

北中門の西、翼廊東西列に遺存する礎石と掘方内で、掘立柱柱根が遺存していることが確認された。翼廊の梁行幅と桁行幅を確認するために、北翼26・31・29、北翼29・31を立ち割ったところ、北翼29下で上下二段に重なった柱根を検出した。下段の柱根は直径27cm、高さ59cmで、上面は水平に切られていた。水平に切った下段の柱根の真上に上段の柱根を掘えていた。上段の柱根は直径27cm、高さ45cmであった。北翼29の根石の下で検出した上下二段の柱根から、礎石1時期と掘立柱2時期の計3時期に渡る釣殿の変遷が明らかになった。

c. 面取り柱

北翼廊及び釣殿の礎石下で確認されている掘立柱柱根は直径27cmの円柱であった。東端、先端部の北翼39・40下で検出した柱根は一辺23cmの面取り角柱であった。桁行（2,748mm）も他の桁よりも約1尺長いことが明らかになった。

d. 布振り

翼廊先端から西に四間分では、確認した円柱と面取り角柱の掘立柱柱根の梁方向沿う形で、幅約40cm、深さ約40cm、長さ約5m40cmの断面箱形の布振りの掘方を計5本検出し、2本の中で縦18cm、幅9cm、

長さ約5mの横木を検出した。先端の二本の面取り角柱を繋ぐ横木は、角柱の西側に沿って置かれ、釘で打ち付けられていた。他の円柱を繋ぐ横木は、円柱の東側に沿って置かれ同じように釘で打ち付けられていた。柱には断面凸形のホゾを、横木には断面凹形のホゾを切って組み合わせ、長さ約18cmの長い角釘で打ち付けられていたものである。横木と柱は地中で梁方向の柱根を結びつけていることから、地中梁とでも呼べるものである。また、一部の横木側面に縦方向の樹皮が張り付けられていた痕跡が検出された。樹皮は創建期（I期）の各堂木製基壇束柱、翼廊掘立柱の柱根等で防腐措置として行われていたと考えられる工法である。

（6）北翼廊の規模

薬師堂脇から北に延びる北翼廊は、検出した礎石・掘立柱柱根等から、梁行一間、桁行は南北方向五間、金折に東へ曲がり、東西方向十四間の細長い建物であることが明らかになった。薬師堂脇から北に延びる南北列の梁行の寸法は3,330mmである。桁行五間（13,766mm）の内、南から三間までは各2,440mmで、四間目は幅が1尺分広く2,746mmであった。五間目は更に広く3,700mmで、これは東西列の梁行幅である。東西列の梁行の寸法は3,700mmである。桁行十四間（37,318mm）の内、西から一間目は南北列の梁行寸法の3,330mmである。二間目から七間目までが各2,440mmで、八間目の柱間は4,480mmある。これは他の柱間の約2倍近くあり中門と考えられる。梁行（3,700mm）も中間に礎石（掘立柱）を置き二間割としていた。北翼23～28がこれに当たり、中央棟柱の位置にある北翼24と27の間には地覆材の抜き跡と考えられる細長い溝が確認された。

翼廊先端、釣殿部分の礎石下に遺存する柱根の直径は27cmで、翼廊南北列の礎石表面に残る柱（北翼8）から計測した約27cmと同じであった。検出した柱根の芯心から計測した翼廊の梁行（北翼29・30間）は3,690mm、桁行は（北翼26・29間）2,429mmと（北翼29・31間）2,419mmである。ここから先3間分が2,424mm（北翼32・38間）、先端一間が2,748mm（北翼32・40間）で、北翼廊建構面の海拔は19.24～19.33mである。

第8節 南翼廊・南中門・南釣殿（図20・21、図版16・17）

（1）礎石・礎石掘方（南翼1～南翼22）

阿弥陀堂の南側で検出した南翼廊は、検出した礎石掘方・根石等から北翼廊と同じ梁行一間、桁行は南北方向五間、金折に東に曲がり東西方向十間以上の細長い建物で、北翼廊と同じく基壇の痕跡は認められない。礎石の多くは失われていたが、礎石掘方・掘方内に残る根石、阿弥陀堂木製基壇束柱から南翼廊の柱間寸法を復元した。

南北列には礎石は遺存せず、岩盤面を掘り窪めた掘方が一間幅で五間確認された。五間目で金折に東へ曲がり、岩盤面は黒色粘質土（中世地山）・地業面へと変わる。直径1m程の礎石掘方内には、径25cm程の安山岩製の根石が遺存する。金折に曲がった東西列の南側は、西から二～七間目まで水路によって削り取られ遺存していない。九・十間目には根石と共に礎石が2つ遺存するが原位置は留めていない。

（2）南縁東

南翼廊の東西列の北外側に径約40cmの掘方が5つ並ぶ、廊柱通りの外側に並行することから縁東礎石の抜き取られた跡と考えられる。雨落ち溝は削平のため抜き跡の痕跡すら確認できない。

（3）南中門（南翼23～南翼28）

南翼廊東西列の西から八間目の柱間は4,880mmあり、他の柱間の約2倍あり中門と考えられる。一間幅（3,660mm）の梁行の中間に礎石（掘立柱）を置き二間割としていた。南翼23～28がこれに当たり、棟柱の位置にある南翼27の礎石掘方の下には直径約50cm、長さ65cmの掘立柱柱根が遺存する。このこと

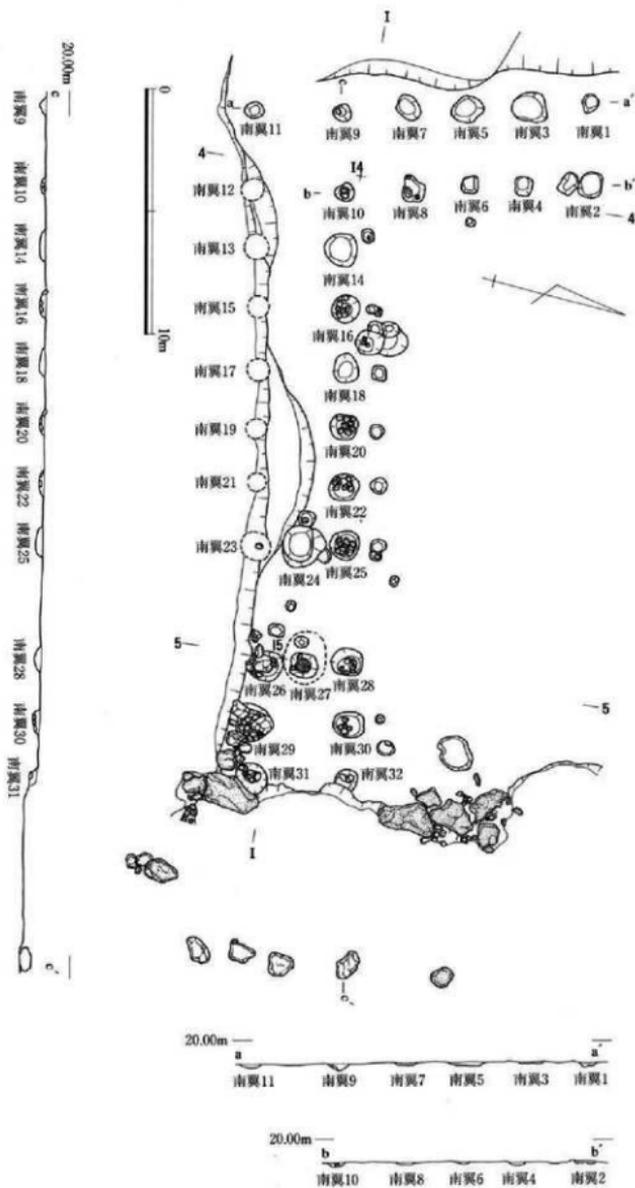


図20 南翼部平面図・エレベーション図

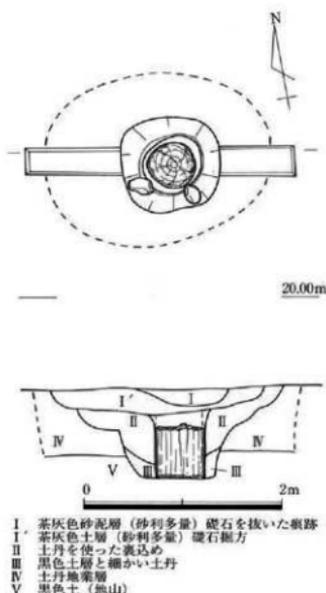


図21 南中門東側樁柱根

第9節 その他の建物

(1) 堂前（複廊と翼廊部分）で検出された掘立柱建物（図22）

a. 北複廊根石下で検出した掘立柱建物

北複廊の位置で、柱間2,000~2,300mmの南北三間（6,300mm）、東西二間（4,200mm）の、更に南に一間（2,000mm）張り出す掘立柱建物を検出した。この掘立柱建物の柱穴の内2穴が、北複廊の礎石掘方（北複12・北複15）内に遺存する根石の下で検出されている。

北複廊は礎石掘方内の根石にⅡ期の瓦を用いることから、Ⅲ期弘安年間火災後の再建された建物と考えられる。また検出された掘立柱柱穴はⅢ期の礎石根石の下に遺存することから、北複廊がない時期、Ⅲ期弘安年間再建にかかわるものと考えられる。この他に南複廊でも同じように根石下から複数掘立柱が検出されている。

b. 北翼廊先端部で検出した掘立柱建物

地山面を掘り込んだ梁行二間（6,150mm）、桁行六間（14,275mm）の縦柱掘立柱建物を検出した。柱根は遺存していなかったが多くの柱穴内で、Ⅰ期の瓦を柱穴内に垂直に差し込み柱の根固めとしていた。

Ⅰ期の瓦を根固めとして用いていること、Ⅱ期の翼廊の遺構である横木の掘方に建物の掘立柱掘方が切られていることから、この掘立柱建物はⅠ期とⅡ期の翼廊の間にここに建っていたことになる。とするならば可能性として寛元・宝治年間修理時にかかわる作事小屋等の建物と考えられる。

c. 薬師堂前面（釣殿脇）で検出した掘立柱建物

薬師堂から東の池に延びる6溝と北翼廊に挟まれた地域で検出した瓦積み面下で、Ⅱ期の砂利面を掘

から少なくとも南中門は掘立柱の時期と礎石の時期の2時期があったことになる。

(4) 南翼廊の規模

阿弥陀堂脇から南に延びる南翼廊は、検出した礎石・礎石掘方等から、梁行一間、桁行は南北方向五間、金折に東へ曲がり、東西方向十間以上の細長い建物であることが明らかになった。阿弥陀堂脇から南に延びる南北列の梁行の寸法は3,330mmである。桁行五間（13,420mm）の内、北から四間まで各2,440mmで、五間目は広く3,660mmで、これは東西列の梁行幅である。東西列の梁行の寸法は3,660mmである。桁行十間以上（28,319mm以上）の内、西から一間目は南北列の梁行寸法の3,330mmである。二間目から七間目までが2,440~2,446mmで、八間目の柱間は4,880mmもあり他の柱間の約2倍あることから中門と考えられる。梁行（3,660mm）も中間に礎石（掘立柱）を置き二間割としていた。中門から東に二間延びる柱間は各2,440mmであった。検出した遺構面の海拔は19.24~19.33mである。

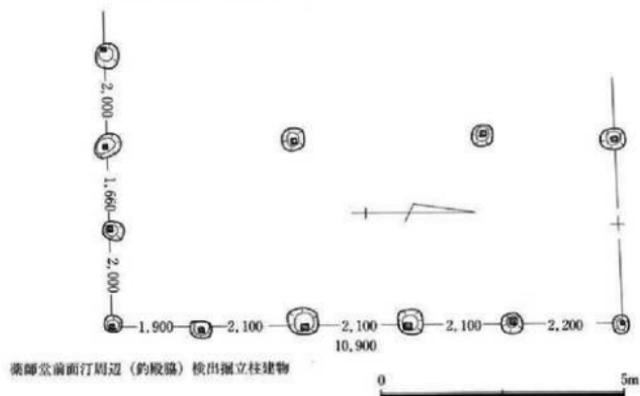
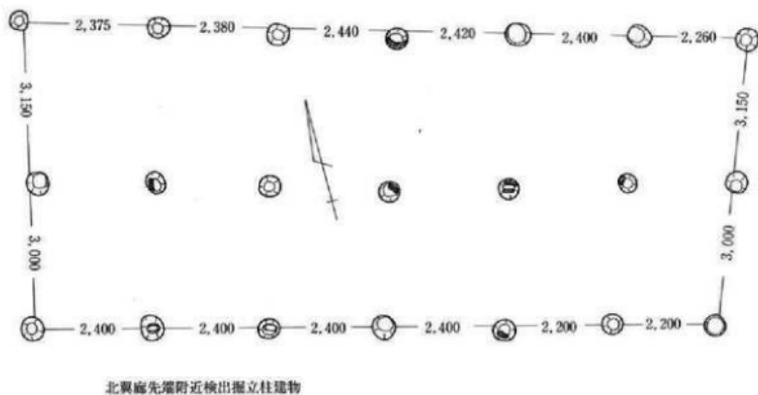
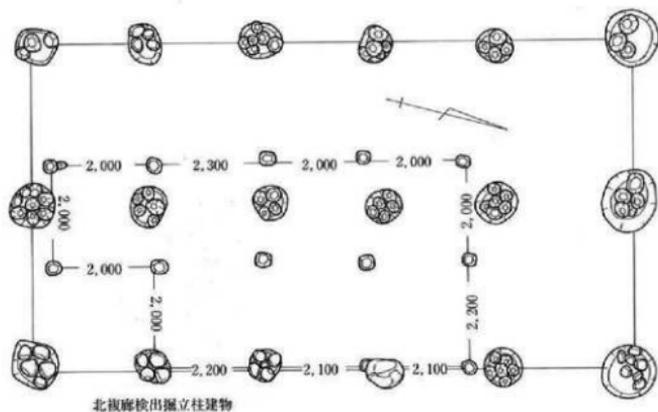


圖22 獨立柱建物

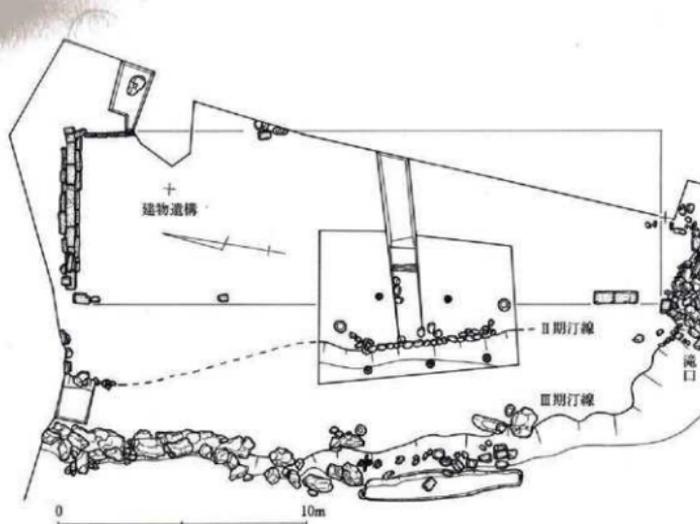


図23 III期苑池東岸建物遺構

り込んだ掘立柱建物を検出した。東西三間以上（5,560mm以上）、南北五間（10,900mm）の規模で東列は池に張り出している。柱間は1,660～2,700mmと幅があり、用いられている柱も120～180mmと幅がある。抜けているところもあり、建物というより残骸のようなものか。

II期の砂利面を切り、III期の瓦積み面の下から検出されていることから、II期の範囲内の遺構と考えられる。

（2）東岸で検出した鎌倉石製の溝と石列（図23）

苑池東岸、橋より約12m北の地点で鎌倉石の切石を用いて築かれた幅約40cm、深さ25cmの東西方向に延びる溝を7m検出した。溝の東端と西端から鎌倉石の石列が、橋を越え南の滝口に向かい延びることが明らかになった。溝と石列に囲まれた範囲は東西7m、南北約25mである。また橋の橋脚遺構と異なり、溝端から南に延びる石列と方向を同じくする柱間2.8mの掘立柱が橋正面で検出されている。

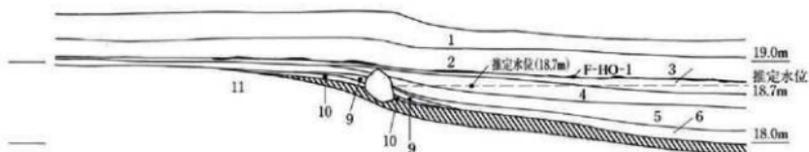
滝口内に大量に遺棄されている石材はこの遺構に用いられたものとも考えられる。遺構の時期はIII期からIV期のものと考えられる。東関紀行、海道記等の紀行文の中で東の山原から参拝した記録が見られることから二階堂正面の東岸に参拝施設があった可能性が考えられる。

第3章 庭園の調査

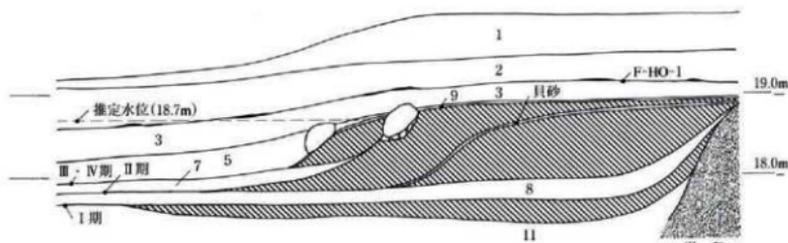
第1節 層序と概要（図24・25）

苑池は推定南北約200m、東西約50～70mの範囲で瓢箪形に中央がくびれている。水深はおおよそ1m程、水位は海拔18.7m前後と推定される。

苑池の北方では苑池に水を取り込むIV期の取水遺構が検出されている。苑池中央では、西岸から東岸



西岸標準土層図



- | | | | |
|-------------|------------|--------------------|-----|
| 1. 表土 | 5. 青灰色粘質土層 | 9. 砂利層(1cm大の細かい砂利) | 地栗層 |
| 2. II期作土 | 6. 茶褐色腐食土層 | 10. 砂利層(5cm大の砂利) | |
| 3. 灰色粘質土層 | 7. * | 11. 黒色粘質土層(中世地山) | |
| 4. 青灰色粘土・砂層 | 8. * | F-HO-1 富士山宝永年間火山灰 | |

東岸標準土層図

図24 苑池標準土層図

に架けられた橋、南方では大小の岩を組み合わせた島が造られている。

現地表面の海拔はおよそ19.5～19.2m、海拔19.0m前後で宝永年間の富士山火山灰層(F-HO-1)が観察される。火山灰層より下に分厚く灰色粘質土層、青灰色粘質土層が堆積している。苑池中央に架かる橋より南側では池底に土丹を敷き詰め、北側では地山を削りだし池底としている。池底は海拔約17.6～18.7mで、池底には厚く茶褐色の腐食土層の堆積が見られ、木製品・木っ端・多量の花粉化石が含まれていた。

苑池は堆積、埋め立ての状況からI期(創建期)、II期(鎌倉中期)、III期(鎌倉後期)からIV期(室町期以降)までの4時期に大きく区分される。

第2節 苑池の調査

(1) 汀の調査

a. 西岸(図版18・19・20)

北芙蓉から南芙蓉を越え、南北に細長い苑池の伽藍側の汀である。汀線はI期より、緩やかな斜面上に砂利を敷きつめた洲浜の手法で表されている。砂利は地山あるいは土丹を敷き詰めた陸から池底にかけ敷き詰められている。砂利の範囲は陸地では全面、池では岸辺から池中にかけ幅約10mの範囲に砂利が敷かれていた様子が観察された。池底や汀線際で検出した砂利は、小さな砂利(径1～2cm)を大量に用いた上層(鎌倉中期以降)と池底に大きな砂利(径約6cm大)を敷いた下層(創建期)の2時期に大別される。汀線際上層で検出したこの砂利敷きの洲浜に沿って1～2m大の変化に富んだ様々な形の景石が検出された。景石には凝灰砂岩質のものと火成岩(溶岩)があり、また根石を用いしっかり根固めされたものと、汀にただ置かれただけのものが見られた。この景石の並べられた海拔18.7m前後が水面

い土は、池中で水が澱んだ状態で堆積したものの、粗い砂と水摩した土丹の混じる土は強い流れ込みがあったことが推察できる。池底の堆積土中には多くの木片、植物遺体が混入し、見た限りでは松葉が多いように思われる。

北岸周辺ではⅠ期・Ⅱ期・Ⅲ期の他、Ⅳ期を取水口周辺の良好な堆積状況から3つに細分することが出来た。

- Ⅰ期 創建期 (12世紀末) : 東側を南北に走る市道の下に池底が延びて行く。
- Ⅱ期 寛元・宝治年間 (13世紀中) : 約60cmの厚みを持った地層層で、埋め立てを行って池の幅を狭めている。東側市道下に池底が延びる。
- Ⅲ期 弘安年間 (13世紀後) : Ⅱ期に引き続き埋め立てが行われ、池の幅を狭めている。
- Ⅳ期-3面 (14世紀前半) : 取水遺構を中心に埋め立てが行われ、新たな池底が張り増される。
- Ⅳ期-2面 (14世紀後半) : 海拔19.6~18.5mで、Ⅳ期-3面の汀を灰褐色土で張り増したⅣ期-2面を検出している。池中では約60cmの土砂の堆積が観察された。堆積土は澱んだ水の堆積と考えられるきめ細かい暗茶褐色粘質土と、多量の水が流れ込み堆積したと考えられる粗い砂・水摩した土丹礫・砂利が互層に堆積している。汀周辺には景石が並べられ、景石は根固めに土丹を用いて脇を固めたものの、根固めに瓦を用いたもの、大きな景石の上に重ねられたものが確認されている。取水口周辺の汀では点々と長さ80cm程の景石が並べられていた。この検出された景石はただ面上に置かれているだけで根固めされていない。
- Ⅳ期-1面 (15世紀以降) : 富士山宝永年間のスコリア (F-HO-I) の下、海拔19.6~19mで灰茶褐色砂質 (粘質) 土層を検出している。面上には鎌倉石切石が散乱し、菟池はかなり縮小していると考えられる。

(2) 橋の調査 (二階堂前・阿弥陀堂前)

a. 二階堂前 (図26・27、図版27・28・29)

・Ⅳ期の橋

Ⅳ期の菟池に設定した二階堂の中軸線と直交した、平行に等間隔で並んだ南北の長さ約7m、東西の幅50cm~1mの溝状の布掘りを4ヶ所 (布掘り1・2・3・4) 確認した。布掘りは平行に11尺の間隔で並び、南北の両端には10×8cm程度の太さの角杭が打ち込まれている。また布掘り4では両端だけでなく布掘りを挟み込むように左右に計3本の杭が打たれていた。

4ヶ所確認した布掘りの内、布掘り2には南北の長さ632.4cm、東西の幅約35cm、厚さ約25~30cmの上面をほぼ平坦に加工した部材 (ヒノキ属) が、Ⅲ期の池底の下で埋め込まれた状態で検出された。上面に計3ヶ所穿たれたホゾ穴の位置で、部材の上面を覆っているⅢ期の池底の細かい土丹を多く含む固く締まった土層が直径約30cmの範囲が円形に抜けていた。部材はⅢ期池底の30cm下で土丹を敷き詰め造られたⅠ期の池底の上に据えられ、Ⅰ期の池底に堆積した土層中に埋まり込んでいることから、Ⅰ期 (創建時) に据えられてⅣ期 (延慶年間) まで用いた可能性がある。

中央のホゾ穴の平面形は東西10cm、南北9cmの四角形で深さは14cmである。ホゾ穴を中心に半径24cm

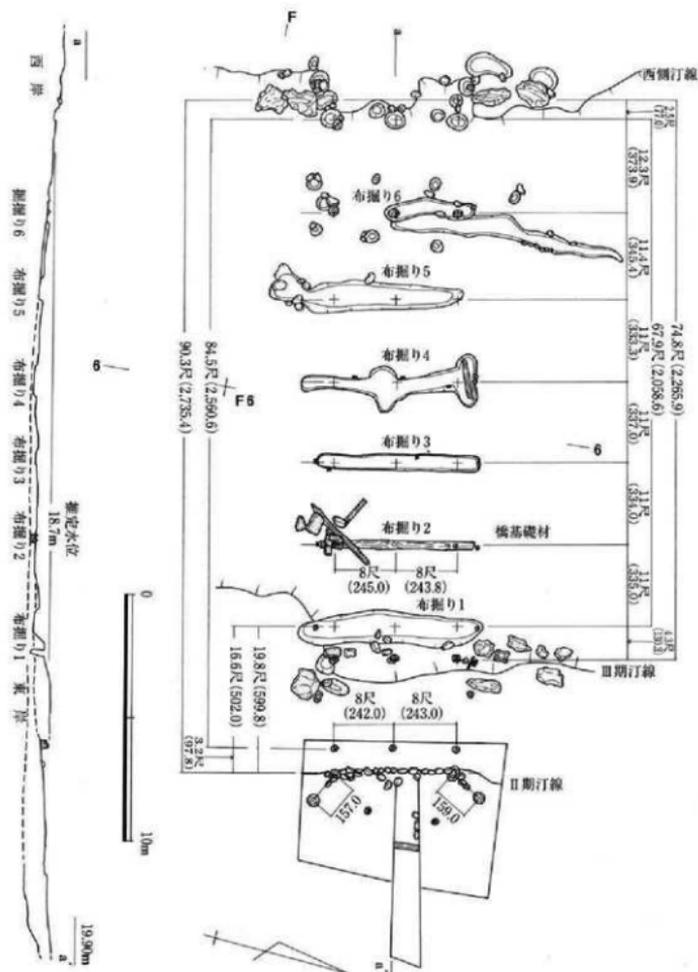


図26 橋平面図・エレベーション図

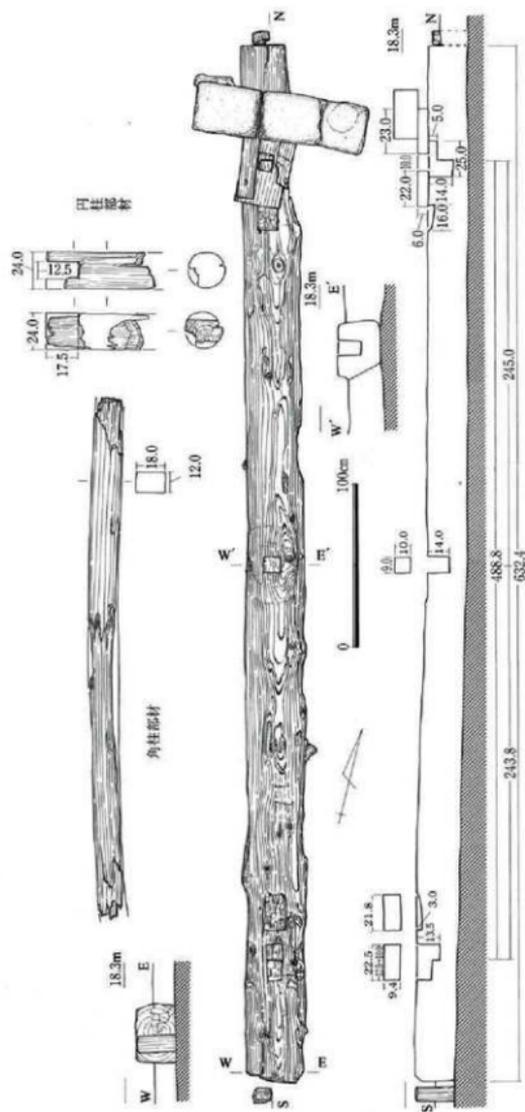


図27 橋基礎材平面図・断面図・出土部材

の範囲を丁寧に、円形に部材の表面を平らに削り込んである。これはホゾ穴に差し込まれる材の当たりを付けるためのものと考えられる。南北方向に置かれた部材の両端近く、2ヶ所穿たれているホゾ穴の平面形は長方形で、北側のホゾ穴は東西幅9.9cm、南北幅22.5cm、南側のホゾ穴は上に置かれた補修材のために東西幅は不明、南北幅は25cmである。両側のホゾ穴の中は1段段差を付けて段状に穿たれている。中央のホゾ穴は、二階堂の木製基壇中央の東柱を基準に設定した東西の中軸線上に位置する。このホゾ穴の中心から北側のホゾ穴の中心まで8尺(243.8cm)、南側のホゾ穴の中心まで8尺(245.0cm)とはほぼ左右対称形的位置に加工されている。ホゾ穴の脇、部材の側面や表面には鉄釘が打ち込まれた状態で数多く遺存していた。

3ヶ所のホゾ穴間の距離を尺に置き換えると、それぞれ8尺ずつ、両端間の距離は16尺(488.8cm)となる。

この部材の南北両端を押さえるように10×8cmの角杭(北側の杭一ヒノキ属)が2本打ち込まれている。また残りの布掘り1・3・4の両端に遺存する角杭も布掘り2の角杭と同様に、角杭間に置かれていた部材の位置出しをしたり、両端を押さえる目的で打ち込まれたものと考えられる。布掘り1～4の中では布掘り2以外には部材が遺存していないが、両端に打ち込まれ遺存する角杭からおよその

位置が推定できるものと考えられる。各布掘りの北側に打たれている角杭を基準に計測してみると、布掘り1と布掘り2の間は335.0cm、布掘り2と布掘り3の間は334.0cm、布掘り3と布掘り4の間は337.0cmであった。(布掘り2は角杭ではなく遺存する部材のホゾ穴の中央から計測したもの。)

池底が緩やかに上がり布掘り1から130.3cm東側、ちょうど水際の位置で8尺×2間幅の部材に穿たれているホゾ穴と同じ間隔の、2穴の掘立柱柱穴(直径約30cm、深さ約40cm)と、一辺約27cmの角を面取りした角材(ヒノキ属)を埋め込んだ掘立柱を検出した。これら2穴の掘立柱柱穴と、遺存する角材は正確に布掘り2のホゾ穴の延長線上に位置することから水際、橋の取付き部になるものと考えられる。両端の柱根・柱穴の脇には東に向かってハの字の位置に袖高欄を立てる掘立柱柱穴を検出した。

ほとんど壊されてしまっているが、この取付き部に並ぶ柱穴に沿ってに長さ70、幅40cm程度の鎌倉石の切石が並べられていたようである。橋の幅を超えないことから、Ⅳ期の橋の取付き部の基礎となる狭間石と考えられる。また橋の両脇の水際には橋引き石が据えられている。

布掘り2の上面の南側、ホゾ穴の付近でⅢ期池底に横たわる直径約24cm、遺存する長さ約67cmで上端部に幅12.5cm、長さ17.5cmの上端部に切れ込みの入った円柱部材(ヒノキ属)と、遺存する長さ約330.0cm、長さ18cm、幅12cmの断面長方形の全体に緩やかに湾曲する部材(ヒノキ属)が出土している。またこの周辺の池中からも全体の形はほとんど失われている、面取りした柱・釘穴のある部材残欠等が出土している。この部材残欠の中に、長さ約36cm、幅6cm、厚さ2.5cmの板材とおぼしき焼けた部材残欠の表面に僅かだが朱色が残るものが遺存していた。このことからおそらく主要な堂舎、橋は朱色に塗られていた可能性も考えられる。

二階堂の中軸線上の布掘り2に遺存する部材の上面に穿たれた中央のホゾ穴が正確に線上にのること。この中軸線に対し遺存する部材が直交して交わること。3ヶ所穿たれたホゾ穴が正確に8尺×2間であること。布掘り1～6に遺存する角杭はほぼ11尺間隔で均等に並ぶことから、これらの部材や遺構は二階堂正面の苑池に架けられていた橋の、橋脚を立てる為の基礎材及び抜き取り跡であると考えられる。

切れ込みの入った円柱と、緩やかに湾曲する橋の1間の長さとはほぼ同じ角材はⅣ期に架けられていた橋の橋脚と梁などの構造材であると考えられる。

Ⅳ期の橋の規模は、対岸までの長さ74.6尺(2,260.4cm)、橋の幅は16尺(488.8cm)である。

・Ⅲ期の橋

基本的にⅣ期で検出した橋の遺構と規模は同じである。布掘り1～4に遺存する基礎材及び角杭は同一のものを使用している。布掘り2に遺存する基礎材の表面だけ、水中に露出させた状態で使用されていたと思われる。

基礎材の南端を覆っていた土砂と橋部材を取り除き、基礎材を露出させると南側のホゾ穴の上のせられた材は、側面を面取りした角柱を割って転用した長さ約60cm、幅約30cm、厚さ5cmの板材である。この板材のほぼ中央に10cm四方のホゾ穴が穿たれている。ホゾ穴の位置は基礎材に穿たれているホゾ穴の中心とほぼ同じ位置である。基礎材のホゾ穴の位置の上に正確に置かれていること、この板材は一辺が30cmの面取り角柱を転用して用いられていることから、橋の掛け替えを行った際の修理の痕跡と考えられる。橋の規模は長さ74.6尺(2,260.4cm)、幅16尺(488.8cm)と考える。

・Ⅱ期の橋

二階堂中軸線上、東側陸部Ⅲ期の橋の取り付き部から東に466.7cmの地点、遺構面より20cm下で、南北方向に直線に延びる直径30cm程の安山岩質の玉石列と、この石列から西に95.0cm離れた地点(取付き部から東に371.7cm)で石列と平行して埋め込まれている3本の直径27cmの柱根を検出した。検出した

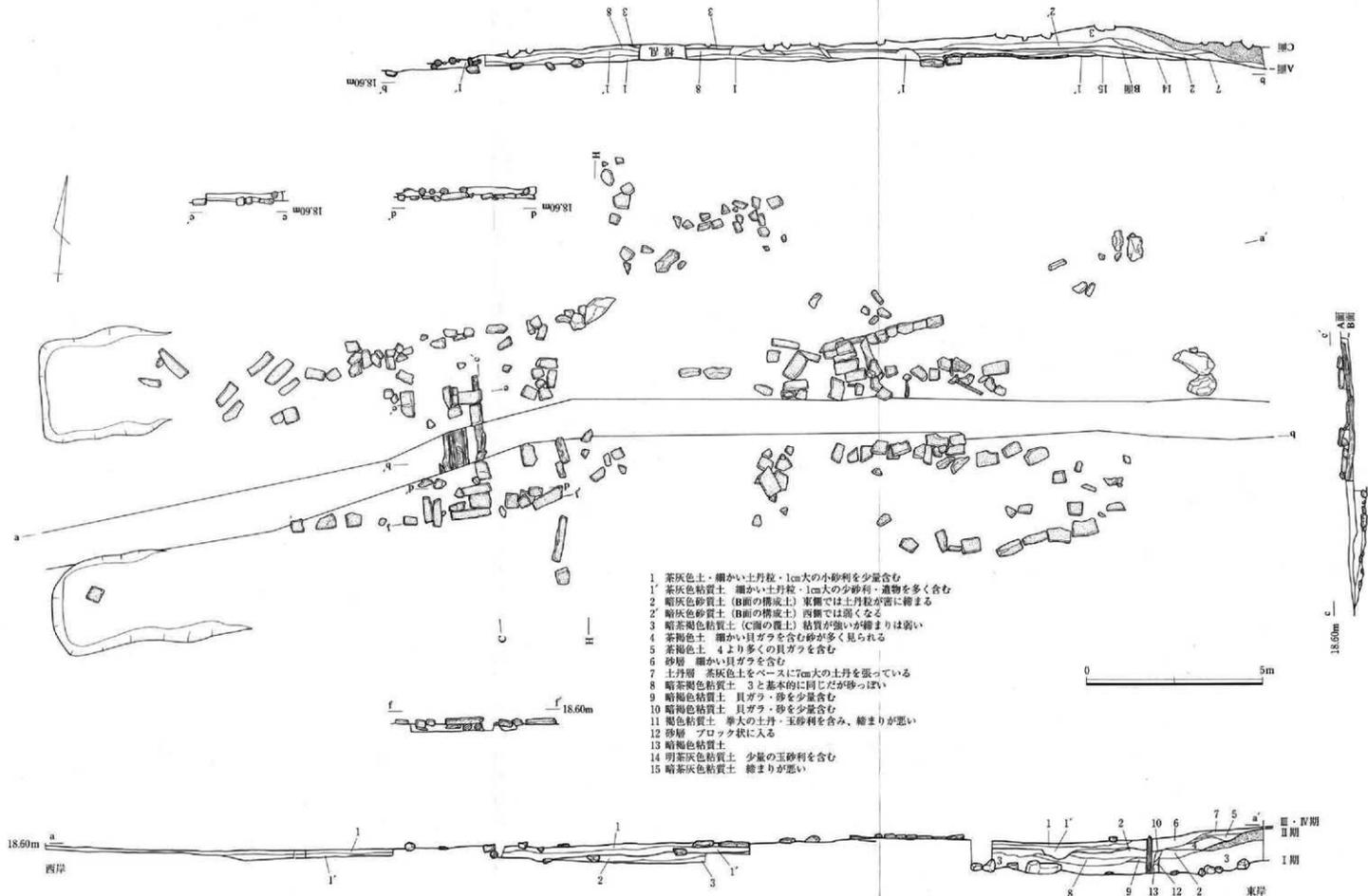


図28 阿波陀堂前橋 平面図・断面図

玉石列と柱根は完全にⅢ期の遺構面を作る土丹層に埋め込まれていた。新たに検出した面は砂利敷きでなく細かい貝を多量に含む貝砂敷きで、石列を境にして西側の池に向かい緩やかに落ち込んで行く。この貝砂敷きの面はⅢ期の砂利敷き面の下にもぐり込み、布掘りの1の屑で再び確認されることからⅢ期より古いⅡ期の汀線になるものと考えられる。

この検出した貝砂敷きの面はⅠ期の池中の堆積土の上に土丹を埋め込んで造られている。玉石列と3本の柱根はⅡ期の時期に伴う橋の取付き部と橋脚になるものと考えられる。二階堂の中軸線が遺存する3本の橋脚の内、中央の橋脚の中心を通り、左右の橋脚もそれぞれ中央の橋脚から8尺の位置に据えられ、正確に布掘り2に遺存する基礎材に穿たれたホゾ穴に対応していると思われる。このことからⅡ期の時期には菟池の幅がⅢ期より約5m広く、また橋の規模はⅢ期に比べ15.4尺(466.7cm)長くなり、対岸までの柱間は2間増えておそらく8間、90尺(2,727.1cm)になると推定される。橋の幅は遺存する橋脚で計測すると16尺(485.0cm)でⅢ期と同じと考えられる。直線に並ぶ橋の取付き部の玉石列は両端で東側にハの字状に開き、袖高欄の柱穴が検出されている。

・Ⅰ期の橋

Ⅰ期の橋は、二階堂正面から対岸まで約35mの長さで推定されている。二階堂の中軸線上で、Ⅰ期の橋脚あるいは抜き取り痕等が確認できると考えたが、掘り下げる途中に検出したⅡ期の橋遺構の保護ため、周囲を掘り拡げてⅠ期水際近くの橋遺構を検出・確認することは困難となった。Ⅰ期には二階堂正面の菟池の幅を35mと推定しているが、このⅡ期で検出した菟池の幅と橋の長さがⅢ期・Ⅳ期の菟池の幅と橋の長さより約5mも長くなることや、布掘り2内に遺存する橋の基礎材がⅠ期の池底に据えられていること、菟池の中央部で基礎材を据えた布掘り1~4を検出したことはⅠ期から二階堂正面に橋が掛けられていた可能性を示している。

b. 阿弥陀堂前(図28、図版30・31)

阿弥陀堂正面の池中で、菟池を東西に横断する形で敷き列べられた、14世紀前半~おそらく廃絶期まで使用された鎌倉石製の切石を用いた橋脚の基礎を検出した。

池底に多数の石材が埋没していることが確認された。石材は阿弥陀堂の正面、西岸から東岸に向かってグループ毎に2列を基本に並んで検出された。3ないし4グループほどに分けることが出来そうであるが、かなり石材が散乱した状態で、はっきりとした形で検出したものは中央列だけである。この石列も近世の用水路で攪乱されていた。

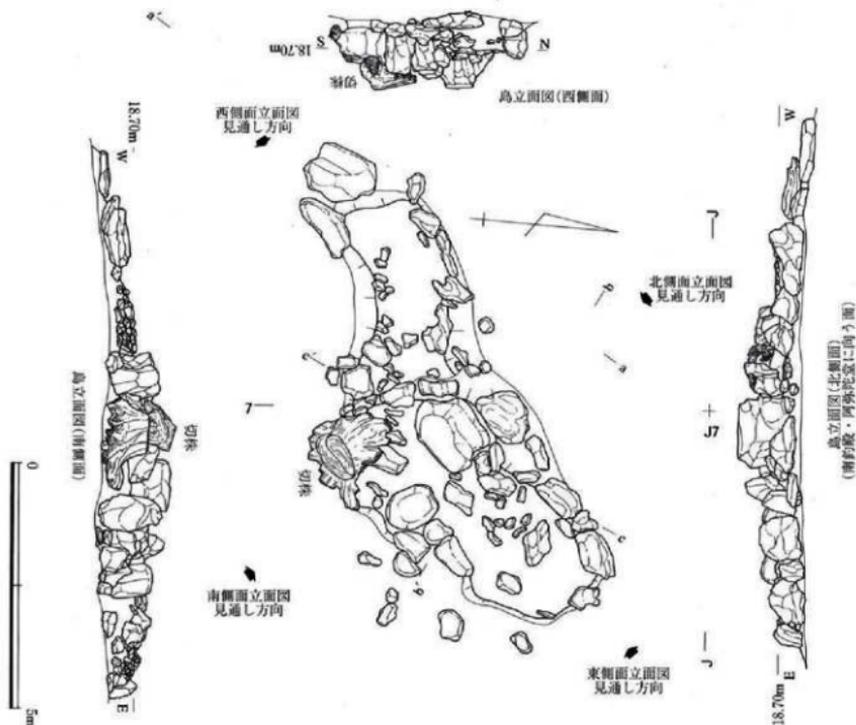
池中で約20mに渡り遺存する壇正積基壇の石材を再利用した幅約3,600mmの石列は、阿弥陀堂の中軸線を東に延ばした延長線上に2列で並んでいる。更に、阿弥陀堂側の水際で検出した東西約12m、南北5m幅の並行する2つの落ち込みも石列と関係していると考えられる。

石列の下には沈下防止のための木材を敷き込んで補強していることから、石列を池中の地盤基礎として、橋脚を立ち上げていたと考えられる。橋脚を掘立柱にて池底に埋め込んだ痕跡がないことから、並べた石列の上に木材を並行に並べてホゾを切り、この上に橋脚を立てたものと思われる。

敷き列べられている石材は鎌倉石(凝灰砂岩)で、正方形ないし長方形に加工された切石で、表面は赤黒く焼けているものが多い。断面T字形の東石(25×25cm)や地覆石(30×25×60cm)、羽目石(30×25×60cm)といった壇正積基壇の石材であり、外面が赤黒く焼けていることから、諸堂が火災で焼け落ちた後の基壇石材を再利用したものと考えられる。

(3) 鳥(石組み)の調査(図29、図版21・22)

菟池の南で大小様々な岩を組み合わせ、荒磯を模したと見られる南北にやや長い三日月型の鳥を検出



島見通し断面図

- | | |
|-----------|---------------------|
| 1 茶褐色土 | 土丹・砂利・炭化物を少量含む |
| 2 茶褐色粘質土 | 土丹ブロックを含む |
| 3 黒褐色粘質土 | 0.5~15cm大の土丹を含む(池底) |
| 4 灰褐色粘質土 | 粘性強くしまる |
| 5 灰褐色粘質土 | ブロック状に宝永スコリアを含む |
| 6 暗灰褐色粘質土 | 細かな土丹・炭化物を含み粘性が強い |
| 7 土丹層 | 3層上面にのる島の基礎層か |



島立面図(東側面)

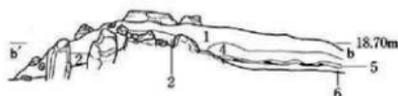


図29 島平面図・立面図・見通し断面図

した。島の大きさは南北約10m、東西幅約5mで、阿弥陀堂など諸堂（表）側から眺めることを意識して弓なりに弧を描くように造られている。諸堂側から見て島の見透かしは借景としている東と南の山の切れ間、瑞泉寺に向かう紅葉ヶ谷になる。島の南東（裏）側にも石を立てていることから、島全体を眺めることも意識していたと考えられる。

島は池底の土丹面下の黒褐色粘質土を盛り上げ、基底部を造り中央の主石を中心に石を寄せ並べ、あるいは立てて築かれている。石と石の間には拳大の土丹を裏込めとして詰め込んでいる。

（4）遺水の調査（図30、図版32・33）

a. I期の遺水・II期の遺水

苑池に突き出す北翼廊の北側で、石を組み合わせた落ち口を検出・確認した。この時期の流路はIII期に流路を変更したときに埋め込まれ、上に貼られたIII期地表面の遺存状況が良好なため、トレンチを設け、流れの方向確認するだけに留めた。流路は堅固な地表面の下に埋め込まれ、北西側に向かって浅く落ち込んでいくのが確認された。このことから、北翼廊の先端から北西方向に延びていくI期・II期の遺水は、III期遺水の流路が中門の脇で廊の下に潜り込む手前の位置で合流する。

b. III期の遺水

S字状に蛇行するごく浅い溝を長さ約30mに渡って検出した。溝は西ヶ谷の流水を苑池まで引き込んだ遺水と思われる。溝は素掘で、幅は広い所で約3m、狭い所で約1.8m、深さは約15～20cm程と浅く、翼廊に近い下流部には所々に1m前後の大きさの景石、庭木（松の根株）が据えられていた。上流部では蛇行する溝の曲がり角の位置に景石を据えていたと思われる浅い窪みが見られることから、遺水の廃絶後に岸边にあった多くの景石は抜き取られたものと推察される。この溝は北翼廊の先端部手前で廊の下に潜り込んで行った。I期（12世紀末）、II期（13世紀中）に北翼廊の北側から苑池にそそぎ込んでいた遺水の流路を、III期に北翼廊の下を通すように流路を変更したものである。

遺水は西ヶ谷の入口部分の水路に端を発するものと思われる。この水路は岩盤を穿った幅約30cm、深さ20cm程の溝である。途中伽藍背後の溝（2・3溝）と分かれるが、分流して遺水が始まると考えられる。遺水の始まる上流付近の溝底の海拔レベルは約19.8m、翼廊の脇から苑池にそそぎ込む落とし口の海拔レベルは約18.7mで、遺水の始まる上流部分との高低差は約1.1mである。この間の直線距離は約35mであることから、遺水はおよそ100分の3勾配で作られたものと考えられる。

c. IV期の遺水

北翼廊先端、釣殿脇で、北西から東南方向の池に向かって延びる長さ約12m、幅約3m、深さ約30～50cmの水路を検出した。この水路はIV期下層の時期に、西ヶ谷からの水を池に流し込んでいた遺水の流路になるものと考えられる。I期からIII期でまで使われた西ヶ谷から引き込んだ流路は埋め立てられ、代わりに北翼廊の北辺雨落ち溝を流路として利用していたと考えられる。遺水の底には粗い砂、水摩した土丹粒が厚く堆積し、かなりの水量があったと思われる。遺水が池に流れ込む位置に、海辺の岩を利用した景石が据えられていた。池中に流れ込む水を景石利用して、二手に分けていたものと考えられる。

（5）滝口の調査（図31、図版34）

I期

この時期にはまだ滝口は作られていない。滝壺の底や落ち込む岩盤面上に、I期のきめの細かな堆積土が厚く堆積していることから、急激な流れと土砂の流れ込みを伴う滝口はまだなかったと考えられる。

II期

寛元・宝治年間に苑池の幅を狭めた時期に併せ、おそらく東側の山裾を北から南に流れる二階堂川から

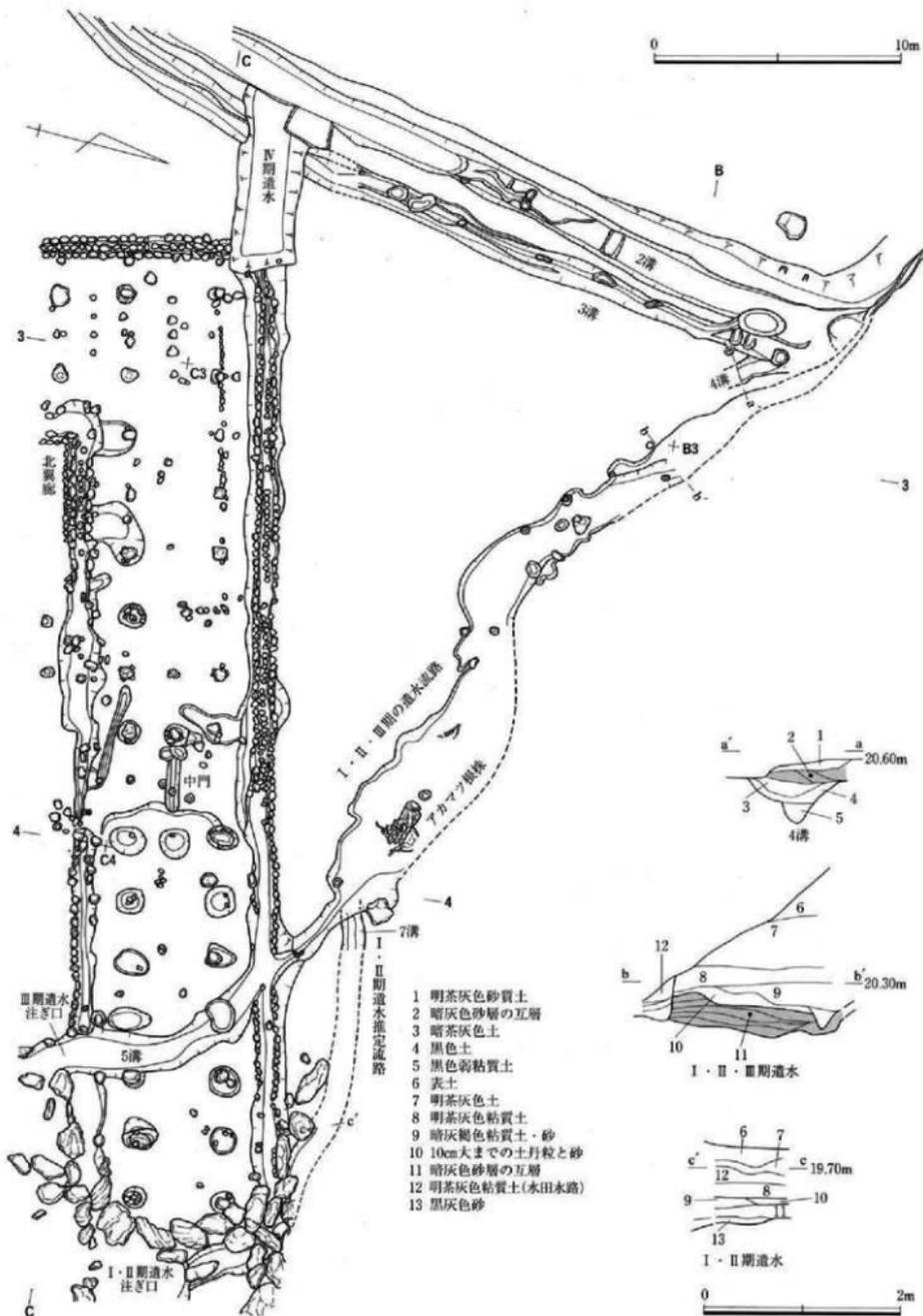


図30 遺水平面図・断面図

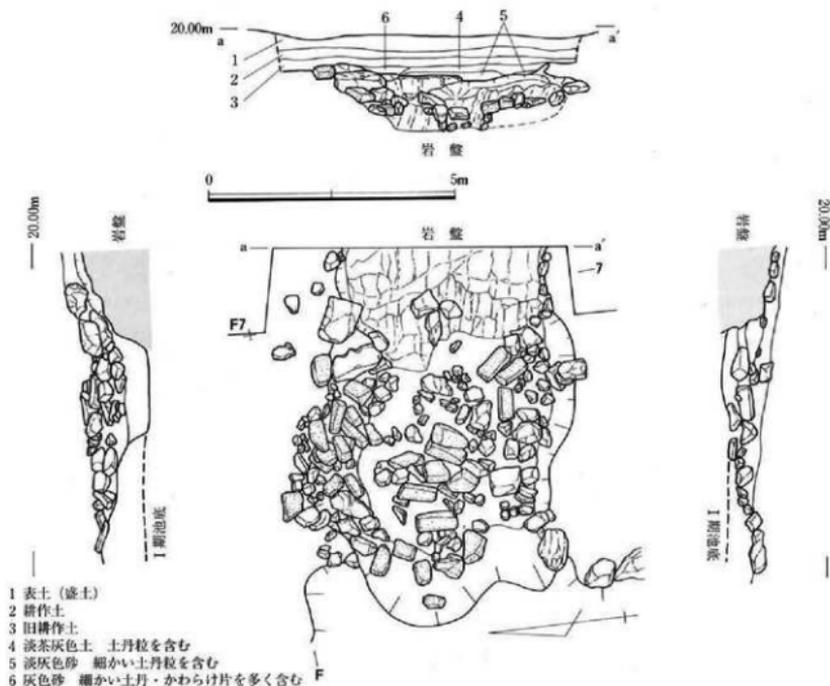


図31 滝口平面図・見通し断面図

水を取り入れた滝口を造ったと考えられる。I期に緩やかに堆積したさめの細かな堆積土とは大きく異なり、激しい水の流れがあったようで、粗い砂粒と水磨した土丹粒が6m四方で深さ約80cmの滝壺の中に多量に堆積していた。滝口の岩盤の表面も水流のために角が丸くなっている。最大で約3mの幅を持つ滝口の注口は、岩盤面の続きが道路の下に延びているため当初の高さは不明である。ただそれほど高いもの（確認している道路際の滝口の標高は19.2m、苑池の推定水面は18.7m）ではない印象を受ける。

III期

II期に作られた滝口の際を土丹塊、鎌倉石の切石などを使い改修している。深さ約80cmの滝壺の底に拳大の土丹を敷き並べている。土丹や鎌倉石は滝口を囲むように配され、流れ込む土砂が池中に入る前に沈殿させていたと考えられる。この時期滝口の注口の幅は約1mである。

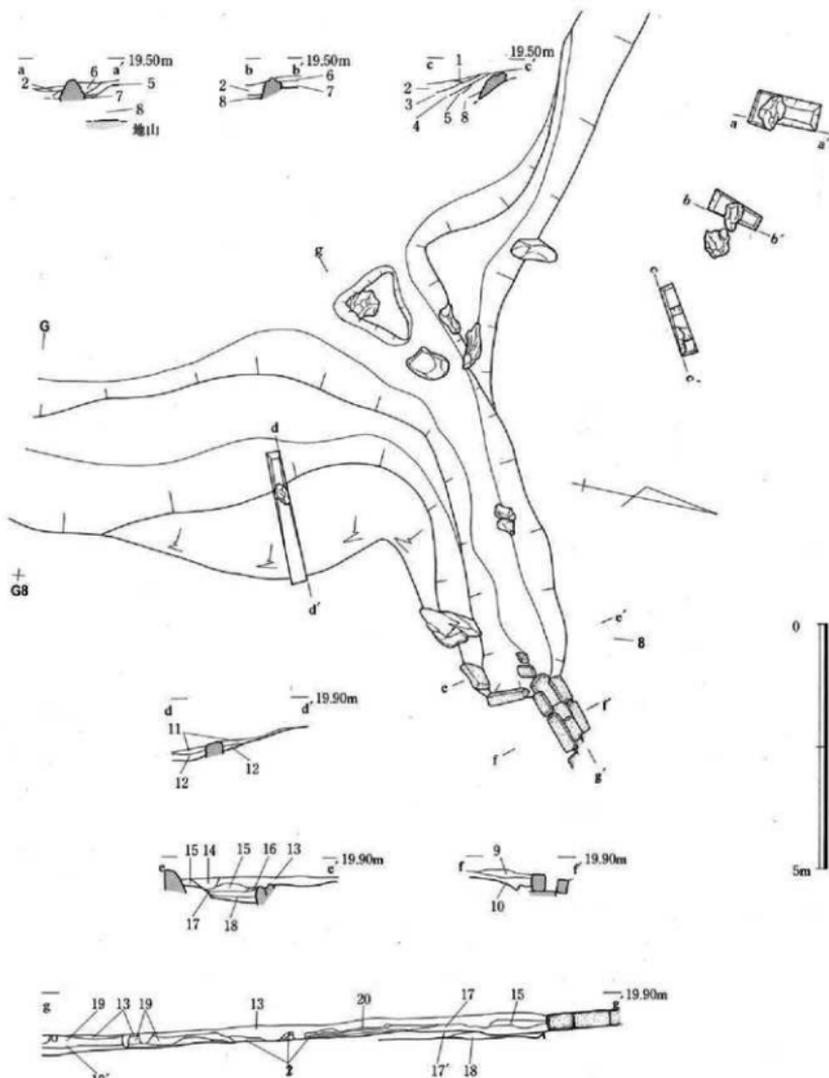
IV期

滝壺は徐々に埋められて浅くなり、最後に焼けて粉々になった瓦片で完全に埋め立てられてしまう。

(6) 取水口の調査 (図32、図版35)

IV期-2面の取水遺構

調査区の北東隅から南西方向の池に向かって延びる、長さ約60cm、幅約30cm、厚さ約45cmの鎌倉石の石材を断面箱形に組み合わせた検出した長さ2m、幅約26cm、深さ30cmの水路と、これに続く土丹で護



- | | | |
|----------------|-----------------------------|---------------------------|
| 1 茶灰色砂質土 | 9 土丹ブロックと粗い砂(締まり良い) | 17 暗茶灰色砂質土(細かい土丹粒・腐食土が混入) |
| 2 土丹地盤 | 10 明茶灰色土 | 18 粗い砂と粗い土丹粒 |
| 3 暗灰色粘質土 | 11 黄茶灰色砂質土 | 19 灰色粘質土(腐食土と少量の土丹粒混入) |
| 4 暗灰色粘質土 | 12 暗褐色粘質土 | 20 粗い砂と土丹粒(暗茶灰色土混入) |
| 5 茶褐色粘質土と土丹の地盤 | 13 茶灰色粘質土 | 21 砂っぽい腐食土 |
| 6 暗茶灰色土 | 14 黄茶灰色砂質土(土丹ブロックを含み締まりが悪い) | |
| 7 茶灰色土(土丹粒多量) | 15 暗茶灰色砂質土(土丹粒が多く混入する) | |
| 8 茶灰色粘質土 | 16 暗茶灰色粘質土 | |

図32 草水口平面図・セクション図

岸した長さ約9m、幅約1.6m、深さ約60cmの水路を検出した。この一連の水路（合計の長さ約11m）が、二階堂川からの水の導水路になるものと考えられる。

鎌倉石を組み合わせた水路の落ち口、土丹で護岸した水路の底には粗い砂、水摩した土丹粒が厚く堆積しかなりの水量があった事がうかがえる。水が池に流れ込む位置には中州があり、景石が据えられていた。池中に流れ込む水流を、景石を利用して二手に分けていたものと考えられる。

Ⅳ期-3面の取水遺構

Ⅳ期-3面で確認した取水遺構の水路の長さは、鎌倉石の石材を組み合わせた断面箱形の検出した長さ2m、幅約26cm、深さ30cmの水路と、土丹で護岸した幅約3m、深さ60cm、長さ約4mの水路の合計約6mと考えられる。これは上層のⅣ期-2面の時期の水路より約5m短いことになる。Ⅳ期-3面では池底の貼り増しと水際の貼り増しが行われ、池の範囲を3～5m狭めたため、逆に水路の長さが延びたものと考えられる。

第3節 堂前の調査

(1) 検出された柱穴等の調査

a. 二階堂前・阿弥陀堂前・薬師堂前の柱穴・布掘り

柱穴・布掘り

二階堂前面の木製基壇東柱列の東辺より東に約6～17m離れた位置で二階堂の中軸線を中心に左右にはほぼ対象的な位置で建物に平行もしくは直行する多数の柱穴列、布掘りを検出した。

二階堂に向かって北側で検出した直径30cm～60cm、深さ約60cmの柱穴列は5mの間に4穴並び、対する向かって南側の位置では幅約70cm、長さ8m、深さ60cmの布掘りの中に礎板を検出した。礎板から布掘りの中に4本の柱を立てていたと思われる。

二階堂前面から約8m離れた位置で、平面十字形の柱穴を中軸線を挟んで2穴検出した。柱穴間は約8m離れている。柱が地中でずれるのを防止する根がための掘り込みと思われる。木材は遺存していなかったが柱穴の底面の形状から、ほぼ水平に置いた横材を十字に組んでいたと思われる。覆土は黒色粘質土の地山の土で、直径5mm程の小砂利を多量に含んでいた。柱穴は二階堂の正面に集中し両側程少なくなる。

検出した二階堂の正面で検出した柱穴（6穴）は、それぞれ正確に二階堂の柱間の延長線上に位置することから、境内で行われたであろう落慶供養等の様々な庭儀に用いられた庭幡などの竿を立てた柱穴と推察した。その他の検出確認した二階堂の正面に位置する柱穴、布掘りも法要や年中行事等の庭儀に使われた遺構の可能性が考えられる。

阿弥陀堂前・薬師堂の前でも堂に平行する布掘り状の遺構がいくつか検出された。規模は小さいが、堂の柱通りの位置で堂の中軸に対しほぼ対称の位置で確認されていることから、二階堂の前面の遺構と同じく幡など庭儀の際に使われた遺構の可能性が考えられる。

b. 二階堂背後の十字形柱穴

二階堂の背後で平面十字形の柱穴を4穴検出した。二階堂正面で2穴検出した柱穴と同じく柱が地中でずれるのを防止する根がための掘り込みと思われる。やはり庭儀の際に堂の後ろ側にも幡等を立てたものと考えられる。

第4節 堂背後の調査

(1) 排水路の調査

昭和62年度、平成元年度、平成4年度、平成6年度調査時に確認している溝である。堂背後、西の山裾を北から南におよそ180m延びる2条の溝を確認した。3溝と2溝に分けられ、それぞれについて概観する。

a. 3溝 (図33・34、図版36)

堂舎背後、西の山裾に沿って北から南に向う流路で、幅約130~150cm、深さ最大約60cm、断面V字ないしU字形の比較的浅い溝である。溝は堆積状況から3時期(上層・中層・下層)に分けることが出来る。下層から器高が低い皿状の手捏ねかわらけと制止糸切りかわらけが出土し、上層から丸底の手捏ねかわらけが出土していることから、3溝は創建時に山際の排水溝として開削され、第Ⅱ期の寛元宝治年間修理の時期に、2溝の開削に伴って埋め戻されたと考えられる。

・沈殿遺構 (図36)

3溝の始まる北端で長径約1.3m、短径約1mの、平面楕円形で、深さ約1.6mの井戸状の遺構を検出した。内部はフラスコ状に広がり、粗い砂、水摩して角の取れた土丹、同じく水摩して角の取れたⅠ期の瓦片が堆積していた。遺構の上部は埋め戻された時に投げ込まれた30~50cm大の土丹塊が多く見られた。内部は流水によって浸食されてフラスコ状に広がり、粗い砂、水摩した土丹、瓦が堆積していること、3溝の始まり部分に位置することから、西ヶ谷の流水中の土砂を取り除くことを目的に掘り込まれ

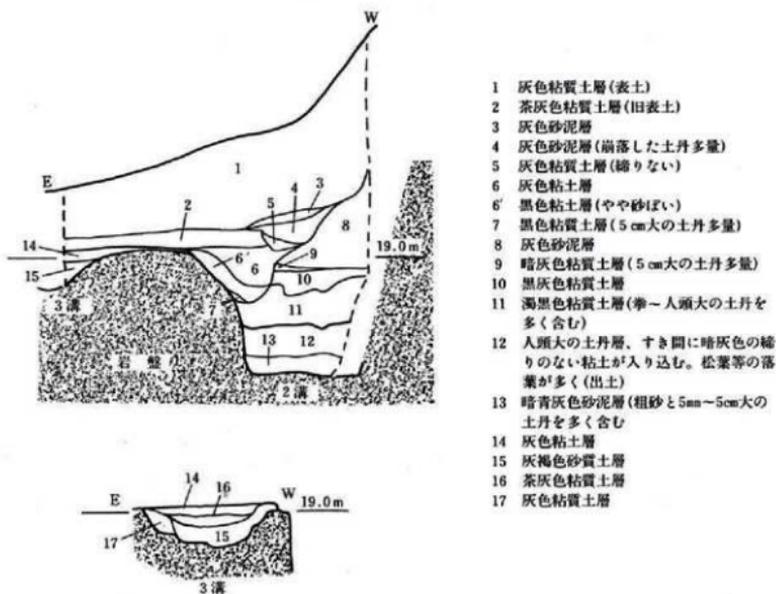


図33 2溝・3溝土層断面模式図

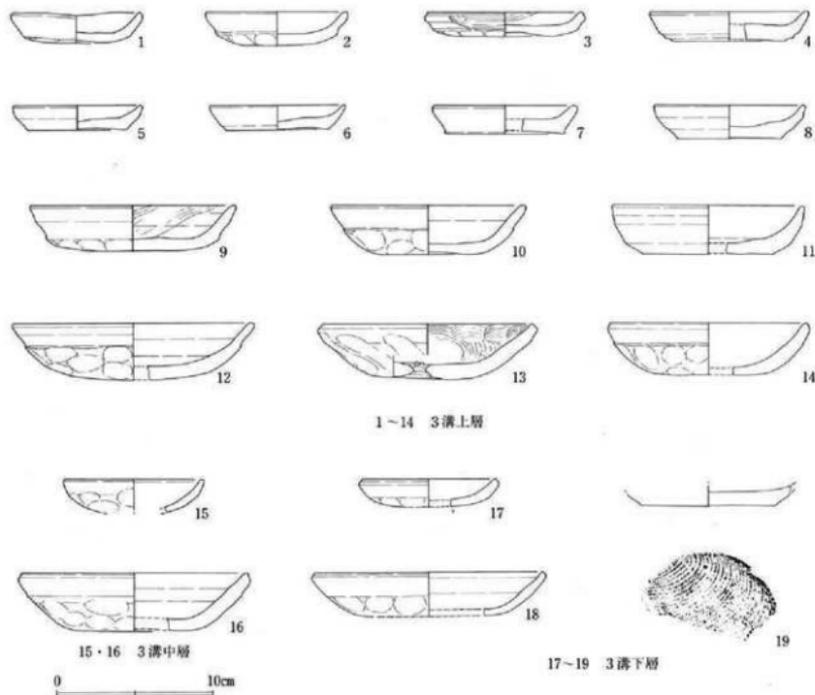


図34 3溝の遺物

た沈殿槽の可能性が考えられる。

・堰 (図36)

3溝と遺水の沈殿遺構の東の脇で、1辺の長さ16cmの断面四角形の柱根と1辺の長さ24cmで面取りのある柱根が検出された。脇にある井戸状の沈殿遺構と組み合わせて水を溜め、遺水に水を流す等水量調整を行った「堰」に関係したものと考えられる。沈殿遺構の西側は2溝の開削時に削平され、堰の柱根等その他の遺構は確認していない。

b. 2溝 (図33・35、図版36)

三堂の背後、山際に堂と並行する幅約150cm、深さ140cmの断面箱形に岩盤を掘り窪めた、幅広で深い堀のような溝である。3溝肩を切りあるいは削平していることから、山際の排水溝として3溝を埋め戻した後に改めて掘り込まれた溝である。

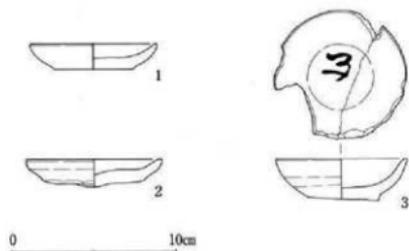


図35 2溝の遺物

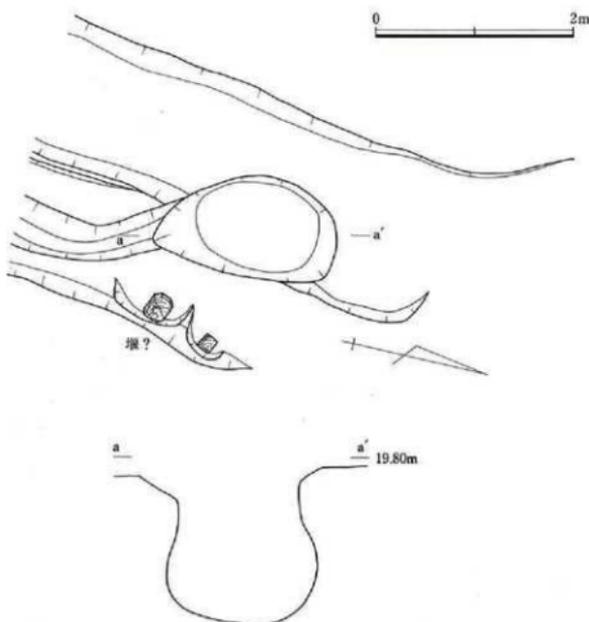


図36 沈殿遺構・平面図・エレベーション図

溝は堆積から3時期（最上層・上層・下層）に分けられ、2時期目に溝底を埋め幅を約20cm広げる改修が行われている。溝底から13世紀後半～14世紀前半、最上層では15世紀代のかわけ、Ⅲ期瓦が含まれることから2溝は13世紀後半に開削され、15世紀代まで使われた後埋め戻されたものと考えられる。

c. その他の溝（図版37）

・ 4 溝（創建期に伴う排水溝）

堰の遺構と考えられる柱根の東側で、黒色粘質土の地山面を断面V字形に掘り込んだ溝を検出した。この溝は北中門北側を経て、北翼廡釣殿を斜めに横切っている。地山面を掘り込み、木屑以外の遺物は確認されていない。また、地山の土である黒色粘質土で埋め戻されていることから、創建期の排水にかかわる溝と推察した。

・ 6 溝（薬師堂から延びる溝）

薬師堂正面から東に約18m、幅60cm、深さ20cmの溝で池まで達している。薬師堂の雨落ち溝につながると考えられる。

・ 8 溝（創建期に伴う排水溝）

北岸の北端を東西方向に地山面を直線的に掘り込んだ、幅約60cm、深さ約80cm、確認した長さ約20mの永福寺創建期に伴うと考えられる8溝を検出した。溝内の覆土は、黒褐色粘質土で若干の木材の削り屑を含んでいる。黒色土を用いて（地山）短期間のうちに埋められたものと思われる。覆土中からアカ

マツの根株が出土。直接的には結びつかないが、北翼廊を斜めに直線的に横切る4溝の形態、覆土、出土遺物が類似していることから、永福寺創建期の土工事に伴う排水のための溝と考えられる。

(2) 通路・目隠し塀の調査

・通路

阿弥陀堂の背後、平坦な岩盤面上で南北に細長い範囲(長さ約13m、幅約3m)の砂利敷き面を検出した。この砂利敷き面は、平坦に削りだした岩盤面上に貝混じりの砂を敷き詰め、この上に砂利を撒き散らし叩き締めたものである。この砂利敷き面は、伽藍に並行して南北に延びる目隠し塀の柱穴を結んだ線より東側(伽藍側)には広がらない。西側は山際に北から南に向かって流れる2・3溝がある。砂利敷き面はこの溝と目隠し塀に挟まれた西ヶ谷に向かって延びる通路と考えられる。通路の幅は2溝と目隠し塀の間隔から約4m程であると考ええる。

・目隠し塀(図版37)

山際の2・3溝に沿って、薬師堂から阿弥陀堂の背後で柱穴列を検出した。柱穴列の長さは約97m程で、柱穴の間隔は2.0~2.1m、直径約30cm、深さ約70cmで岩盤面を穿ち柱を立てていたようである。

伽藍背後の空間を二分するように南北方向に直線で延びて行く柱穴列は、堂背後の目隠し塀と考えられる。目隠し塀の範囲は阿弥陀堂から薬師堂までで、北翼廊・南翼廊の背後までは延びていない。

第4章 山の調査

第1節 西の山の調査(図版38)

堂舎背後(西)の山には、中腹に1ヶ所、山頂付近に1ヶ所の平場がある。平場は主に山の斜面を削平して造成され、厚さ約30cm程の表土があり、表土の下はすぐに岩盤もしくは黒色ないし黒灰色粘質土の地山となる。若干古代の遺物が見られるが、中世に伴う遺物は出土しない。近世の開墾(近年まで、西の山一帯が茅場だった。)によるものかもしれない。

堂舎背後の山頂では、尾根伝いに平場を含め人為的な削平が、阿弥陀堂から二階堂まで行われている。二階堂背後では壁状に、最大約10mの落差のある最大斜度約55度の斜面を造っている。痩せた尾根上には約20~30cm程の表土が覆い、これを剥くと岩盤が露出する。尾根上の岩盤の表面は著しい風化が認められ、長期間に渡って路頭していたと考えられる。現在落葉広葉樹で覆われている山も、堂背後の斜面を中心に、岩盤が路頭した切り岸状の景観だった可能性がある。現在この尾根を北に辿って行くと、西ヶ谷を経て百八やぐらのある天園ハイキングコースに出ることも可能である。

伽藍背後の山の尾根上に、12地点トレンチを設定した。14~18・21・22トレンチは堂背後の尾根線上に、23~27トレンチは、西ヶ谷に延びる尾根線上に設定した。また19・20トレンチは堂背後の斜面上に2ヶ所ある平場を調査したものである。

(1) 伽藍背後(西)の山の調査(図37~40)

a. H8-14トレンチ(二階堂背後斜面)

二階堂背後の東西方向中軸線の延長線上、山頂直下の斜面に設定したトレンチである。30~40cm程の表土と腐植土層を剥くと、明灰色土層と明茶灰色土層の土丹が密に詰まった面と、40cm大の土丹塊が詰まった土丹層がある。一見岩盤のように見えたため、当初は風化した岩盤面としたがトレンチ調査の結果、最下層から暗灰色粘土層の地山面を確認した。段状に削って加工した地山面の上に地業した土層で

あることが確認された。直上の山頂まで約10mの高低差がある。

b. H 8-15トレンチ (二階堂背後尾根上)

二階堂の中軸線上の山頂部に設定したトレンチで、直下には14トレンチがある。25~40cm程の表土を剥ぐとすぐに、岩盤面と西に向かって落ちて行く岩盤面上に乗っている黒色土層(地山)が確認された。岩盤の表面は風化が著しく遺物は出土していない。

c. H 8-16トレンチ

15トレンチの南側の尾根上、二階堂と阿弥陀堂の中間地点に設定したトレンチである。20cm程の表土を剥ぐとすぐに岩盤面が露出する。岩盤面の表面は風化が著しく長期間露頭していた可能性がある。遺物は出土していない。

d. H 8-17トレンチ (阿弥陀堂背後)

阿弥陀堂東西方向の中軸線上の山頂部に設定したトレンチである。30~60cmの表土を剥ぐと、表面の風化著しい岩盤面が露出する。遺物は出土していない。

e. H 8-18トレンチ

調査した伽藍背後(西)の山の南北方向に延びる尾根上で、一番南に設定したトレンチである。20~40cm程の表土を剥ぐと、他のトレンチと同様に風化が著しい岩盤面が露出する。遺物は出土していない。

f. H 8-19トレンチ (阿弥陀堂背後の平場)

阿弥陀堂中軸線上の山頂直下に設定したトレンチである。トレンチの周囲は250m²程の平場である。30~35cm程の表土を剥ぐとトレンチの北側では岩盤面が、南側では黒色土層の地山面が露出する。岩盤面は人為的に削られていると思われるが、風化が著しいため加工痕は確認できない。遺物は出土していない。

g. H 8-20トレンチ (中腹の平場)

伽藍背後(西)の山、テニスコート脇から登る途中の標高約33mの地点の、広さ約300m²の平場に設定したトレンチである。十字に設定したトレンチの南半分は、30cm程の表土を剥ぐと岩盤面が露出する。北半分は黒色土層の地山面になり黒色土層中から、頸部に粘土紐の輪積み痕を残す弥生時代後期の甕、煤が付着した古墳時代前期の甕の破片等が出土するが遺構は確認されていない。

h. H 8-21トレンチ

15トレンチの北側の尾根上、二階堂と薬師堂の中間地点に設定したトレンチである。25cm程の表土を剥ぐとすぐに岩盤面が露出する。岩盤面の表面は風化が著しく長期間露頭していた可能性がある。遺物は出土していない。

i. H 8-22トレンチ (薬師堂背後)

薬師堂背後、東西方向の中軸線上の山頂部に設定したトレンチである。30cm程の表土を剥ぐと、表面の風化著しい岩盤面が露出する。遺物は出土していない。

(2) 西ヶ谷尾根線上の調査 (図41)

j. H 8-23トレンチ (塚)

薬師堂背後の標高約64m22トレンチの北西方向に約40m離れた地点、一段高い地点に設定したトレンチである。標高は約69mあり伽藍背後の南北方向に延びる尾根伝いの中で一番高い地点で、西ヶ谷への入口部を東側に見下ろす位置である。表面に僅かにある表土の下、包含層の茶灰色土層を掘り下げると瀬戸折縁鉢、魚住捏鉢、砥石、かわらけ、永福寺I期瓦片等の遺物が出土した。伽藍背後(西)山の調査ではほとんど遺物が出土していないことと比べ、23トレンチの遺物点数は多い。13世紀代の遺物は確

認められなかったが、出土した遺物の種類・量が他に比べ多いことから、長期間この場所が何らかの形で儀式等に使用されていたと窺われる。

土壙 1

薄皮のような表土を剥ぐと、直径約55cmの土壙1を検出した。土壙の中央にはやや斜めに傾いているものの、直立した状態で埋納されている常滑壺と蓋の代わりに壺の口部分にのせられた鏡、更に伏せた状態で壺と鏡に被せられた山茶碗窯系の捏鉢が出土した。保存状態は良く、蓋代わりの鏡の紐には白色の掛紐が遺存する。但し、この紐に色、模様等が当初施されていたか否かは不明である。常滑の壺の内部にはほとんど土が入っておらず、舶載の中国産の銅銭3枚と、やや扁平なそばん玉形の直径1cm水晶製の数珠玉1個が出土した。

出土遺物から、埋納時期は14世紀中頃と考えられる。

k. H 8-24 トレンチ

23トレンチから北に約30m進んだ地点、尾根依いに設定したトレンチである。尾根の幅は狭く1m幅で設定したトレンチとほぼ同じである。25~30cm程の表土を剥ぐと岩盤面が露出する。遺物は出土しなかった。

l. H 8-25 トレンチ

24トレンチから北に約20m地点、尾根依いに設定したトレンチである。30cm程の表土を剥ぐと、これまでに調査して来た尾根線上のトレンチと同様に岩盤面が露出する。遺物は確認されなかったが、岩盤面上に2枚のかわらけが上向きに重なり置かれた状態で出土した。このかわらけは14世紀前半のものと考えられる。

m. H 8-26 トレンチ

25トレンチから北に約30m地点、尾根依いに設定したトレンチである。ここを境に尾根線は一端急激に下って行き、堀切を検出した27トレンチへと続いて行く。20~30cm程の表土を剥ぐと、他のトレンチと同様にすぐに岩盤面が露出する。遺物は出土しなかった。

n. H 8-27 トレンチ (堀切)

26トレンチから北に約20m地点、急激に落ち込む尾根依いの一帯低い地点に設定したトレンチである。調査前の状況はちょうど尾根を分断するように窪みが確認されていた。ここに幅2m、長さ6mのトレンチを設定した。窪んでいるため厚く60~70cm程堆積している表土を剥ぐと、尾根を分断する形で掘り込んだ堀切遺構を確認した。堀切の岩盤を削り込んだ壁はほぼ垂直に、横断面の形状は箱状で底面は平滑であった。尾根の上から測ると、堀切の幅は約7m、深さは約3mある大きなものであった。

トレンチの西側壁の両端部分で、堀切の底面部分が突出している所が2ヶ所確認された。尾根の軸線にかかることから、この場所に架けられていた橋の基礎の可能性も考えられる。

第2節 東の山の調査 (図42~図49、図版39)

伽藍正面 (東) の山の遺構確認調査

調査地は大きく谷中の平場と、山の尾根上の2ヶ所に分けられる。谷中にかつて宅地だった約800㎡程の平場があり、11ヶ所トレンチ (調査地点) を設定した。現在竹林となっている平場の遺構埋没深度は、現地表から遺構確認面まで谷内の奥で約100cm、手前で約40cmである。

山の尾根筋は馬の背のように幅が狭く、すでに岩盤が路頭している部分も見受けられる。尾根上に2ヶ所設定した調査地点の表土の厚さは約20cm前後と薄く、表土を剥ぐとすぐに岩盤が路頭する状態で、

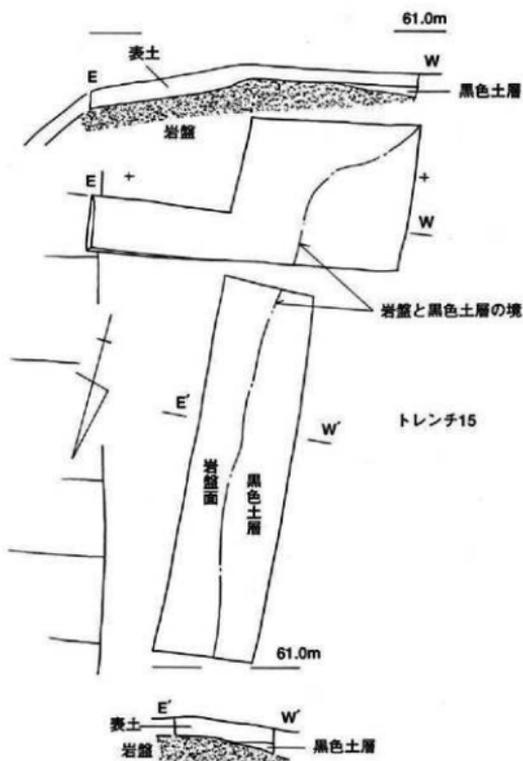
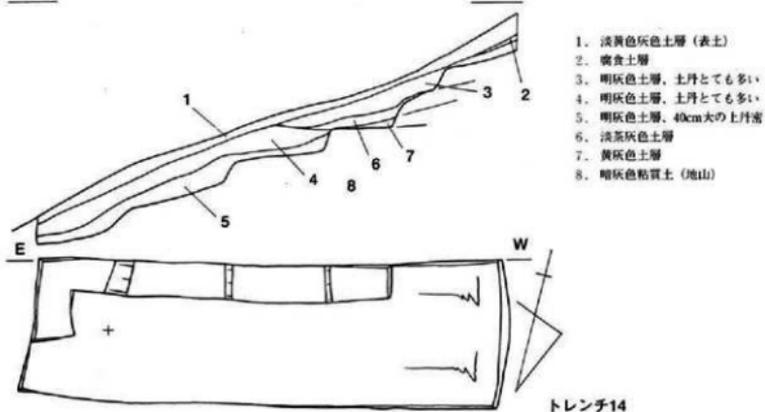


図37 伽藍背後 (トレンチ14・15)

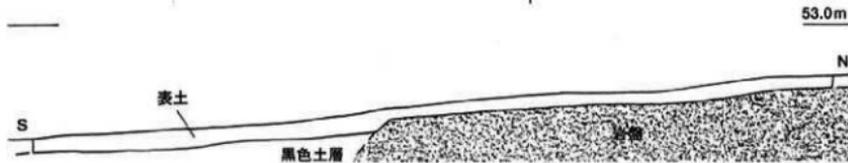
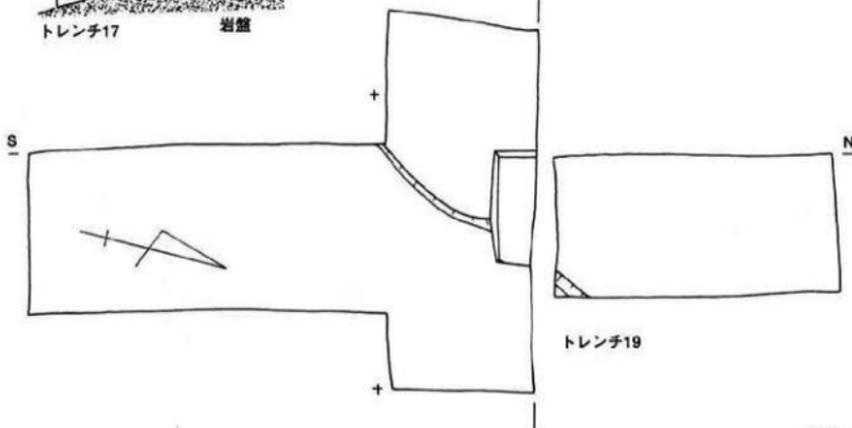
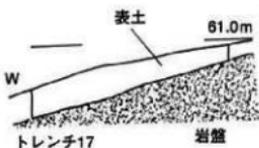
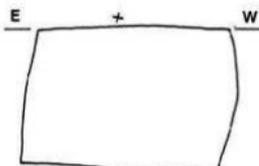
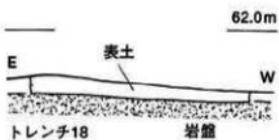
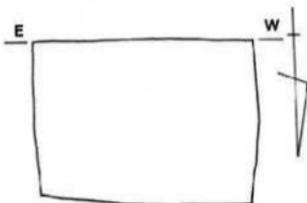
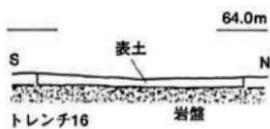
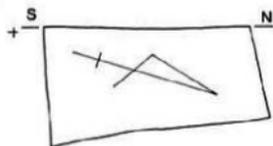


図38 伽藍背後 (トレンチ16・17・18・19)

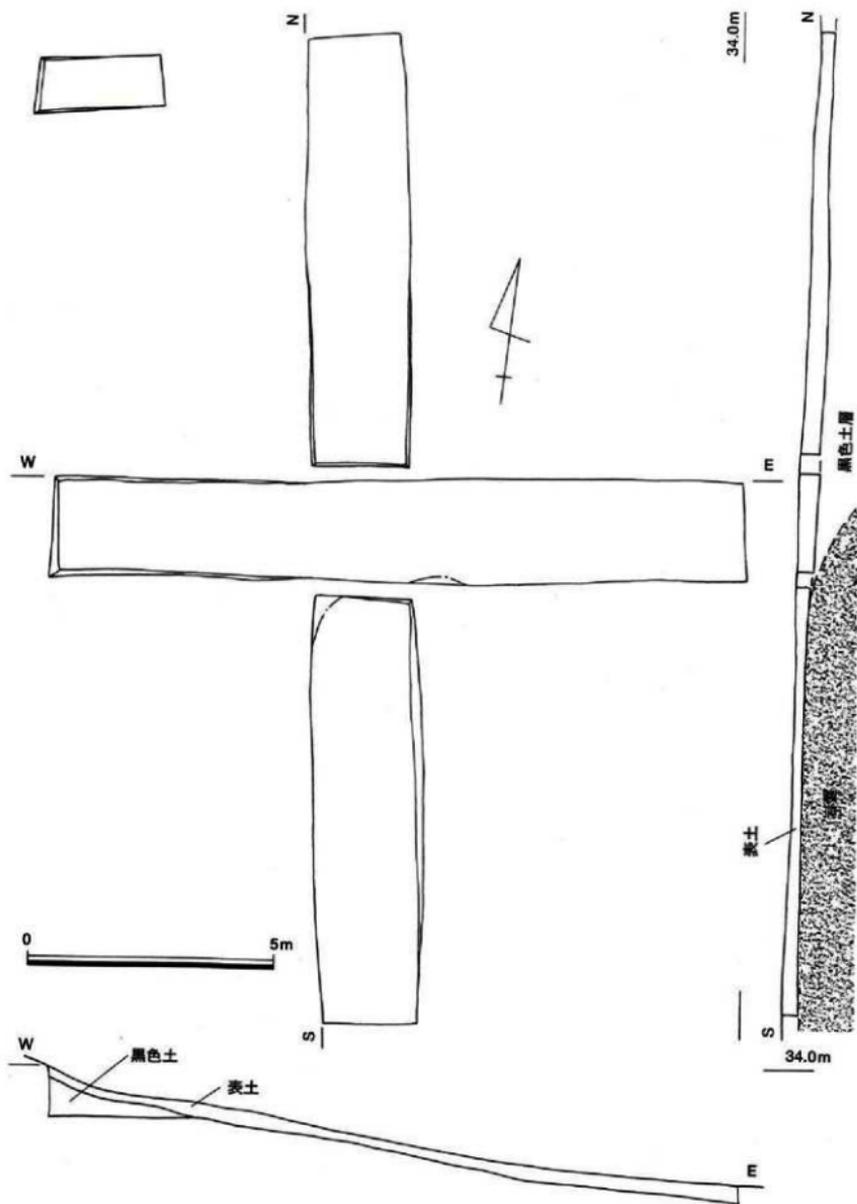
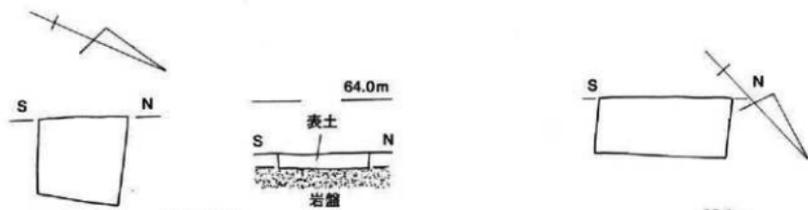
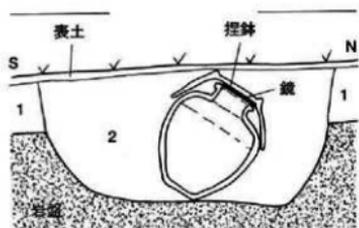
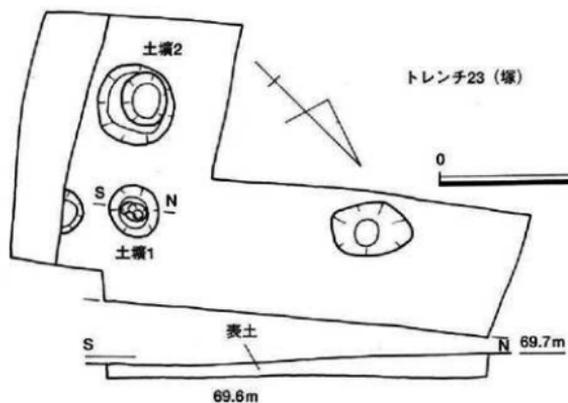
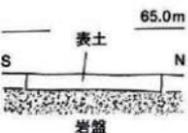


図39 備置背後 (トレンチ20)



トレンチ21



1.茶灰色土層 (包含層) 2.明茶灰色砂泥

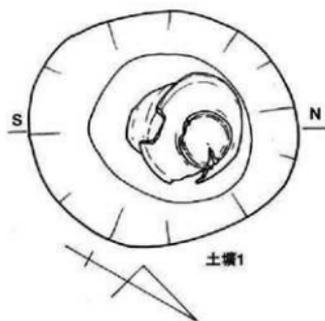


図40 御鏡背後 (トレンチ21・22・23)

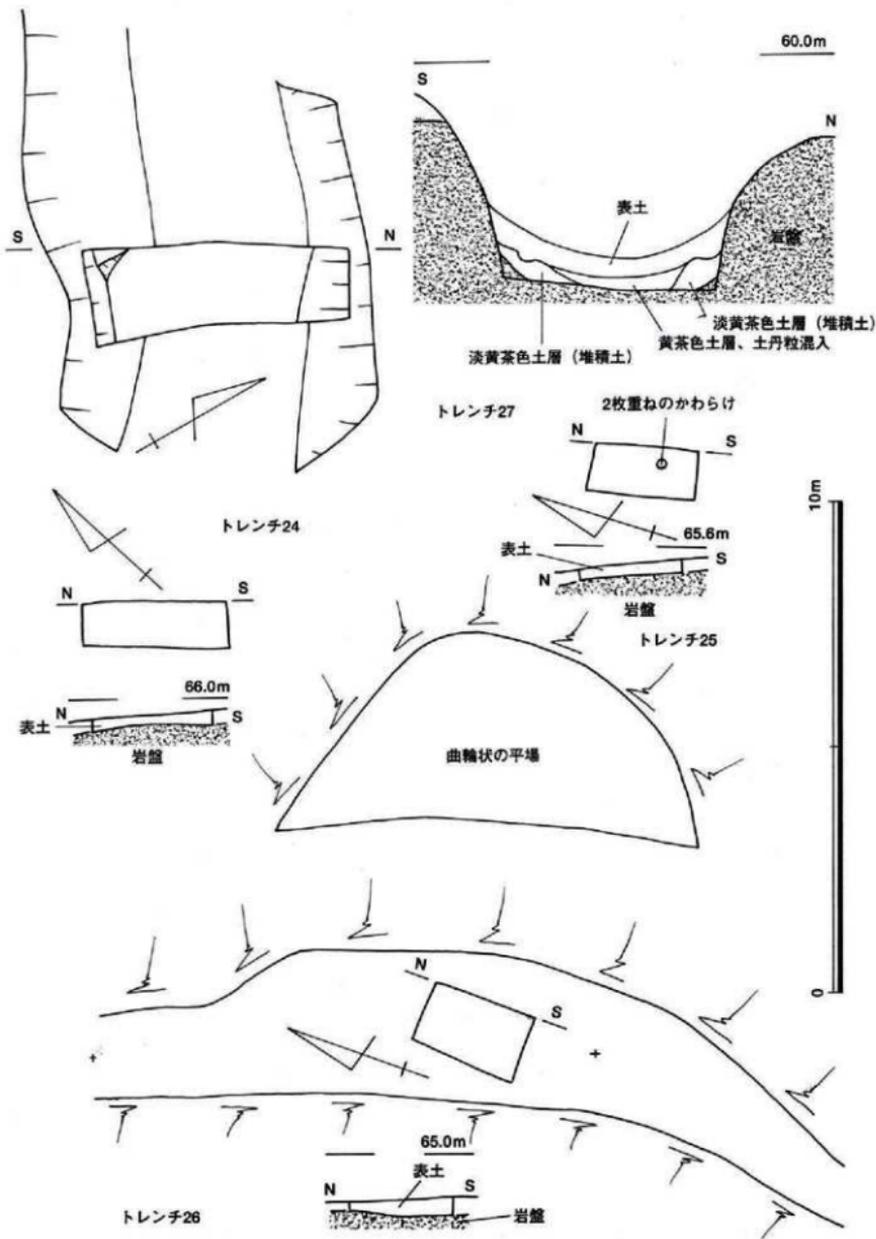


図41 西ヶ谷尾根線 (トレンチ24・25・26・27)

遺構に伴うような土層の堆積は認められなかった。

(1) 谷中の平場の調査(1~11トレンチ)

二階堂から見て正面左手、東の山の中腹、海拔約32m程の所に約800㎡程の平場があり、買収以前は宅地であった。位置的には杉ヶ谷の入口、亀ヶ淵にあたることから、文献中から名前を拾うことができる「亀ヶ淵坊」、もしくはそれに関連した遺構が埋没している可能性のある地点である。平場を中心に、3×4mの基本的なトレンチを7地点、1×3mの補助的なトレンチを4地点設定した。

a. H8-1トレンチ

平場の西手前部分に設定したトレンチである。50cm程の表土と暗茶灰色土層を掘り下げると、ほぼ平坦な1面(標高31.5m)のよく締まった茶灰色粘質土層、第2面の土丹層となる。約2.5m下のトレンチ最深部で岩盤面(標高30~30.6m)を確認した。岩盤は西に向かって傾斜していた。岩盤上で土丹を使い地業を行っている。土層は溝状に落ち込んでいる。

遺物は1面と2面まで掘り下げる途中に、かわらけ、梅瓶、火箸、刀子等が出土している。

b. H8-2トレンチ

平場の一番西端に設定したトレンチである。表土と暗茶灰色土層を50cm程掘り下げると、岩盤面(標高31.8m)となる。岩盤面上で3ヶ所の柱穴と、東西方向に延びる岩盤を掘った幅約60cmの溝と、おそらく箱状になる一辺3m以上の落ち込みを検出した。トレンチの北側では切り立った岩肌が露頭している。溝の中から若干のかわらけが出土している。落ち込みは岩盤を約1.2m掘り込み底面はほぼ平坦である。全体の形、何の遺構かは調査範囲が狭く不明である。

遺物は、高台付きの瀬戸折縁鉢、火舎等が出土している。

c. H8-3トレンチ

1トレンチの東側で約7m離れた位置に設定したトレンチである。表土と暗茶灰色土層を約50cm掘り下げると、茶灰色土層中に土丹が密に含まれた1面(標高32m)が検出された。一部1面を掘り下げ、下の土層を確認した。1面の下約80cmで、ほぼ平坦な岩盤面(標高31.8m)となる。この間、幾重にも厚さ10~20cm程度の地業が行われ、面を造っているが時期差は余り認められない。

d. H8-4トレンチ

3トレンチの北側で約10m離れた位置に設定したトレンチである。表土と暗茶灰色土層を約60cm掘り下げると、茶灰色粘質土層の1面(32.7m)が検出された。この1面の浅い窪みに張り付いた形で完形品を多く含む、かわらけ溜まりを検出した。14世紀前半頃に一括して投棄されたようである。このトレンチでは岩盤面は検出されず、淡黄灰色粘質土層の地山を検出した。

遺物は青磁水滴、梅瓶、手埴り、砥石、滑石製温湯等が出土している。

e. H8-5トレンチ

3トレンチの東側で約8m離れた位置に設定したトレンチである。表土と暗茶灰色土層を約50cm掘り下げると、茶灰色粘質土層の1面(標高32.4m)となる。この下層では、西に向かって緩やかに落ち込む岩盤面(標高32.2~32m)を検出した。

遺物は、褐釉の施された酒会壺の蓋、青磁碗、砥石が出土している。

f. H8-6トレンチ

5トレンチの北側で約10m離れた平場のほぼ中央に設定したトレンチである。表土と暗茶灰色土層を約50cm掘り下げると、茶灰色粘質土層の1面(標高32.8m)を検出した。1面を残しながら一部掘り下げると、最下層は淡黄灰色粘質土層(地山)となる。

図示できる遺物の出土はなかった。

g. H8-7トレンチ

平場の北東隅、一番奥の山際に設定したトレンチである。山際のため、1面(標高32.8m)まで表土と暗茶灰色土層の他に茶灰色土層、暗茶灰色土層が堆積し、1面までの深さは約90cmである。

遺物は若干のかわけと折縁鉢が出土している。

h. H8-8トレンチ

平場の北側、切り立った山際の西隅に設定した1×3mのトレンチである。表土と暗茶灰色土層の下はすぐに岩盤面(標高32.4m)が露出する。岩盤上には幾筋かの東西方向に延びる溝を検出した。遺物は出土していない。

i. H8-9トレンチ

4トレンチの北、山際に設定した1×3mのトレンチである。表土から約60cm掘り下げると岩盤面(標高32.4m)となる。面上には6穴の柱穴と山際を東西方向に走る溝を検出した。岩盤は西に向かって落ち込んで行く。

j. H8-10トレンチ

9トレンチの北側で、約8m離れた地点に設定した1×3mのトレンチである。8・9トレンチと同じく、山際を東西方向に走る溝と多数の柱穴と土壌を検出した。柱穴、土壌ともに、溝に平行して並ぶようである。土壌は調査範囲が狭いため委細は不明だが、大きさ(80×80cm)、規模(溝に沿って4穴を確認)から見て、甕を据えていたようにも見える。

遺物は瀬戸の折縁鉢、常滑の甕の口縁等が出土している。

k. H8-11トレンチ

7トレンチの北側の、切り立った山際に設定した1×3mのトレンチである。トレンチの北壁は、ほぼ垂直に立ち上がる岩盤の壁になることを確認した。岩盤は西に向かって緩やかに下がって行く。表土から1面まで約80cm、岩盤面(標高33m)まで約1~1.5mである。

遺物はかわらけ(15世紀代)、瀬戸の折縁鉢、硯が出土している。

(2) 山の尾根の調査(12、13トレンチ)

永福寺正面(東)の山の尾根上に2地点設定したトレンチである。

a. H8-12トレンチ(図48)

東の山の尾根線上に設定した2×6mのトレンチである。トレンチの位置から直接見ることはできないが、ほぼ薬師堂正面の延長線になる。調査地点を設定する踏査の際に、幅約3m、長さ約4mの範囲で、尾根を分断している落ち込みが確認され、小規模ながら尾根を分断する堀切と思われた。調査の結果、標高63.8mの尾根を幅約3m、深さ1.70mに渡って分断していることが明らかになった。尾根線上の表土は約20cm程度で、場所によっては岩盤が露頭している状況であった。

遺物の出土が確認されなかったため、堀切の造られた年代等は不明である。

b. H8-13トレンチ(図49、図版40・41)

東の山の尾根先端部分に設定した2×12mのトレンチである。トレンチ位置から西の方角を見ると、眼下に二階堂、阿弥陀堂を見ることができる位置であった。トレンチ位置の標高は47.8~47.3mで、二階堂側(約標高19.3m)から見て約22mの高低差がある。尾根線に沿って12mの長さで設定したトレンチの全域で、表土を剥ぎ約20~30cm掘り下げると岩盤面となる。岩盤面上には人為的な盛土等は確認されず、踏査の際の地表観察でも平坦な尾根の先端が南に向かって落ちて行くだけであった。

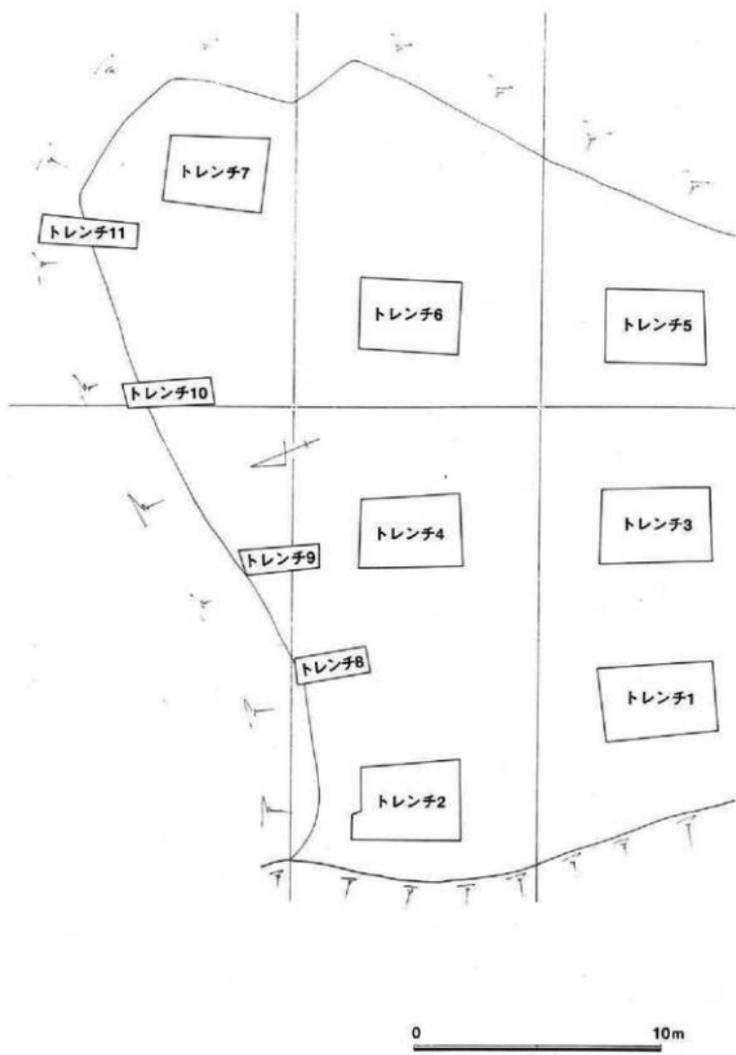
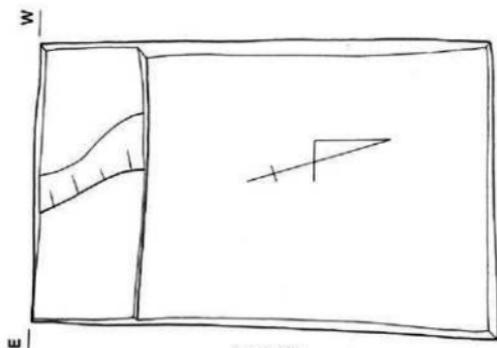
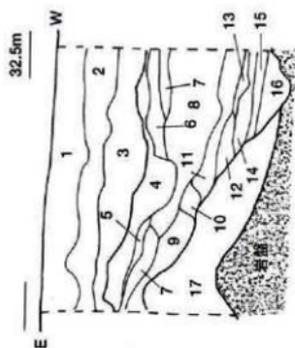
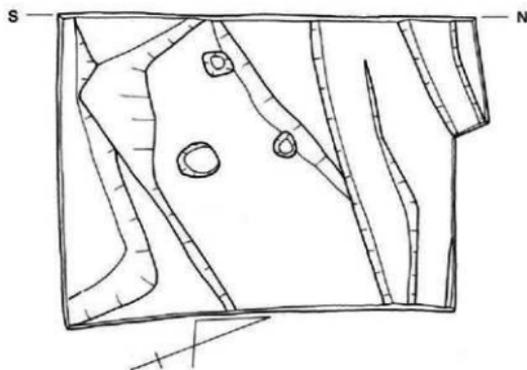


図42 谷中の平場トレンチ位置図

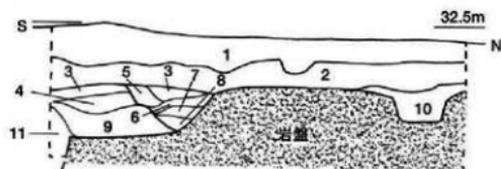


1. 淡茶灰色土層 (表土)
2. 暗茶灰色土層、しまり悪く少量のかわらけ含む
3. 茶灰色粘質土層、しまり良く10cm大の土丹炭化物含む
4. 土丹層、10cm大の土丹密
5. 暗茶灰色粘質土層
6. 茶灰色粘質土
7. 土丹層、20cm大の土丹密

8. 茶灰色粘質土層
9. 暗茶灰色粘質土層
10. 茶灰色粘質土層
11. 暗茶灰色粘質土層
12. 暗茶褐色粘質土層
13. 暗茶灰色粘質土層
14. 暗茶褐色土層
15. 茶灰色粘質土層
16. 土丹層
17. 土丹層



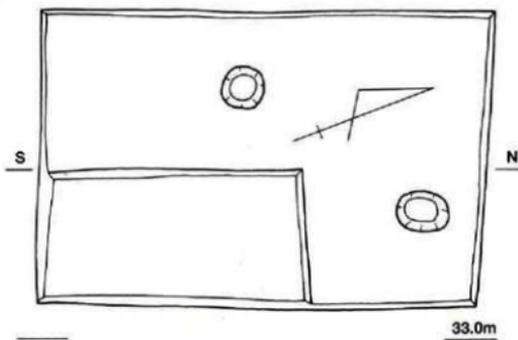
1. 淡茶灰色土層 (表土)
2. 暗茶灰色土層、土丹粒炭含む
3. 茶灰色土層、しまり良い
4. 茶灰色土層、炭、かわらけ片含む
5. 茶灰色土層、5cm大の土丹を多く含む
6. 茶灰色土層、3cm大の土丹物
7. 明茶灰色土層
8. 淡茶灰色土層、土丹密に含む
9. 土丹層、人頭大の土丹が密
10. 茶灰色土層、土丹、炭、かわらけ含む
11. 茶灰色土層、卵～人頭大の土丹多く含む



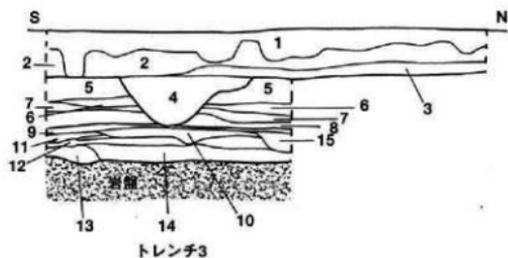
トレンチ2



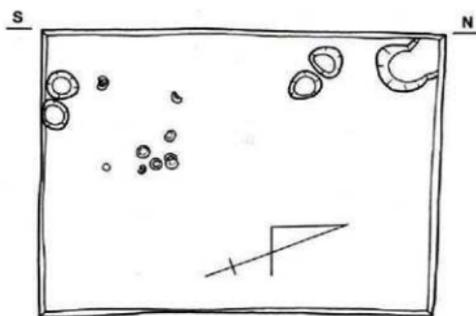
図43 谷中の平場 (トレンチ1・2)



1. 淡茶灰色土層 (表土)
2. 暗茶灰色土層
3. 明茶灰色粘質土層、しまり良い
4. 淡茶灰色土層、土丹、かわらけ片、炭含む
5. 茶灰色土層、土丹密でしまり良い、1面
6. 明茶色粘質土層
7. 明茶灰色粘質土層
8. 茶灰色粘質土層
9. 黄茶灰色粘質土層、2面
10. 暗褐色粘質土、細かい土丹粒炭含む
11. 土丹層、地盤層
12. 暗褐色粘質土
13. 暗茶灰色粘質土、土丹密に含む
14. 暗褐色粘質土、拳大の土丹多く含む
15. 暗茶灰色粘質土、しまり良い



トレンチ3



1. 淡茶灰色土層 (表土)
2. 暗茶灰色土層
3. 茶灰色粘質土層、1面
4. 茶灰色粘質土層
5. 灰色粘質土
6. 暗褐色粘質土、2面
7. 土丹層
8. 淡黄灰色粘質土層 (地山)

トレンチ4

33.4m

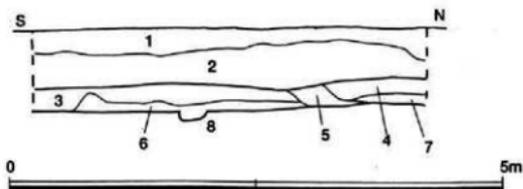
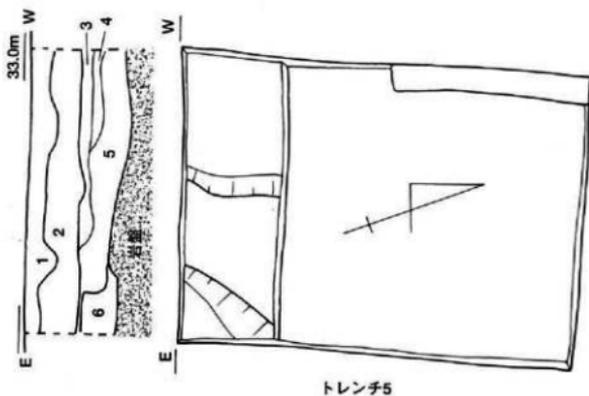
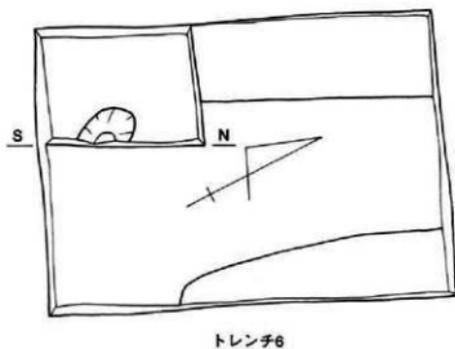


図44 谷中の平場 (トレンチ3・4)



1. 淡茶灰色土層 (表土)
2. 暗茶灰色土層
3. 茶灰色粘質土層
4. 茶褐色粘質土層
5. 茶灰色粘質土層
6. 淡茶褐色粘質土層



1. 淡茶灰色土層 (表土)
2. 暗茶灰色土層
3. 茶灰色粘質土層
4. 淡茶灰色粘質土層
5. 茶灰色粘質土層
6. 淡黄灰色粘質土層
7. 淡黄灰色粘質土層、土丹多く含む
8. 黒茶色粘質土層、土丹粒を含む
9. 茶灰色土層
10. 淡黄灰色粘質土 (地山)

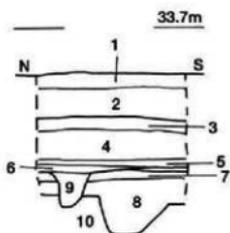
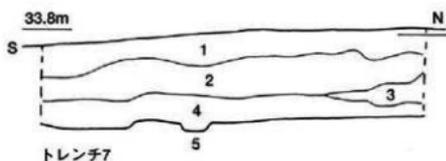
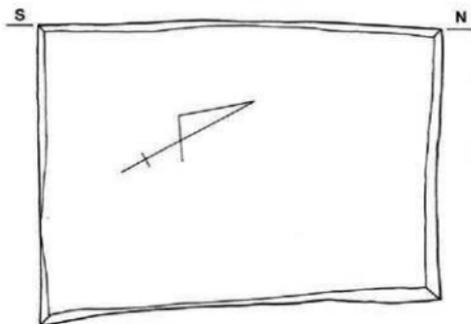
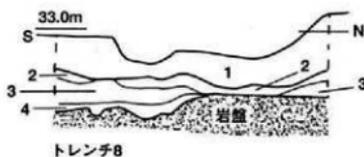
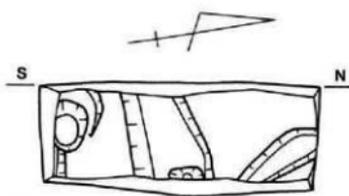


図45 谷中の平場 (トレンチ5・6)



1. 淡茶灰色土層 (表土)
2. 暗茶灰色土層
3. 茶灰色土層
4. 暗茶灰色土層
5. 茶灰色粘質土層
6. 淡黄灰色粘質土層 (地山)



1. 淡茶灰色土層 (表土)
2. 暗茶灰色土層
3. 茶灰色土層
4. 茶灰色粘質土層



図46 谷中の平場 (トレンチ7・8)

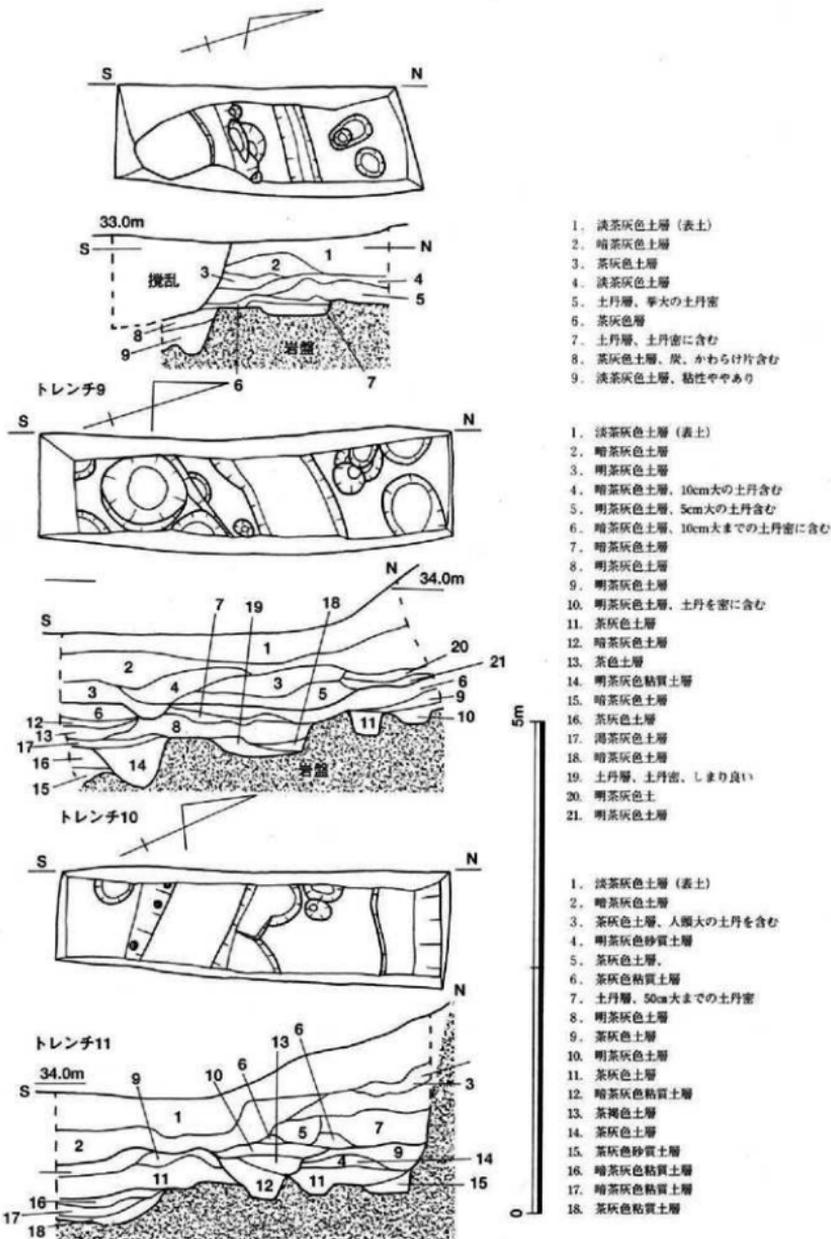


図47 谷中の平場 (トレンチ 9・10・11)

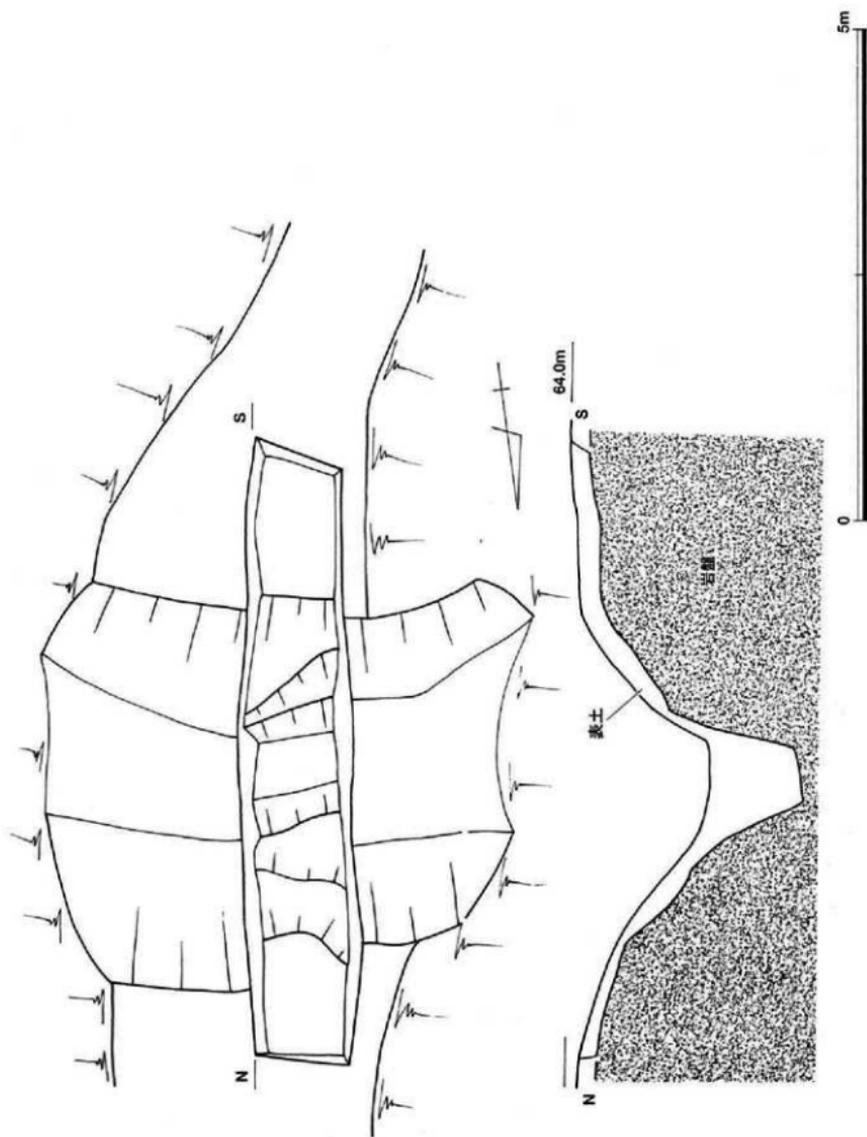


図48 東の山の尾根 (トレンチ12)

・経塚の検出 (図50)

岩盤面が露出したトレンチの北端から約8mの地点で、壁際に半分かかった直径約120cmの円形の土壙を検出した。トレンチの壁がちょうど土壙の軸線にかかっていたので、セクション観察のため壁を垂直に残しながら掘り下げを開始した。約80cm掘り下げた時点で炭が多量に埋められ、土壙中央に甕の破片が露出していることを確認した。掘り下げ途中で、崩れ落ちた土丹層の隙間から、長さ25cm、幅15cm、重さ約3kgの安山岩玉石と残存長28.0cm (刃渡り22.6cm)、身幅3.3cm、表面に柄と鞘の木質が遺存する腰刀 (図52-1) が出土している。経塚の可能性が考えられたため、いったん掘り下げ作業を中断し、トレンチの東側を土壙の大きさに合わせ、幅1m、長さ2mの範囲で拡張し、土壙全体の平面形の確認を優先した。細心の注意を払い範囲を拡張した結果、土壙は岩盤面から直接掘り込まれ、上部に盛土及び石など上部施設を思わせるものは確認できなかった。あるいは、土壙が穿たれている岩盤を覆っている表土が20~30cmと薄いため、上部施設は削平されている可能性も考えられる。

・湿美の甕 (外容器) と捏鉢 (蓋) の出土状況

土層断面の観察結果、土壙中の土層は攪乱を受けていないことを確認した。1層目の土層は、淡茶灰色の締まったきめ細かい土の中に拳大の土丹を多く含み、土壙に蓋をするように約30cmの厚さがあった。その下2層目の土層は、一辺の大きさが40cm大の土丹層で明茶灰色の土が土丹の間を埋め、50~70cmの厚さで堆積していた。土層断面観察と土層断面図等を仕上げた後、1・2層を掘り下げ土壙内に多量に充填されている炭の上面で精査を行ったところ、土壙北隅の炭面上から全長32.8cm (刃渡り25.6cm)、身幅3.7cm、表面に柄と鞘 (呑口) の木質が遺存する腰刀 (図52-2)、土壙の中央部で外容器として使用された (土圧のために甕の上半部が崩れ落ちた状態) 湿美の甕 (口径35.4cm、底径14.2cm、器高47.8cm、胴部最大径51.4cm) と、蓋として使用された湿美の捏鉢 (口径33.5cm、底径13.2cm、器高11.9cm) を検出した。土壙と甕の下半分の間には炭が充填されていた。湿美の捏鉢を取り上げると甕の内部に横向きに置かれている、銅製の経筒 (内容容器) の一部を確認した。甕の上半部と2層目の荒い土丹層との間には、20cm程の空洞が残されていた。捏鉢は甕の蓋として上向きに、甕の口部分を塞ぐため置かれたものである。先に出土している安山岩の玉石は、蓋の重しとして捏鉢に入れられ、甕の口のにせてあったものと考えられる。

・甕 (外容器) 内部の調査

経筒 (内容容器) の出土状況

甕の出土状況を記録した後、土圧のため崩れ落ちた捏鉢と甕の上半部の破片を取り上げたところ、甕の中央部で横向きに据えられた銅製の経筒 (内容容器) を検出した。形態は円筒形の身に宝珠の付いた蓋が被せられていた。経筒の法量は、全長31.0cm、筒の底部直径23.8cm、蓋の直径24.6cm蓋に付けられた宝珠は、高さ6.8cm、直径5.6cmである。経筒は当初から横向きに宝珠を西に向けて甕の底部に据えられ、経筒と甕底部の間には黒灰色粘土の堆積が約6cmあった。経筒の下に副納品が埋納されていたことから考えて、黒灰色の粘土は副納品を納めた後、横向きに埋納する経筒を固定するために隙間に詰められたと推察される。

甕の中に横向きに納められていた経筒の表面を観察すると、3cm四方位の大きさで繊維状の固まりが付着していた。繊維は真綿状に絡み合っているもので、あるいは経筒を納めた時に包んでいた布のようなものの残片が遺存した可能性がある。また経筒の直径は24cmあり、外容器の口の大きさは26cmである。経筒を甕の内部に納めるには、立てた状態で布に包み真っ直ぐに降ろさなければ中に入れることはできず、中に入れてから横向きに据えたと考えられる。表面に付着していた繊維状の固まりは、この時に経

筒を包み込んでいた布の可能性もある。

経筒下(副納品)の調査

経筒を取り上げた後、甕の底部に堆積している黒灰色粘土層の表面に残された経筒の圧痕を記録し、黒灰色粘土層を掘り下げた所、経筒の真下から白磁蓋付の口径10.4cm、高さ6.4cmの小壺と、中に納められた表面黒色で背の形が瓜型の幅約8cmの木製の櫛10枚が出土した。小壺はちょうど経筒の真下であり、外容器の甕が崩れ落ちた時に押し潰されるように、底部を上に向けた出土状況であった。櫛は10枚まとめて背の部分を下に小壺の中に納められていた。出土状況を記録した後、押しつぶされ割れている白磁小壺を取り上げ櫛を露出させた。白磁の破片を取り上げると、半分にして伏せた蜜柑の房の様に固まっている櫛の北東側から、水晶数珠の親玉と扇骨が出土した。数珠の親玉は傷のない無色透明な直径約2cm程もある大きなもので、紐を通すためにT字状に直径2mm程の穴があげられている。房のつけ根部分に、材質は銀と思われる冠と丸鑽が付けられている。数珠の親玉、扇骨の出土状況を記録した後、甕底部の黒褐色粘土層を掘り下げ、この黒褐色粘土を篩ったところ、木製の直径6~7mmの数珠玉が30顆、水晶製の直径5~7mmの数珠玉が33顆、数珠の房飾りで、銀製の金具の付く水晶製の長さ1cm、幅6mmの露と呼ばれる涙滴形の玉が2顆出土した。経筒の下で出土した数珠の親玉、木製・水晶製の数珠玉・露は一連のもので、組み合わせると金剛子念珠(半装束念珠)と呼ばれる数珠になる。

扇骨は先端の幅の一番広い所が4.4cm、残存長約14cm、7枚ほど重なった状態で出土したものである。各1枚の厚みは1mmと極薄いものだが、表面は茶褐色の漆塗りである。また蒔絵とおぼしき金粉と、扇骨の先端部に極小さな笹の葉とおぼしき絵柄が認められた。

経塚の調査で出土した主な遺物は、腰刀、外容器の甕と捏鉢、内容器の銅製経筒、副納品の白磁小壺、櫛、扇、数珠、粒状の金、青白磁皿であるが、この内、青白磁皿以外は全て、完全な形で埋納したと考えられる出土状態であった。埋納されてから土中で、有機質の扇や櫛は腐植、陶器などは土圧による破損等が起こったと考えられるが、破損して出土した甕、捏鉢、白磁小壺も、接合すると全ての部品が揃っていた。ただ1点破片で出土したのが青白磁皿で、口縁部分の破片は細かく3片に割れていたが全て接合できたが他の破片は出土しなかった。経塚の検出状況、土層の確認調査から攪乱されたことは考えにくく、青白磁皿の破片の表面を観察すると、擦れた痕跡がなく新物の可能性があり、埋納時にその場で割って破片として埋めたとも考えられる。

甕の底部の黒灰色粘土中の遺物を取り上げた後、甕の下半部の出土状況を記録し、甕の全てを取り上げた。甕の周囲に充填されていた炭層を取り除くと、土壌の底部はやや丸みを帯びたU字状に窪んでいた。炭層中から遺物の出土は確認されなかった。

・経塚出土の遺物

外容器

渥美甕(図51-2)

岩盤に穿たれた直径約120cm、深さ約120cmの穴の中に据えられ、経筒の外容器として使用された渥美の甕で、周囲は炭で充填されていた。上からの土圧により、押し潰された状態で検出されたものである。甕の上半部は押されて崩れ落ち、下半部は上から押された力で、縦に裂けるように全体に亀裂が入っていた。

甕外面の色調は淡明灰色で、渥美の製品に見られる刷毛塗りの灰軸は施されていない。胎土は渥美特有の、細かくざっくりした砂っぽい素地である。焼成温度が比較的低く、生焼けの様にも見えるほど軟質の製品である。破片を全て取り上げ復元すると、器高47.8cm、口径35.4cm、底径14.2cm、胴部最大径

51.4cmの甕である。器壁の厚さ1～1.2cmの比較的薄い粘土紐の輪積みで、胴部内側で幅約3cm程の粘土紐の重なりが観察できる。断面を観察すると、甕の体部（底部から頸部まで）は5工程、口縁部は2工程に分けて底部から造られたことがわかる。

体部外面には、荒い刷毛目が観察され、粘土輪積みの継ぎ目を潰すために、最初に施された調整痕と見られる。体部外面の各工程ごとの調整は、体部下半（第2・3工程）では極軽い平行叩きの叩き目が、不規則に継ぎ目に沿って施され、肩部（第4工程）では、原体の幅約4cm（長さ不明）の、目の細かい縦長格子文の叩き目が、継ぎ目に沿って帯状に連続して施されている。体部最大径より上、頸部までの間に、匳書きによる草書体の文字のようにも見える記号（よし・にし）が1ヶ所施されている。体部内面の各継ぎ目は、丁寧な下から上方向のナデ調整が行われている。

頸部（第5工程）は、口縁部を上のにせるような形で、頸部が立ち上がり、内面に回り込むように粘土紐が貼り付けられている。頸部は短く、口端部との隙間は約3cm程である。頸部の外面には、口縁部を造り出した時の、折曲げ痕が規則的に見られる。口縁部の端面上部には、軽い横ナデによる凹みが一周する。端部はやや突き出すものの丸く取められている。

焼きがやや甘い以外、大きさの割に器壁が薄く、各内外面の調整から見ても、非常に丁寧に造られた製品といえる。

渥美捏鉢（図51-1）

外容器の甕の蓋として使われたものである。口径33.5cm、器高11.9cm、底径13.2cmの渥美捏鉢である。底部の高台は貼り付けの三角高台で、糸尻にはもみから痕が見られる。捏鉢外面の色調は淡明茶灰色で、胎土は渥美特有の、細かくざっくりした砂っぽい素地である。焼成温度が比較的低く、生焼けの様にも見えるほど軟質の製品である。胎土と焼成具合から見て、同じ工房で甕と同時に制作され、同じ窯で焼かれたと考えられる。底部の厚さは1.8cm程で、ここから立ち上がる体部はラッパ状に直線的に広がる。口縁部は尖り気味に丸く取められ、口縁外面に横ナデによる軽い凹みが一周する。口縁には90度の位置関係（計4ヶ所）で、1ヶ所に注ぎ口が、3ヶ所に指当てによって凹まされた輪花が造りだされていた。体部外面下半部の調整は、叩いた後、指ナデで丁寧に叩き目をナデ消している。常滑の捏鉢で見られる様な、削りによる調整は行われていない。体部上半部と内面の調整は主として、丁寧な横ナデによるものである。揺ったり、擦った様な使用痕は認められず、新物と考えられる。焼きがやや甘い以外は、非常に丁寧に造られた製品である。

内容器

銅製経筒（図52-3）

渥美甕の中に納められていた、全長31.0cm、筒の底部直径23.8cm、蓋の直径24.6cmの銅製の経筒である。底板の一部が腐食して、穴があいていた他は遺存状態は良好である。表面には全体に渡り、黒っぽい附着物が認められた。ごく一部分をクリーニングすると、表面は白銅色をしていることが確認された。蓋には高さ6.8cm、直径5.6cmの宝珠が2ヶ所の嵌止めで付けられていた。経筒本体に使われている銅板の厚みは約2.5～3mmである。底には厚さ約1mmの底板がはめ込まれていた。表面には銘文等は確認されなかった。経筒の内部から、泥と直径約1.5mm、残存長5cm程の経を巻いていた軸木と考えられる、縦に半分に割れる、竹ひご状の製品が3本出土していることから、教典が納められていたと考えられる。しかし腐食した底部の穴からしみ込んだ水のために、腐敗、泥化したものである。

副納品

腰刀（図52-1・2）

1は経塚を埋めていた土丹層中より出土。残存長28.0cm(刃渡り22.6cm)、身幅3.3cm。表面に柄と鞘の木質が遺存。錆で覆われているが、遺存状態は良好である。

2は経塚内の炭層上より出土。全長32.8cm(刃渡り25.6cm)、身幅3.7cm、表面に柄と鞘(呑入れ)の木質が遺存。錆で覆われているが、遺存状態は良好である。

白磁小壺(図53-2)

蓋の直径10.4cm、高さ1.6cm、口径8.1cm、身の口径9cm、器高6.4cm、底径5.1cm、体部最大径10.3cmの景德鎮12世紀後半代の白磁蓋付小壺である。体部内面に粘土の縦き目が、観察できるところから型作りと思われる。蓋と身の外面には、透明な釉が施されている。また鑄状の文様が見られ、頸部周囲には、珠文帯がめぐる。

櫛(図53-3~12)

表面黒色で、背の形が瓜型の、長さ約8.5cm、幅3.7cm、背の部分の厚さ1cmの木製の櫛である。漆がかけられていたようには見えず、白木の製品と考えられる。木材の同定を行っていないため、樹種は不明である。櫛目は1mmの間に、櫛歯が3枚と非常に細かい。10枚が背を下に向け、小壺の中に納められていたようで、小壺が転げ底部を上にして割れたため、半分にして伏せた蜜柑の房の様に、背を上に向け10枚がひとかたまりで出土した。

数珠(念珠)(図53-1・2・3・4)

1・2は数珠の房飾りで、露と呼ばれる。涙形の水晶製で長さ1cm、幅6mmの玉は2顆出土している。この露を包み込む形で、二枚合わせの金具がそれぞれに取り付く。(図53-2の片方の金具は腐食して遺存していない。)材質は親玉の冠の金具と同様に銀と思われる。

3は経塚の第2層の土丹層を掘り下げている時に出土したものである。材質は陶器のようで、直径9mm、中央には径3mmの穴が穿たれている。胎土は黄灰色で、とても軟質である。表面に白色不透明の釉が、施されていることが観察できる。

4は数珠の親玉である。傷のない透明な水晶製で、幅2cm、高さ1.9cmの大きさである。T字状に直径2mm程の穴が穿たれている。つけ根部分に、材質が銀と思われる冠と直径8mmの丸鎖の金具が付けられている。

この他に、水晶製と木製の数珠玉が出土している。水晶製の数珠玉は、33顆出土している。直径5~7mmの大きさで、数珠本体だけでなく小粒のものの中には、房に使われていたものがあるかもしれない。木製の数珠玉は、30顆出土している。直径6~7mmの大きさで、いわゆる算盤玉と呼ばれる扁平な形のものである。

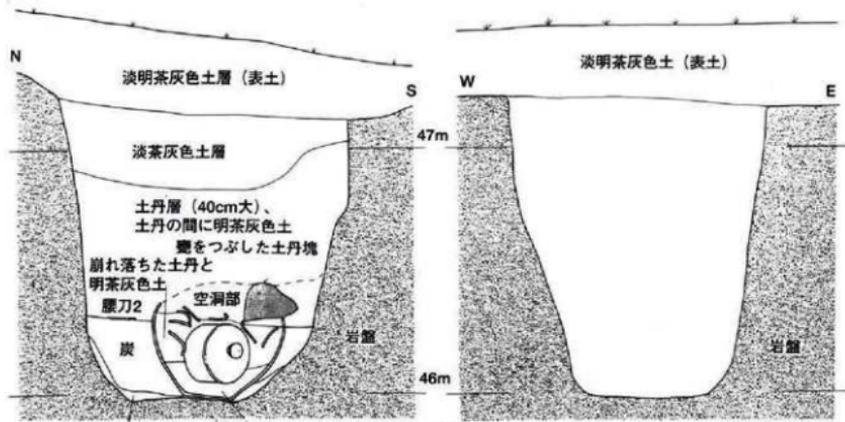
経筒の下で出土した数珠の親玉、木製・水晶製の数珠玉、露を組み合わせると、金剛子念珠(半装束念珠)と呼ばれる数珠になる。

扇(図54)

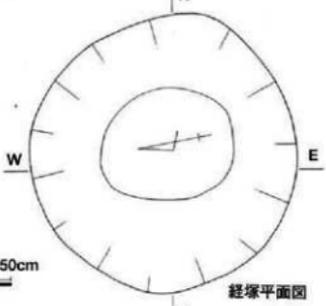
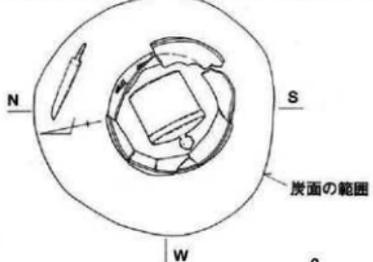
皆影骨みなかげほねと呼ばれる扇の扇骨で、先端の幅の一番広い所が4.4cm、残存長約14cm、7枚重なった状態で出土したものである。各1枚の厚みは1mmと極薄いものだが表面は茶褐色の漆塗り、裏面は白木である。表面に蒔絵とおぼしき金粉と、親骨の先端部に極小さな笹の葉とおぼしき絵柄が認められた。この形状の扇骨は蒔絵手箱等に描かれる扇散文にその形を見ることができる。復元長28cm。

その他の遺物(図53-1)

残りの土を篩ったところ、青白磁皿の小片と、直径2mm程の金の粒が1点出土した。青白磁皿の小片は3片に割れていたが接合できた。



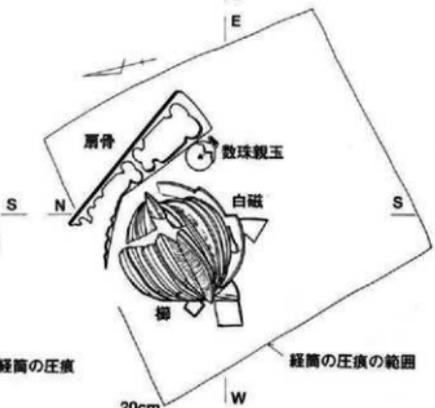
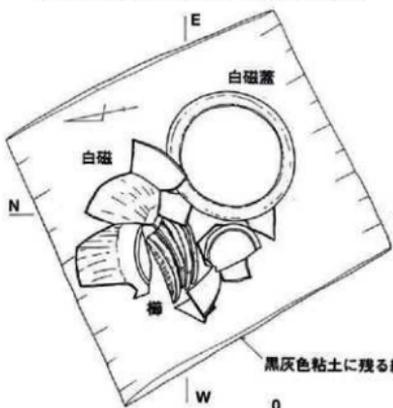
明茶灰色粘質土層 E 黒灰色粘土 (白磁・埴・扇が出土) 東西方向断面図



経塚内遺物 (簾刀・瀧美埴・経筒) 出土状況

経塚平面図

0 50cm



黒灰色粘土に残る経筒の圧痕

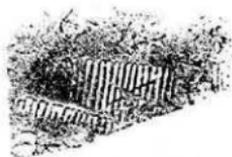
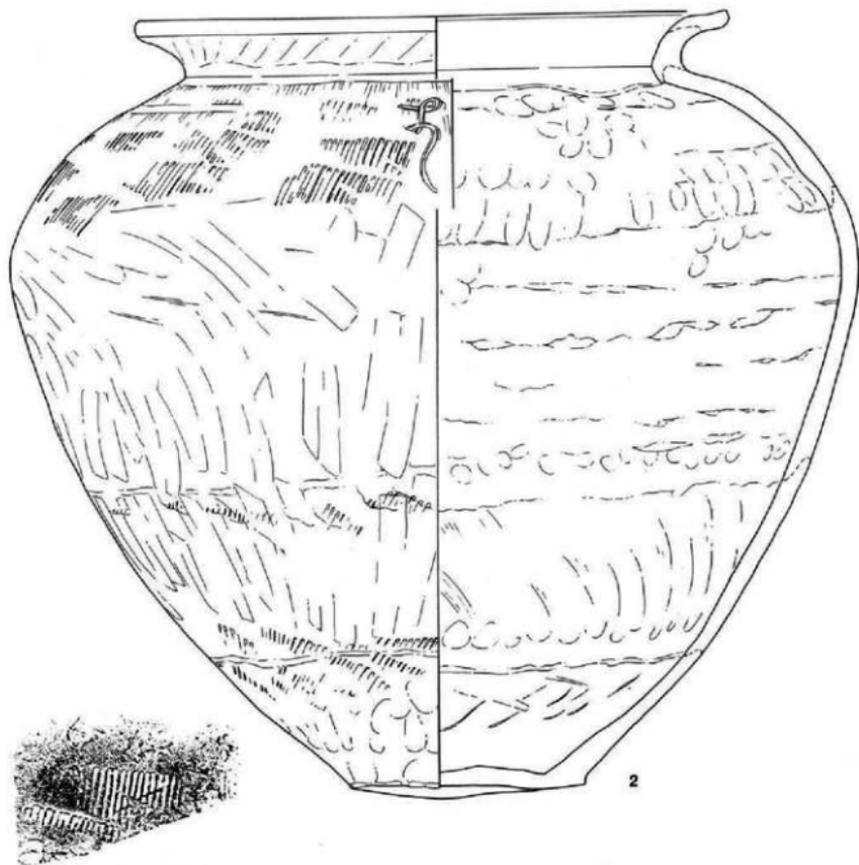
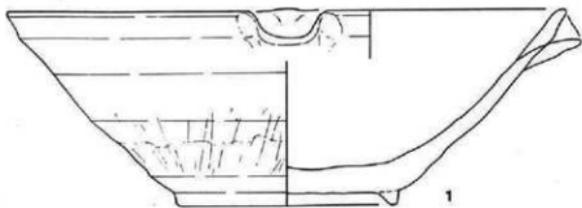
経筒の圧痕の範囲

経筒下の遺物 (白磁・埴) 出土状況1.

経筒下の遺物 (扇・数珠・埴) 出土状況2.

0 20cm

図50 経塚平面図・断面図・外容器・経筒・副納品出土状況図 (トレンチ13)



外容器 外面の叩き目

0 20cm

図51 経塚外容器（トレンチ13）

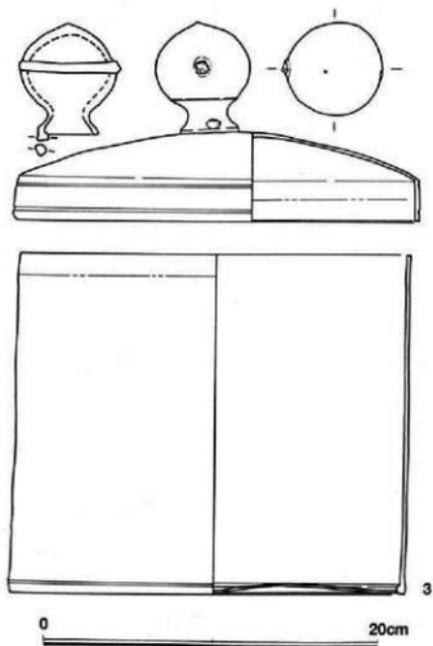
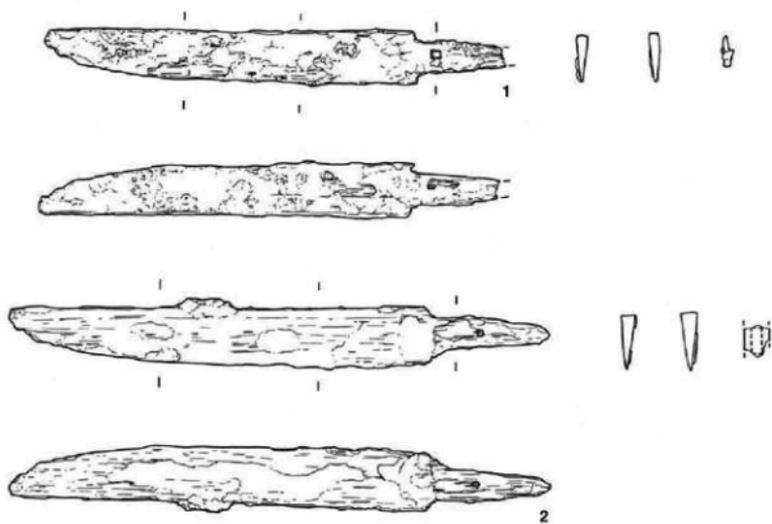
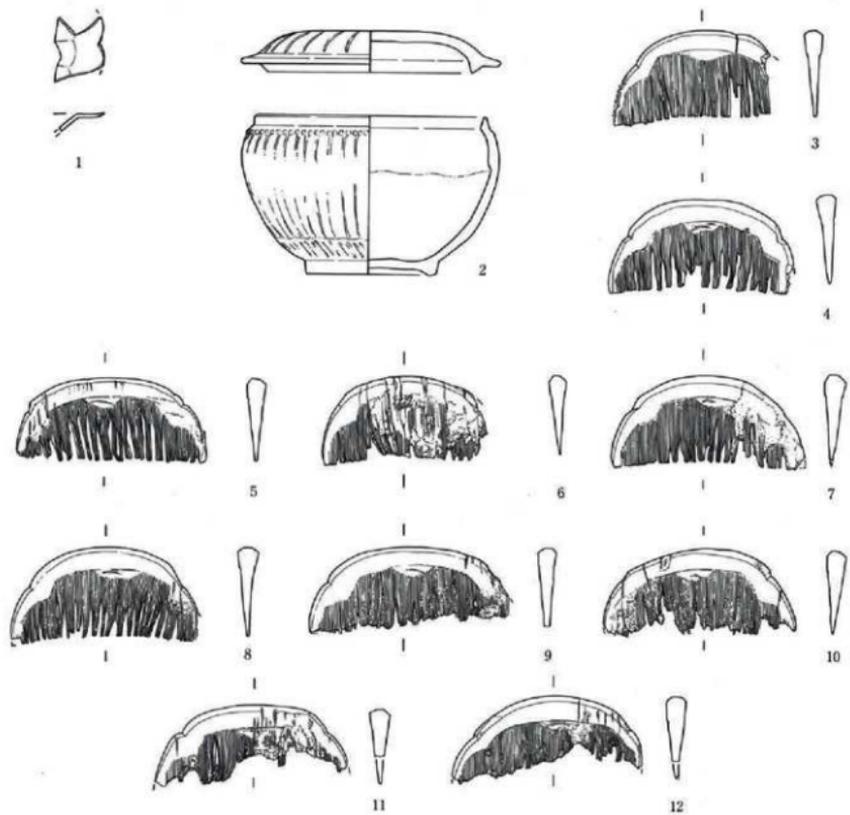
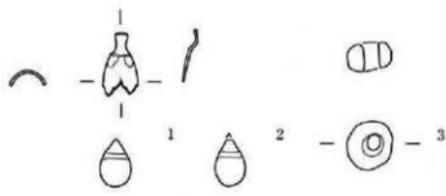


図52 経塚出土腰刀・経筒（トレンチ13）



0 10cm



念珠房飾りの滴

0 5cm



念珠観王 4

図53 経塚出土副納品 (白磁壺・権・念珠)

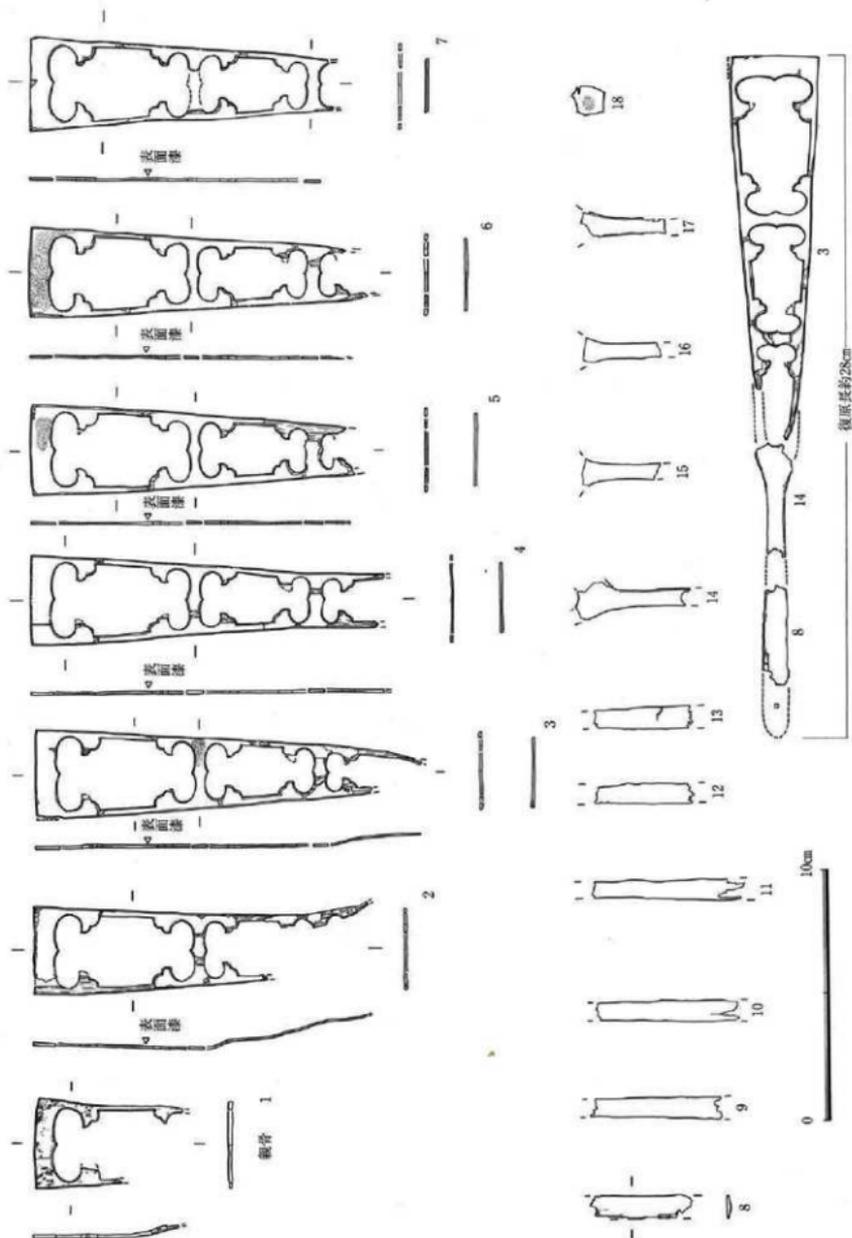


図54 経塚出土副納品 (骨彫骨の類)

第3節 西ヶ谷の調査

(1) 西ヶ谷の遺構確認調査 (図版39)

西ヶ谷は永福寺別当坊、僧坊があったとされる谷だが、昭和40年代の宅地造成に伴って尾根筋を切り崩し、谷間の大部分が埋め立てられてしまい現在谷の入口から奥に約120mの範囲が史跡地として残されているに過ぎない。現在谷間が遊水池となり谷間の流れ水が年間を通して途切れることはない。谷内に残された平場を中心に調査地点を3ヶ所設定した。遺構埋没深度は、現地表から土丹で埋め込んだ遺構確認面まで約40~50cmあり、地表まで腐植土と若干のかわらけ片を含む、明茶灰色砂質土と茶灰色砂質土(畑の耕作土)が堆積している。土丹面を掘り抜くと下約60cmで、地山面の上面に貝殻を含む砂を薄く敷き詰めた面が確認されている。

設定した場所は、西ヶ谷の入口を塞ぐように地業された、高さ3m程の高台状の高まり(昭和56年度試掘調査)の北西側に広がる約400m²ほどの平場である。

a. H8-28トレンチ (図55)

最近まで真竹の竹林であった800m²程の平場である。40cm程の表土と旧耕作土層には竹の根が入り込んでいた。これを剥ぎ取ると土丹地業面が露出し、土丹面上から東西方向に土丹塊を石垣の基礎状に並べた遺構、東西方向に延びる溝、土壌等を検出した。

十字に設定したトレンチの北端で、土丹層を掘り抜いて下の土層状況を確認したところ、厚さ約1mの土丹層の下は、厚さ10cm程の灰褐色弱粘質土層と、薄く細かな貝を含む砂層が暗黒灰色粘質土層(地山)の上に堆積していた。地山面まで地表から約150cm程である。

遺物は土丹層中から、永福寺I期の瓦片、瀬戸天目茶碗片、かわらけが出土している。図示できるだけの資料が出土しなかったが、細片を見て行くと14世紀中~15世紀代のものが中心である。

b. H8-29トレンチ (図55)

遺構面上に1m程の表土が堆積している。表土の淡茶灰色土層は28トレンチに比べやや粘性が強く、細かな土丹粒が含まれている。遺物は出土しなかった。

c. H8-30トレンチ (図55)

29トレンチと同様に1m程の表土が堆積している。この表土を掘り下げると岩盤面が露出する。遺物は出土しなかった。

- 11. 灰褐色粘質土層、上月、かわらけ、灰を少量含む
- 12. 土丹層、表面に薄黒く貝殻層が認められている
- 13. 褐色灰泥質土層、中厚砂土
- 14. 褐色灰泥質土層、13層より薄まっている

- 1. 淡茶色土層 (黄土)
- 2. 暗茶色砂質土層、細り悪い礫状体土
- 3. 土丹層、上の方では多量、下の方では40cm厚の上付
- 4. 茶褐色粘質土層、よく練っている
- 5. 暗茶褐色砂質土層、細り悪い
- 6. 茶褐色粘質土層、土丹層 (50mm-10cm厚) を含む
- 7. 明褐色土層、かわらけ片を含む
- 8. 黄褐色土層
- 9. 黄褐色土層、8層に比べるとより練まっている
- 10. 暗茶褐色土層

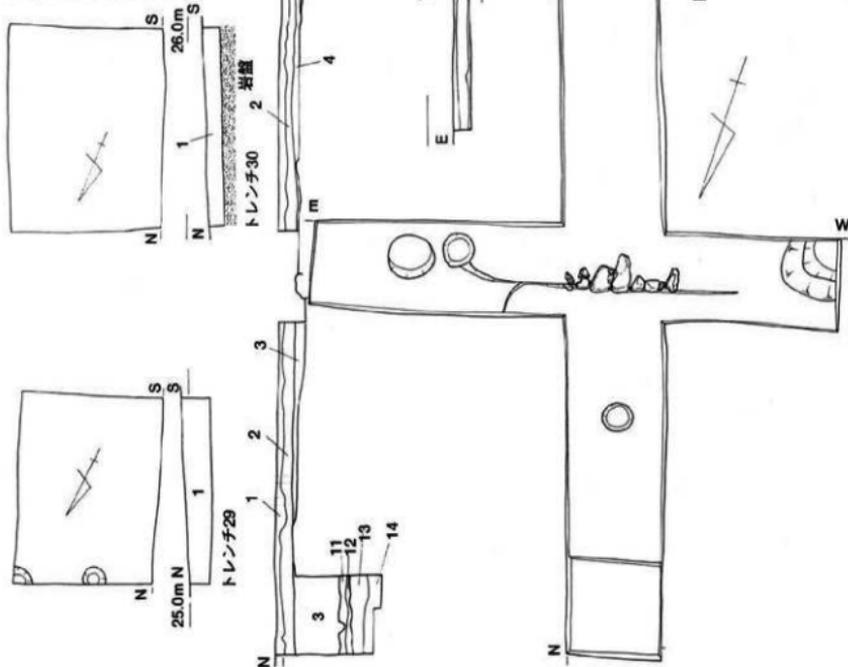


図55 西ヶ谷 (トレンチ28・29・30)

第5章 まとめ

発掘調査により、永福寺の伽藍配置が明らかになった。二階堂を中心に両脇堂と呼ばれた、阿弥陀堂、薬師堂が東向きに並び立ち、堂前面の庭園に向かい翼廊が延びる。正面池中には二間幅の橋が架けられ、遣水も造られていた。浄土寺院として平泉の毛越寺、無量光院、京都では法勝寺、平等院、法成寺らが知られているが、永福寺もまた浄土を具現化するため造られた寺であるといえよう。

I期 創建期（12世紀末）

・建物

東向きの二階堂を中心に両脇堂として、左側（南）に阿弥陀堂、右側（北）に薬師堂を配し、三堂ともに基壇は木製基壇であった。更に両脇堂より前面の池に向かい翼廊が延び、中門を経て釣殿へ至っていた。この木製基壇は永福寺の大きな特徴の一つである。平泉、毛越寺内円隆寺の金堂、廊に類例を見ることが出来るが、木材で組み上げられた基壇が縁の下に隠れてしまうことから、石積みの壇正積基壇とは異なり亀腹基壇の縁を木材で化粧したと見ることが出来る。

三堂を並べてしまうことや、堂舎に付随する翼廊の形態は、浄土寺院の他に貴族の住宅に見られる寝殿造りの建物（主殿・対屋、廊と中門、釣殿）の形態に関連性を見いだすことが出来る。このように創建期の永福寺は寺院でありながら、堂舎に翼廊・釣殿といった住宅建築を取り入れた独自性が感じられるものである。

・庭園

境内の造成は、二階堂のほぼ中央から北側一帯は陸地と池底を削りだし、二階堂中央から南側一帯は陸地・池底ともに土砂を積み上げる地業を行っている。菴池の形状は、北岸は尾根の先端部を削り残し岩を並べた坪状に、また西ヶ谷より北翼廊脇を抜け池に遣水を引き込んでいた。遣水は100分の3勾配で設計されていた。西岸は一面砂利を敷き詰めた洲浜、東岸は岩肌を見せていたと推察される。二階堂正面に長さおよそ35m、幅4.8mの橋が架けられた。南岸は池中に島が造られ、おそらく西岸と同じように洲浜だったと推察される。庭造りに京都の作庭家関わっていることから、作庭記などとの関連も注目できる。

II期 寛元・宝治年間（13世紀中頃）

・建物

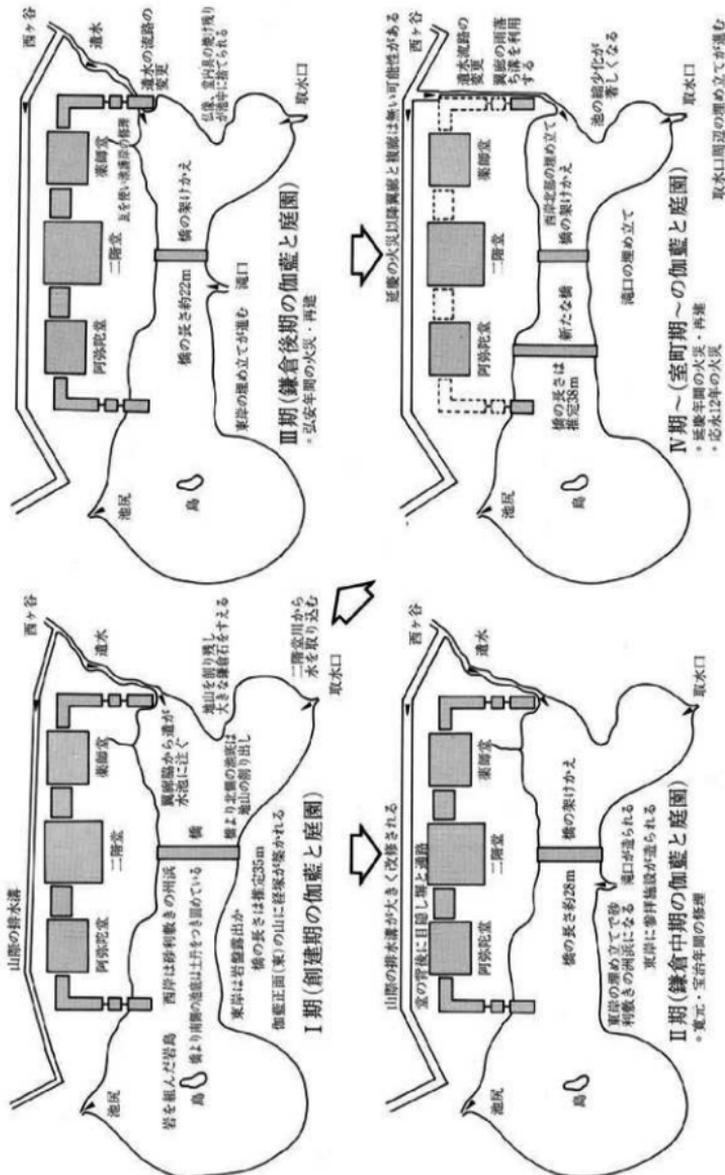
寛元・宝治年間には、建物の解体修理といった大規模な修理が行われたと考えられる。特徴的であった木製基壇は石積みの壇正積基壇に変更される。北翼廊の東西列の柱も礎石から掘立柱に変更されたが位置は変更されていない。頼朝創建時の規模・形状は踏襲されたものとする。

・庭園

菴池の西岸・南岸は砂利を敷き詰めた洲浜、東岸は大規模な埋め立てが行われ洲浜となり、二階堂正面に御拝施設とも考えられる建物が建てられた可能性がある。二階堂正面の橋の長さが、池の埋め立てと共に長さ28mと短くされる。橋の南脇に新たに滝口（取水口）が造られる。堂の背後、排水溝は幅を広げ改修される。

III期 弘安年間（13世紀後半）

・建物



南岸は後世の河原のため築き直している

図56 通構堂遺園 (I期～IV期)

弘安三年の火災後、再建される。礎石に残る火災の痕跡、翼廊の礎石と礎石下に遺存する柱根の位置等から中心伽藍の規模・形状は保たれたと考えられる。ただし、瓦の出土量が減り大きさも小型化することから、屋根は総瓦葺きではなく、棟瓦を用いた栓皮葺き等に変更されたと考えられる。

・庭園

北岸は岬状の景観を保つが、北翼廊脇の遣水流路が廊の下を潜るよう付け替えられる。東岸の埋め立てが進み、併せて橋の長さは22mと更に短くなる。西岸・南岸の洲浜の形状に大きな変化はないが、敷かれている砂利が小さくなる傾向と、岸辺に沿って景石が並べられるような傾向が見られる。池中に堂内具類（仏像、器物、飾り金具等）の焼け残りが廃棄される。

Ⅳ期（14世紀以降）

・建物

延慶三年の火災後、再建される。複廊・翼廊位置で確認されたかわらけ溜りなどから、複廊・翼廊は再建されずに三堂と釣殿・橋のみの再建と考える。

・庭園

下層（14世紀前半）

下層は池底を貼り増すなど、苑池全体の埋め立てが進む。廊の下を潜っていた遣水の流路が付け替えられ、再び北翼廊脇から池に注ぎ込まれる。ただし流路は北翼廊北辺雨落ち溝を利用したと考える。東岸に造られていた滝口は、多量の瓦片と鎌倉石切石が投げ込まれて埋め戻されている。二階堂正面の橋の他、新たに阿弥陀堂正面にも橋が架けられる。この新しい橋は、橋脚を池底に埋め込むのではなく、鎌倉石切石を池底に並べ、地覆材を寝かせこれを利用して橋を渡したと考える。

上層（14世紀後半以降）

池全体がさらに縮小し、北側は陸地化・乾燥化が進んでいたと思われる。景石なども僅かに頭をのぞかせているだけとなり、この時期に補充された景石は池の堆積土の上に置かれているだけである。

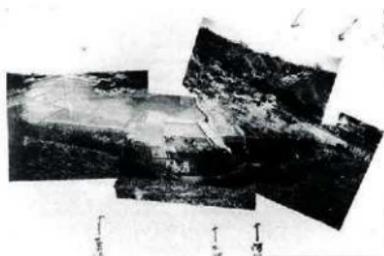
山の調査

伽藍正面（東）の山の平場調査では、山際で岩盤を削り込んだ複数の溝や遺構が検出され、数多くの遺物（青磁水注、硯、手焙り、火箸）が出土したことから、僧坊もしくは関連のある建物があった可能性が指摘できる。

伽藍正面（東）の山の尾根上の調査では、小規模ではあるが堀切が確認されている。また永福寺創建期の経塚が二階堂の真東で発見され、埋納状況の確認と出土状況の詳細な記録を取りながら、調査を進めることができたことは特筆に値する。埋納者が誰かと大いに期待される所であり、今後、個々の出土品の調査研究が進むものと思われる。

伽藍背後（西）の山の尾根は、人為的に大きく手が増えられ、場所によっては高さ10mも削られていたことが調査から判明した。調査で確認した尾根上の岩盤面の表面は、風化が著しく長期間露頭していたと考えられる。このことから伽藍背後の山は、屏風状に切り立った岩盤面が露頭した、余り樹木の生えていない風景であったと推察される。曲輪状の平場や幅7m、深さ3m以上もある大きな堀切は、東の山の尾根で検出された小規模な堀切の存在と併せ、「吾妻鏡」寶治元（1247）年六月五日の三浦合戦時「当寺は殊勝の城郭たり」と記述された永福寺の優れた城郭的な防御施設の一端が明らかになったものである。幕府（頼朝）の権威の象徴としての姿、將軍たちの行った蹴鞠、花見等から華やかな別業的な永福寺の姿の他に、周辺の山中に築かれた防御施設の存在から新たな姿が浮かび上がってきた。

写 真 图 版



1. 西の山中腹より中心畑藍及び紅ヶ谷



3. 西の山中腹より菊池南部



5. 南から北の西ヶ谷方面



6. 作業風景



2. 理智光寺谷方面



4. 阿弥陀堂付近より紅葉ヶ谷方面



7. 作業風景

昭和28年当時の永福寺



1.S57-B 手前は滝口 (南から)



2.S57-C 東岸陸部 (西から)



3.S57-A 東岸建物 (西から)



4.S56-1 西ヶ谷入り口 土盛上面 (東から)



5.S56-2 北岸 (南から)



6.S56-3 東岸 (西から)



7.S56-4 西岸南翼廊先端 (東から)



8.S56-6 北複廊礎石・根石 (西から)



9.S56-5 島 (南東から)



1.二階堂透景(東から)

S58



2.北側面(東から)

S58



3.南側面(南から)

S58



4.北側面(北から)手前は北複廊

H1



5.堂前柱木製基壇束柱列(南から)

H1



6.堂前柱木製基壇束柱列(南から)

H1

7.木製基壇束柱「二束1」

H1



8.木製基壇束柱「二束2」

H1



二階堂1

図版4



1.二階堂（東から）周囲の柱穴は木製
基壇束柱の攝方 H1



3.正面階向かって左親柱（二正階1） H1



4.正面階向かって右親柱（二正階2） H1



2.正面階 H1



5.北側面階 H1



6.南側面階 H1



1.阿弥陀堂（東から）周囲の柱穴は木製
基壇東柱の攝方 S60



3.堂正面と階（東から） S60



4.堂正面と階（東から） S60

6.堂背後（南から）木製基壇東柱攝方 S59



2.背後（北西から）左手は南複廊 S59



5.堂側面（北から）奥に見えるのは南翼廊 S60



7.堂背後（北から）木製基壇東柱攝方 S59

図版6



1. 基壇に残る礎石掘方16と版築

S60



2. 礎石掘方7に残る根石と敷き込まれた瓦

S60



3. 礎石掘方12

S60



4. 礎石掘方16

S60



5. 木製基壇東柱 [阿東43]

S59



1. 薬師堂正面（東から）

S60



3. 堂側面（南から）手前3つの掘方は北柱跡

S61



2. 階の彫桁受ける礎石と軸高機梁立

S61



4. 堂背面（西から）

S61



5. 堂側面（北から）右手、北から南に延びる石列は雨落溝

S61



6. 堂背面（南西から）

S61



7. 堂前辺の木製基礎東柱列（東から）

S
61



8. 堂北辺の木製基礎東柱列（東から）

S
61

図版8



1.堂西辺の雨落ち溝（東から）

S61



2.堂西辺の木製基礎東柱列と
雨落ち溝石列（北から）

S61



3.堂西辺の木製基礎東柱列と
雨落ち溝石列（南から）

S61



5.堂南辺の木製基礎東柱列
（西から）

S
61

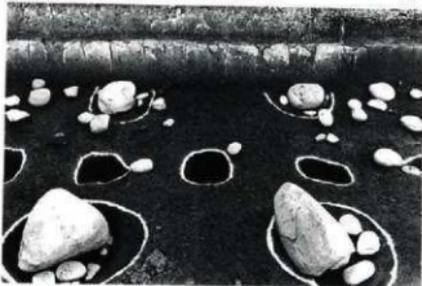


4.堂北辺の木製基礎東柱列
（西から）

S
61

6.堂北辺に取り付く北翼面礎石1・2（南から）

S61



筆師堂2



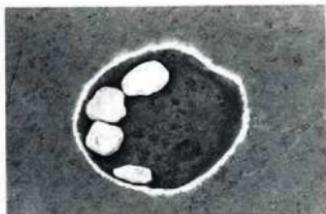
1.礎石2 (南から)

S61



2.礎石7根石 (南東から)

S61



3.礎石16根石 (南西から)

S61



4.基壇東柱「臺東39」(西から)

S61



5.基壇東柱「臺東37」(西から)

S61



6.基壇東柱「臺東34」(西から)

S61



7.基壇東柱「臺東2」と緑の礎石(南から)

S 61



8.基壇東柱「臺東1」と緑の礎石(南東から)

S 61

図版10



1.北複廊（北から）奥は二階堂

H1



2.北複廊と薬師堂の取り付け（北から）

S61



3.北複廊と二階堂（南から）

H1



4.南複廊（北から）奥は阿弥陀堂

S59



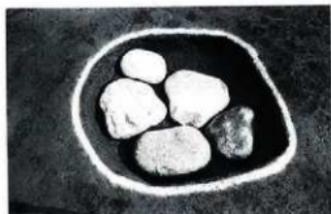
5.南複廊（南から）手前は阿弥陀堂

S59



6.南複廊（西から）

S69



7.北複廊礎石18根石（西から）

H1



8.北複廊礎石15根石（西から）

H1



1.北黒路東西列（西から） S62



2.北黒路南北列（南から） S62



3.北黒路東西列（東から） S62



4.北黒路東西列Ⅲ期礎石17（東から）
横石に使われたⅡ期瓦が見える。 S62



5.北黒路南北列礎石8に残る柱痕跡（東から） S62



6.北黒路南北列礎石4（南から） S62



7.北黒路南北列礎石3（東から） S62

北黒路1

図版12



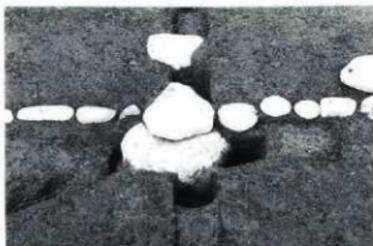
1.北翼前東西列Ⅲ期礎石(西から) S62



2.東西列礎石9の上に据えられたⅢ期の礎石(南から) S62



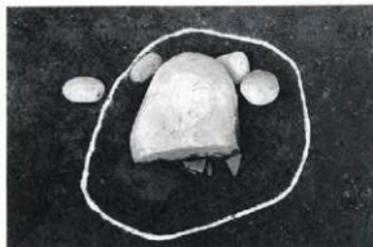
3.北翼前北西角。礎石11の上に据えられたⅢ期の礎石(南から) S62



4.東西列礎石14の上に据えられたⅢ期の礎石(南から) S62



5.東西列礎石20掘方内礎石とⅡ期の掘立柱柱根(東から) S62



6.東西列Ⅲ期の礎石18に残る柱の痕跡(南から) S62



7.南北列西辺の雨落ち溝(北から) S62



北翼廊2 8.東西列礎石17掘方内に遺存するⅡ期掘立柱柱根(東から)S62



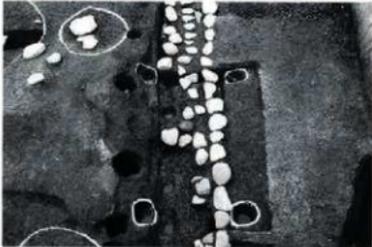
1.北中門（西から） S63



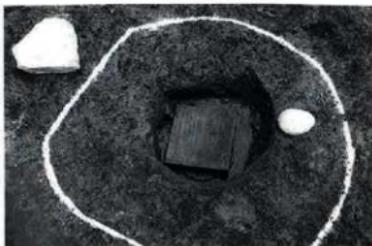
2.北中門（北から） S62



3.北中門西側棟柱Ⅲ期礎石24（西から） S62



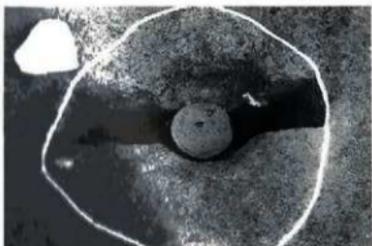
4.北中門北辺雨落ち溝に架かる橋（東から） S62



5.北中門西側棟柱礎石24下Ⅱ期掘立柱礎板（西から） S62



6.北中門礎石23下に遺存するⅡ期掘立柱柱根（南から） S62



7.北中門西側棟柱礎石24下Ⅰ期掘立柱柱根（西から） S62



8.北中門東側棟柱礎石27下Ⅰ期掘立柱柱根（西から） S62

北中門

図版14



1.北釣殿IV期 (東から) S63



5.北釣殿I・II期 (北から) S63



6.北釣殿I・II期 (東から) S63



7.北釣殿I・II期 (西から) S63



2.北釣殿III期 (北から) S63



3.北釣殿III期 (南東から) S63



4.北釣殿III期 (西から)
手前北中門 S63



北釣殿1 4.北釣殿I・II期 (南東から) S63



1.北釣殿Ⅲ期礎石30下のⅠ期・Ⅱ期遺立柱柱礎の
遺なり S63



2.北釣殿礎石31下に遺存する遺立柱柱礎と布籠り S63



3.北釣殿先施礎石40下に遺存する面取り角柱と
礎石39下に遺存する面取り角柱をつなぐ横木 S63



4.北釣殿先施礎石39下に遺存する面取り角柱と
布籠り内に遺存する横木 S63



5.面取り角柱と横木 S63



6.布籠り断面 S63



7.面取り角柱と横木の接合部分 S63



8.面取り角柱と横木の接合部分 S63

北釣殿2

図版16



1.南翼廊（北から）手前は阿弥陀堂 S60



2.南翼廊（東南から） S60



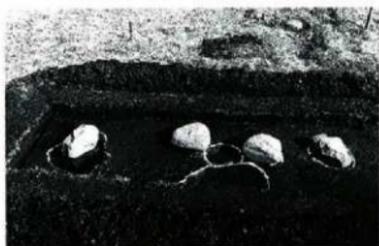
3.南翼廊・南中門（東から）南辺は近代溝で削平される。 S60



5.東の池に延びる廊（東から） S60



4.南翼廊東西列・南中門 S60



6.池中の礎石（西から） S60



7.南翼廊南北列（南から） S60

南翼廊1



1.南翼廊南西角礎石11掘方内に遺存する根石 S60



3.南翼廊礎石22掘方内に遺存する根石 S60



5.南翼廊礎石20掘方内に遺存する根石（東から） S60



7.南中門棟柱礎石27下の掘立柱柱根 S60



2.南翼廊礎石16掘方内に遺存する根石と瓦（北から） S60



4.南中門礎石25掘方内に遺存する根石（北から） S60



6.南中門棟柱礎石27掘方内に遺存する根石と掘立柱柱根 S60

南翼廊2

図版18



1.北複廊前から北釣殿まで（南から） S63



5.二階堂前から南複廊まで（北から） H2



2.薬師堂前面（南から）瓦を用いたⅢ期の補修 S63



6.北釣殿から北複廊まで（北から） S63



3.二階堂・薬師堂間の景石（南から） S63



7.薬師堂前面（北から） S63



4.南複廊前から二階堂まで（南から） H2



8.北釣殿から（北から） S63



1.南翼廊から阿弥陀堂まで（南から） S60



5.二階堂前から南複廊までの池底（北から） H2



2.南翼廊から阿弥陀堂まで（東から） S60



6.北複廊から二階堂までの景石と洲浜 H2



3.薬師堂前の洲浜（南から） S63



7.南複廊前の砂利敷きの洲浜 H2



4.北複廊前の景石と遺物出土状況 S63



8.薬師堂前の砂利敷きの洲浜 S63 苑池西岸2

図版20



1.二階堂前面の規則正しい布張り柱穴（東から） H2



2.二階堂前面の規則正しい布張り柱穴（西から） H2



5.北複廊から釣殿まで（南から） S63



7.薬師堂前の瓦を用いた汀の補修 S63



3.二階堂前面の規則正しい布張り柱穴（北から） H2



4.横の橋で検出した湧水遺構（北から） H2



6.薬師堂前から北複廊まで（北から） S63



8.薬師堂前の瓦を用いた汀の補修 S63

苑池西岸3



1.南岸方向（北から） H3



2.池中の立石（伝島山石） H3



3.土丹が敷きつめられた池岸（東から） H3



4.南岸方向と紅ヶ谷（西から） H3



5.島の石組み（北から） H3



6.島の石組み（西から） H3



7.島の石組み（上から） H3



8.島の石組み（東から） H3

苑池南岸・島1



1.島の全景（北から）

H3



2.島の全景（北から）

H3



3.石組み（北から）

H3



4.石組み（北から）

H3



6.島の全景（南から）

H3



5.石組み（東から）

H3



7.石組み（南から）

H3



1.Ⅲ・Ⅳ期水際の景石（西から） H6



3.Ⅲ・Ⅳ期水際にならぶ景石（南から） H5



2.Ⅲ・Ⅳ期水際の景石（東から） H6



4.Ⅲ・Ⅳ期水際の景石（西から） H6



5.東岸陸部建物遺構（東から） H6



6.東岸Ⅲ・Ⅳ期汀と景石（北から） H5



7.東岸Ⅲ・Ⅳ期汀と景石（南から） H5



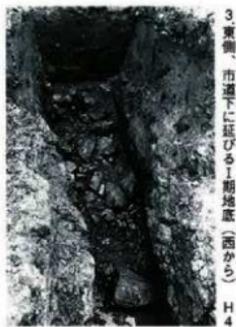
8.東岸Ⅲ・Ⅳ期汀と景石（北から） H5

苑池東岸1



1. I期の池底(西から)

H4



3. 東側、市道下に延びるI期池底(西から)

H4



2. II期に埋め立てられたI期池底と堆積土(北から)

H4



4. 左手市道下に延びるI期池底(北から)

H4



5. 大型の土丹が敷きつめられたI期池底(西から)

H4



6. 左手I期池底・阿弥陀堂前の横とIV期池底(西から)

H4



7. III期景石と洲浜の砂利(南から)

H5



8. 池中に置かれた景石(北から)

H4



1. 池中の立石 (西から)

S63



2. 北岸にならぶ景石 (東から) 右手奥に初期遺水

H8



3. 北岸水際の景石 (南西から)

H8



4. 削り出された地山面に据えられた景石 (東から)

H8



5. 罅状に削り出された地山面に据えられた景石 (東から)

H7



6. 罅状に池中に延びる北岸 (東から) 右手奥は西ヶ谷

H7



7. 地山面に据えられた景石 (東から)

H8



8. 水際にならぶ景石

H7

菟池北岸1

図版26



1. 舁状に張り出す北岸（西から）

H7



2. 水を張った状態の北岸から取水口（南西から）

H7



3. 池中出土の宇瓦（東から）

H8



4. 水を張った北岸（東から）

H8



5. 水を張った北岸（東から）

H8



6. 水を張った北岸（東から）

H8



7. 水を張った北岸（東から）

H8



8. 水を張った北岸（西から）

H8

苑池北岸2



1.橋全景（東から） H5



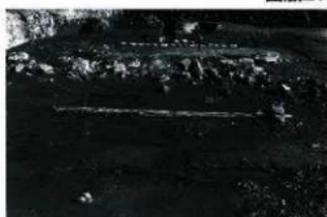
3.橋とⅢ・Ⅳ期の東岸（西から） H5



6.橋基礎材を固定する北端の杭（北から） H5



8.橋全景（北から）基礎材の上にⅣ期橋の部材等が散乱 H5



2.途中出土の布張り2内に遺存する橋の基礎材（西から） H7



4.橋基礎材の上を覆うⅣ期池底（北から） H5



5.橋基礎材の中心のホゾ穴（北から）
円形に橋脚の抜けた跡が残る H5



7.橋基礎材の北端のホゾ穴（東から） H5



橋1（二階堂正面） 9.橋基礎材（北から） H5



1.基礎材南横ホゾ穴の上に乗せられた補修材(南から) H5



2.基礎材の上に乗せられた補修材(東から) H5



3.基礎材の上に乗せられた補修材(南から) H5



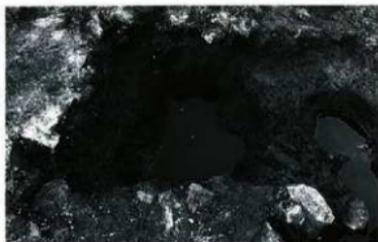
4.基礎材中央ホゾ穴と南端補修材(北から) H5



5.基礎材の下、I期池底(北東から) H5



6.横布張り4内遺存する基礎を固定していた杭(南から) H5



7.布張り6(南から)



8.布張り5の北側に遺存する杭(西から)

H2
横2(二階堂正面)

H2



1. II期の橋（西から）東岸の取り付け部 H5



4. 橋（東から）西岸の取り付け部 H2



2. II期の橋（西から）東岸北側橋脚 H5



3. II期の橋（西から）東岸南側橋脚 H5



5. IV期の橋（東から）西岸の取り付け部 H2



6. II期橋（南から）東岸の取り付け部 H5



8. II期橋（南から）東岸の中央橋脚 H5



7. II期橋（北から）東岸の取り付け部 H5



9. II期橋（南から）東岸の橋脚列 H5

橋3（二階堂正面）

図版30



1.阿弥陀堂正面IV期構の全景（西から） H4



3.IV期構の全景（南から） H4



2.IV期構の全景（西から） H4



4.IV期構と1期の池底 H4



5.IV期構の全景（北から） H4



6.IV期構の基礎全景（東から） H4



7.IV期構の基礎・池底と1期の池底 H4

(阿弥陀堂正面)



1. IV 貯池底に列をなす橋の基礎 (東から) H4



2. 規則正しくならぶ橋の基礎 (西から) H4



3. 基礎に用いられた基礎の石材 H4



4. 沈下防止で入れられた基礎の下の木材 H4



5. 沈下防止で入れられた木材 H4



7. 橋の基礎と木材



6. 橋の基礎と木材 H4

H4
橋5 (阿弥陀堂正面)



1.北釣殿向かって右脇のI・II期遣水の注ぎ口と釣殿を横断するII期遣水の流路(東口) S63



2.瓦を用いて埋めたられた釣殿を横断していたIII期の流路(南から) S63



4.北釣殿脇のI・II期遣水の注ぎ口(北から) S63



3.北釣殿を横断するIII期遣水の流路(北から) S63



5. I・II期遣水の注ぎ口 平らな岩を掘え低い滝にしている(南から) S63



6. I・II期遣水の注ぎ口(東から) S63



7. I・II期遣水の注ぎ口と周囲の景石(南から) S63



8. I・II期遣水の注ぎ口、I期池底とII期池底(南から) S63

遣水1



1.西ヶ谷から東に向かう遣水流路と南に向かう2・3溝 H6
(北から)



2.遣水土層断面(東から)



3.西ヶ谷から手前の北釣殿へ
向かうⅢ期遣水の流路(東から)
流路中程にアカマツの標柱が見える H6



4.左手の西ヶ谷から東へ向かうⅢ期遣水(西から) H6



5.Ⅳ期遣水の水溜め(東から) S62



6.北釣殿の東、Ⅳ期遣水の注ぎ口(西から) H8



7.Ⅳ期遣水の注ぎ口(東から)手前の石は
苑池北岸の景石 H8



8.Ⅳ期遣水の流路中にある景石(西から) H8

遣水2

図版34



1. 滝口（西から）中央が凹みかなりの水流があった H5



2. 滝口の岩壁面（西から） H5



3. 滝の注ぎ口（東から） H5



4. 滝の注ぎ口（北東から） H5



5. 滝口土層断面（南から） H5



6. 滝口土層断面（南東から） H5



7. 滝口風景（東から） H5



8. 滝口風景（南西から） H5

滝口



1.取水口と苑池北岸の柵 (西から) H7



2.取水口の検出状況 H7



4.鎌倉石切石の取水口と
導水路 (南から) H7



3.導水路の土層断面 (南から) H7



5.導水路風景 (南から) H7



6.取水口と導水路風景 (北から) H7



7.注ぎ口中央に据えられた景石 (北東から) H7



8.取水口と導水路風景 (南東から) H7

取水口



1.西ヶ谷から南に向かう2・3溝と東に向かう
運水の流路(西から) H6



2.2・3溝の土層断面(南から) H6



3.3溝(南から) H1



4.3溝(北から) H1



5.幅が広く直線的な2溝(北から) H1



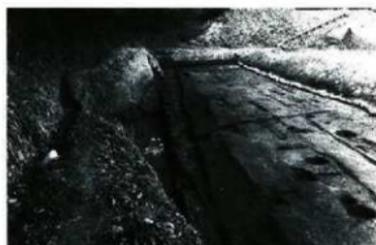
6.南に向かい流れ下る2・3溝の流路(北から) H1



7.断面箱状の2溝(北から) H1



8.3溝を削っている2溝
(北から) H6



9.左手西の山腰を北から流れ下る2・3溝(南から) H1



1.地山面を掘り込み直線に延びる
4溝の流路（北面から） S63



2.4溝の土層断面（西から）

S63



4.山間の2溝と手前の北斜面の間、南北に延びる
堀の柱穴列（東から）

H1



3.山際2溝並、堀の柱穴列（北から）

H1



5.2・3溝並堀の柱穴列（北から）

H1



6.南に一直線に延びる堀の
柱穴列（北から）

H1



7.北に延びる堀の柱穴列（南から）

H6

溝と堀

図版38



1.H8-14トレンチ (東から)
二階堂背後



2.H8-15トレンチ (北から)



3.H8-17トレンチ (西から)



4.H8-18トレンチ (西から) 歪れた岩盤面



5.H8-25トレンチ (北から) 西ヶ谷尾根線



6.H8-20トレンチ (北から)



7.H8-19トレンチ (北から)



8.H8-26トレンチ (北から)



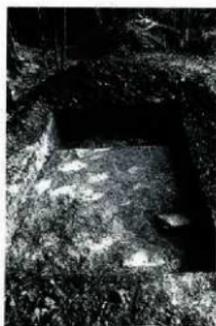
9.H8-27トレンチ (北から) 堀切



10.H8-27トレンチ (南から) 堀切



1.H8-11トレンチ (南から) H8
トレンチ北壁は垂直な岩盤の壁



2.H8-1トレンチ (北から) H8



3.H8-12トレンチ (東から) 深さ2.5mの堀切 H8



4.H8-12トレンチ (北東から) H8
堀切



5.H8-28トレンチ (東から) H8
土丹地表面



7.H8-30トレンチ (南から) 岩盤面 H8



6.H8-28トレンチ (西から) 西に向かい落ち込む H8



8.H8-29トレンチ (南から) 土丹地表面 H8

図版40



1. 飯塚の位置（西山から）三角印の下、
右手の谷は紅葉ヶ谷 H8



5. 土圧で潰れた外容器と蓋（ともに滯美）の下に経筒が
見える。左手は鍬刀。穴の中には炭が充填されていた。 H8



2. H8-13 トレンチ（南から）、 H8
中央の作業員の足もとで横出



6. 蓋に用いられた滯美捏鉢取り上げ直後（南から） H8



3. 発見直後の経塚（西から）上部施設は認められない H8



7. 潰された外容器上部取り上げ後（南から） H8



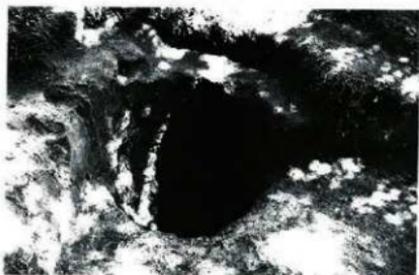
4. 内部は空洞で外容器の炭と周囲の炭が見える

H8 経塚1



8. 経筒出土状況（東から）

H8



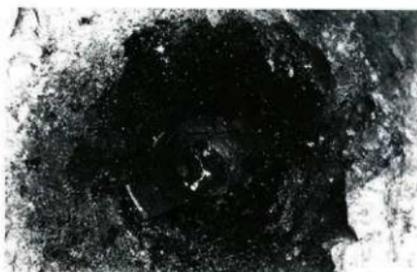
1.経塚全景(西から)

H8



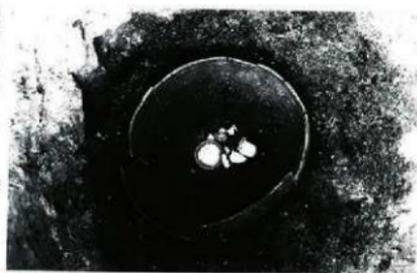
2.経筒取り上げ直後(西から)墓の中、炭の上に経筒の圧痕が残る

H8



5.白磁蓋付小壺取り上げ後の状態(南から)

H8



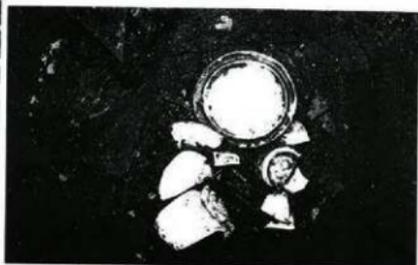
3.経筒下から出土した副納品(北から)

H8



6.椰子10枚、数珠親王、皆形骨の墓(西から)

H8



4.白磁蓋付小壺、椰子、屈骨の出土状況(西から)
経塚2

H8

報告書抄録

ふりがな	くにしていしせきようふくじあと							
書名	国指定史跡永福寺跡							
副書名	国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査報告書							
巻次	遺構編							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	福田 誠 菊川 泉							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	鎌倉市御成町18番10							
発行年月日	平成13年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
ようふくじあと 永福寺跡	かながわけん 神奈川県 かまくらしじにあり 鎌倉市二階堂	14204	61	35度 19分 30秒	139度 34分 14秒	19811205 / 19970131	15,828.2m ²	史跡整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
永福寺跡	寺院跡	鎌倉時代 / 室町時代	二階堂、阿弥陀堂、 薬師堂、庭園（遺 水、橋、取水口）	蓮華文軒丸瓦、巴 文軒丸瓦、唐草文 軒平瓦、涅槃蓮、 控鉢、銅製経筒 堂内具（螺鈿製品、 金剛製品）		源頼朝が創建 した、三堂を 中心とした浄 土寺院		

鎌倉市二階堂

国指定史跡

永福寺跡

国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る

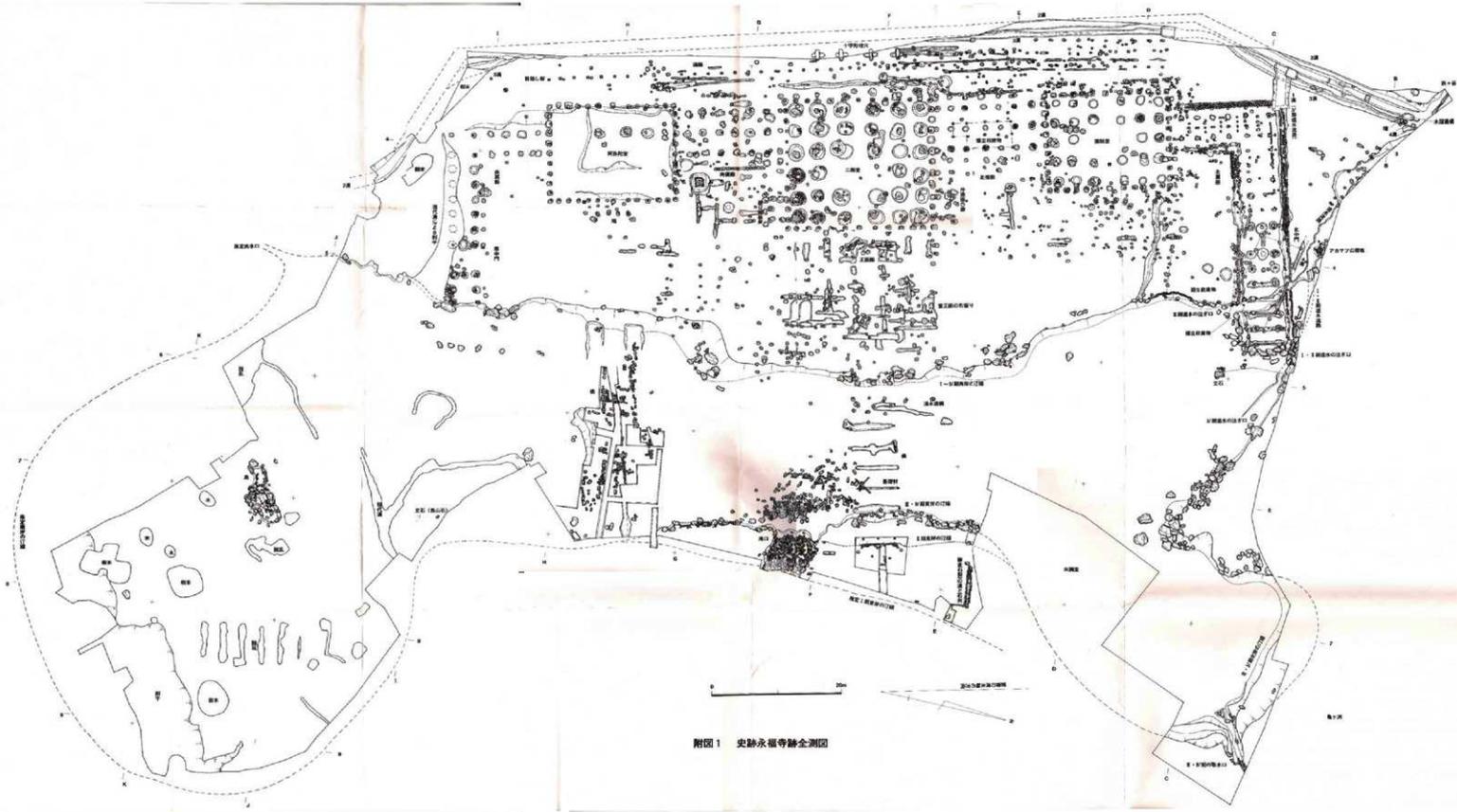
発掘調査報告書

— 遺構編 —

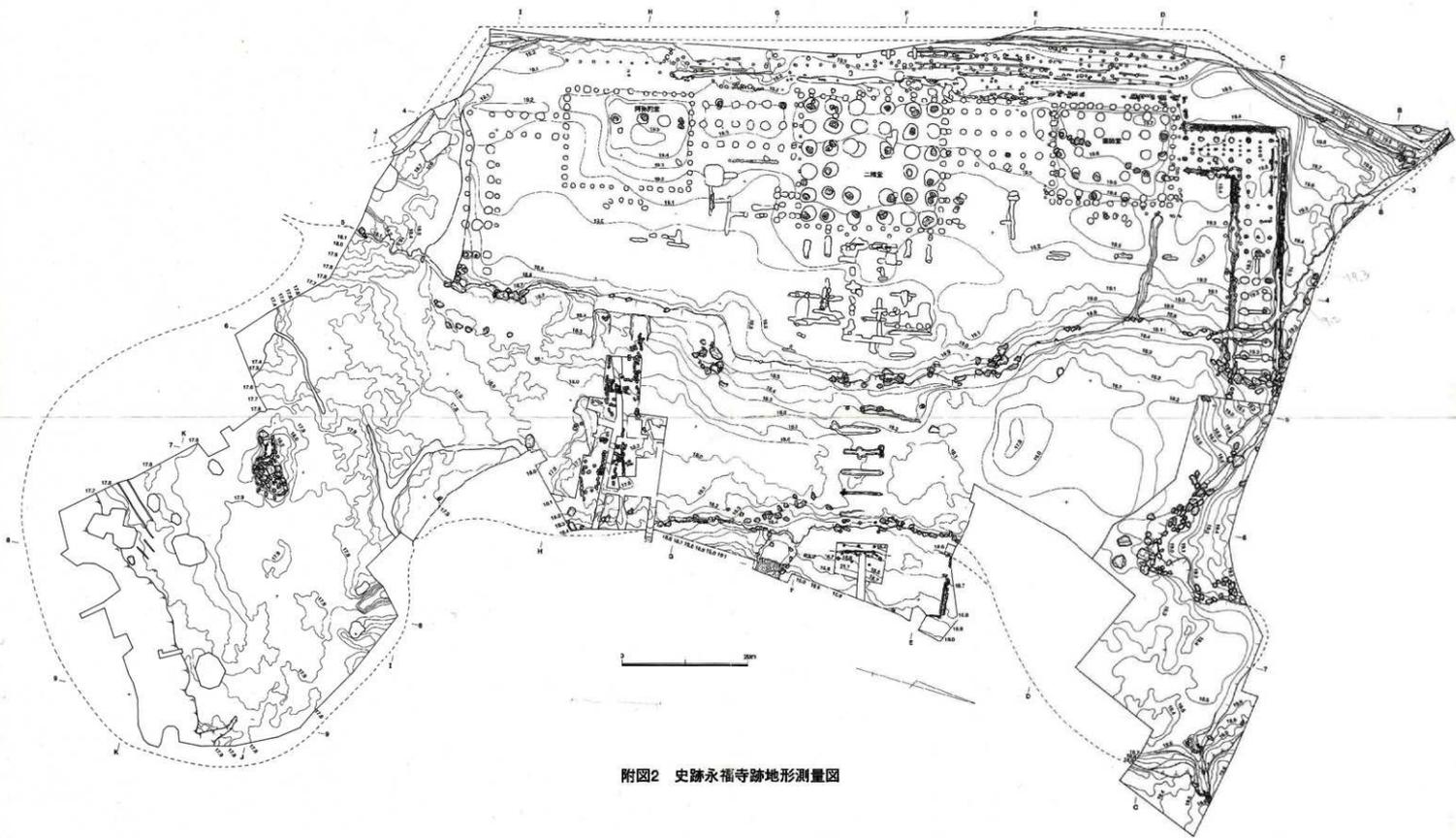
発行日 平成13年3月

編集 鎌倉市教育委員会

発行 株式会社 三光堂印刷



附図1 史跡永福寺跡全測図



附圖2 史跡永福寺跡地形測量圖

